

2025年8月28日(木)

本部企画シンポジウム

🕒 2025年8月28日(木) 17:10 ~ 19:10 🏠 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a107-09] 本部企画シンポジウム 2 / 身体性の価値を再考するー冗長性や不可視性を手がかりにー

コーディネーター:大高 千明(奈良女子大学)、佐野 加奈絵(関西大学) 指定討論者:伊坂 忠夫(立命館大学)

[本部企画-S2-1]

「できる」だけが正解か？

身体の可能性と多様性

*田中 愛¹ (1. 東京学芸大学)

[本部企画-S2-2]

「うまくいく」だけが正解か？

熟達化の非線形科学

*岡野 真裕¹ (1. 神戸大学)

[本部企画-S2-3]

「最速・最短」だけが正解か？

遠回りするランニングの楽しさとGPSアートの活用

*齋藤 祐一¹ (1. 鳴門教育大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

🕒 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏠 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム / スポーツ指導者の幸せとはー成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

[競技スポーツ-SA-1]

心理学に基づく指導者の抱えるストレスとの付き合い方

*筒井 香¹ (1. 株式会社BorderLeSS)

[競技スポーツ-SA-2]

アスリートセンタード・コーチング

*伊藤 雅充¹ (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SA-3]

車いすバスケットボールの指導経験を通しての様々な気づき

*及川 晋平¹ (1. 一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター:出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-1]

国際競技力向上を通じた社会への還元

ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ

*久木留 毅¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

[競技スポーツ-SB-2]

豊かな社会の実現に向けたトップアスリート養成の社会的意義

「活用」の観点から

*菊 幸一¹ (1. 国土館大学大学院)

[競技スポーツ-SB-3]

日本陸連ダイヤモンドアスリート制度にみる競技力と国際的素養を備えた次世代育成

*室伏 由佳¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

[生涯スポーツ-SA-1]

子どもの運動を支える「親子の三間」

家庭と地域の実態とその展望

*香村 恵介¹ (1. 名城大学)

[生涯スポーツ-SA-2]

なぜランニングの授業は不人気で、生涯スポーツにつながらないか

*佐藤 善人¹ (1. 椋山女学園大学)

[生涯スポーツ-SA-3]

スポーツの原点に立ち返る

遊びを通じた地域クラブの取り組み

*永田 厚¹ (1. 特定非営利活動法人スポーツコミュニティ磐田・ポーラスター)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

[生涯スポーツ-SB-1]

競技別パスウェイモデルの構築とその意義

*松井 陽子¹ (1. 仙台大学)

[生涯スポーツ-SB-2]

パラアスリート育成と地域資源

*兒玉 友¹ (1. 日本福祉大学)

[生涯スポーツ-SB-3]

“生涯スポーツライフ”を拓けるマスターズスポーツの可能性

*彦次 佳¹ (1. 関西大学)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-1]

フレイルにおける社会的側面

*桜井 良太¹ (1. 東京都健康長寿医療センター研究所)

[健康福祉-SA-2]

糸島幸福長寿研究の実践事例・研究成果

*岸本 裕歩¹ (1. 九州大学)

[健康福祉-SA-3]

シルバーリハビリ体操の実践事例・研究成果

*小澤 多賀子¹ (1. 駒沢女子大学)

[健康福祉-SA-4]

多様な障害を有する集団におけるアダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスの効果とリスク

*佐藤 敬広¹ (1. 東北福祉大学総合福祉学部)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える―誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツ―

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-1]

国際比較から見る障害のある子ども・青少年の身体活動・スポーツ参加の現状と課題

*田中 千晶¹ (1. 東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-2]

インクルーシブを目指す学校体育の取り組み

*内田 匡輔¹ (1. 東海大学)

[健康福祉-SB-3]

性別や障がいの有無にとらわれずスポーツをする権利を支える周囲の理解

*宮嶋 泰子¹ (1. 一般社団法人カルティベータ)

[健康福祉-SB-4]

幼児期の運動あそび指導から学んできたこと、そしてこれからの展望

*佐藤 弘道¹ (1. 有限会社エスアールシーカンパニー)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与し、立ち向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティ―最前線の現場経験から考える―

コーディネーター: 植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

[スポーツ文化-SA-1]

インクルーシブな良質の体育の促進過程で派生する諸問題

*岡出 美則¹ (1. 日本体育大学)

[スポーツ文化-SA-2]

スポーツは地域のセーフティネットとなり得るか
アフリカの草の根クラブとの協働事例から考える

*岸 卓巨¹ (1. 一般社団法人A-Goal)

[スポーツ文化-SA-3]

紛争下の緊急支援におけるスポーツ・プログラムの実践のあり方について

*井本 直歩子^{1,2} (1. 一般社団法人SDGs in Sports、2. 聖心女子大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター:周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者:中村 哲也(高知大学)

[スポーツ文化-SB-1]

運動部活動がスポーツ文化に及ぼした影響

教育言説からのアプローチ

*神谷 拓¹ (1. 関西大学)

[スポーツ文化-SB-2]

学校運動部と地域および行政におけるスポーツ文化

体育社会学的解釈をもとに

*谷口 勇一¹ (1. 大分大学)

[スポーツ文化-SB-3]

子ども一人ひとりにフォーカスした柔道大会の創設経緯とその成果

*永瀬 義規^{1,2} (1. 一般社団法人スポーツひのまるキッズ協会、2. 株式会社ジャパンスポーツコミッション)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

[学校保健体育-SA-1]

男女共習の実際とジェンダー平等な体育の在り方

*佐野 信子¹ (1. 立教大学)

[学校保健体育-SA-2]

多様な学習者が共に学び共に育つ体育授業の課題と展望

*綿引 清勝¹ (1. 東海大学)

[学校保健体育-SA-3]

体育は多様性を受け入れることができるのか？

ジェンダー・セクシュアリティの視点から

*井谷 恵子¹ (1. 京都教育大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 血 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

[学校保健体育-SB-1]

拡張のみちのりとしての「外化・内化・新内化」
その技術支援と「深い学び」への展望

*山田 孝禎¹ (1. 福井大学)

[学校保健体育-SB-2]

ハイパフォーマンススポーツのライフパフォーマンス向上への汎用可能性を探る

*清水 和弘¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター)

[学校保健体育-SB-3]

「身体」から見出すリテラシー教育としての学校保健体育

*高橋 浩二¹ (1. 長崎大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 血 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-18]

部活動改革に伴う教員の兼職兼業の運用に関する一考察（教）

*笠井 義明¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-19]

滋賀県大津市における運動部活動の地域移行・地域展開に関するグランドデザイン（経,教）
政策科学的アプローチによる試論

*大西 祐司¹、黒澤 寛己¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-20]

部活動地域移行における指導者確保に関する研究（社,経,政）
体育系大学生を対象としたアンケートより

*藤原 悠太¹、早田 剛¹ (1. 環太平洋大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 ■ 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-20]

保健体育授業の男女共習に対する中学生の認識（教）

男女別の分析

*三谷 林太郎¹、松田 繁樹²、山田 淳子³、出村 友寛⁴ (1. 滋賀大学大学院、2. 龍谷大学、3. 滋賀大学、4. 仁愛大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-21]

「教育の目的」に則した大学体育授業の学修成果指標の作成（心）

大規模私立大学を事例とした検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-22]

体育実技授業がもたらす大学生活への適応と学びの実感（教）

社会情動的スキルの特徴に着目して

*難波 秀行¹、上村 明²、小見山 高明¹、島本 英樹¹、七五三木 聡¹ (1. 大阪大学、2. 和洋女子大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-23]

動作合成・可視化システムを導入したダンス動作学習実験による「動きの理解」に関する検討（教）

*三輪 亜希子¹、中内 悠太²、曾我 麻佐子² (1. 尚美学園大学、2. 龍谷大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

■ 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 ■ 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1101-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:赤澤 暢彦(鹿屋体育大学)

9:20 ~ 9:40

[生涯スポーツ-A-10]

学外スポーツ活動が小学生の学内身体活動レベルに与える影響（教）

心理社会的因子との関連性に着目して

*鄭 天従¹ (1. 早稲田大学大学院スポーツ研究科)

9:40 ~ 10:00

[生涯スポーツ-A-11]

運動部活動の期待と機能が及ぼす継続への困難感（経）

中高生の抵抗条件の認識と運動者行動論からの問題提起

*常浦 光希^{1,2}、田原 陽介³ (1. くらしき作陽大学、2. 広島大学大学院、3. 青山学院大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-01]

部活動に対する生徒の主体性を育む場のデザイン（経）

*行實 鉄平¹、横山 剛士² (1. 久留米大学、2. 金沢大学)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-02]

Dose-Response Relationships Between Environmental Fitness Support and Physical Activity（発,測）

Insights from a Large-Scale National Survey in China

*PAN XIANG^{1,2}、鈴木 宏哉²、Gao Yibo^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育总局体育科学研究所、2. 順天堂大学 スポーツ健康科学研究科)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-03]

当事者の精神障害者サッカー競技参入および継続的な参加を促す要因の検討（ア）

*秋本 成晴¹ (1. 平成国際大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-04]

スポーツサービスにおける価値共破壊（経）

車椅子ハンドボールクラブKnockü SCを事例として

*宇野 博武^{1,2}、岡田 美優³ (1. 武庫川女子大学、2. 神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程、3. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期過程)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1201-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長: 林 洋輔(大阪教育大学)

9:20 ~ 9:40

[生涯スポーツ-A-12]

総合型地域スポーツクラブの世代交代の課題（社,経,政）

人材循環と理念継承の視点から

*眞鍋 隆祐¹ (1. 彰栄保育福祉専門学校)

9:40 ~ 10:00

[生涯スポーツ-A-13]

体育・スポーツ経営学に関する研究トピックの動向（経）

トピックモデル分析による学術論文（2000ー2024年）のレビュー

*柴田 紘希¹、奥田 直希²、林田 敏裕³、宇野 博武⁴ (1. 日本体育大学、2. 大阪学院大学、3. 筑波大学、4. 武庫川女子大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-05]

女子のスポーツ参加を促進するためのアプローチ（社）

日本語版ポジティブ・ボディ・イメージ尺度（PBIAS）の作成とその信頼性・妥当性の検討

*竹澤 美郁¹、三倉 茜²、小笠原 悦子⁴、鯉川 なつえ²、桜間 裕子³、青木 瑛美³ (1. 東海大学、2. 順天堂大学、3. 順天堂大学女性スポーツ研究センター、4. 順天堂大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-06]

女子のスポーツ参加促進のためのアプローチ（社）

ボディ・イメージ課題に対処するコーチの自己効力感を高める介入研究

*三倉 茜¹、竹澤 美郁²、小笠原 悦子³、鯉川 なつえ¹、桜間 裕子⁴、青木 瑛美⁴ (1. 順天堂大学、2. 東海大学、3. 順天堂大学大学院、4. 順天堂大学女性スポーツ研究センター)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-07]

中国および日本の女性高齢者における体格、生活空間および体力・運動能力の年代差、ならびに国別比較（社,測,介）

*武 可¹、李 忠林²、山次 俊介³、山田 孝禎³、杉浦 宏季⁴ (1. 福井工業大学大学院、2. 中国井岡山大学、3. 福井大学、4. 福井工業大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-08]

「暮らしと健康とスポーツに関する調査」報告（社）

調査の概要・基礎分析の結果を中心に

*下窪 拓也¹、山本 悦史² (1. 順天堂大学、2. 新潟医療福祉大学)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1401-02] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長:岩沼 聡一郎(帝京科学大学)

9:20 ~ 9:40

[健康福祉-B-04]

知的障害特別支援学校の生徒は水泳授業に何を期待しているか？（発,教,ア）

高等部生徒を対象とした意識調査より

*岩井 祐一¹、森山 進一郎² (1. 東京学芸大学附属特別支援学校、2. 東京学芸大学)

9:40 ~ 10:00

[健康福祉-B-05]

ICTを活用した大学生の睡眠習慣の実態調査（生）

*西村 一樹¹ (1. 広島工業大学環境学部食健康科学科)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツは
いかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

13:30 ~ 13:50

[健康福祉-A-01]

一事例研究によるSNS運動プログラムの効果の検討（測,コ）

*兼山 真愛¹ (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科)

13:50 ~ 14:10

[健康福祉-A-02]

日中の眠気に対する等尺性ハンドグリップトレーニングの効果検証（生）

主観および客観評価を用いたパイロットスタディ

*山形 高司¹ (1. 川崎医療福祉大学)

14:10 ~ 14:30

[健康福祉-A-03]

転倒予防アセスメント・ツール“Strömquist Bååthe Falling Competence” (SBFC)日本語版の
開発（介）

*曾我部 晋哉¹、ソリドーワル マーヤ² (1. 甲南大学、2. 津田塾大学)

14:30 ~ 14:50

[健康福祉-A-04]

バーチャルリアリティを用いた簡便な歩行分析システムの精度検証（測）

高齢者の歩行支援への応用を目指して

*脇 遼太郎¹、井上 純輝^{1,2}、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. ソニー株式会社技術開発研究所)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-07]

都市空間におけるスケートボードを「犯罪化」するポリティクスとは？（社）

スポーツ犯罪学的試論

*市井 吉興¹ (1. 立命館大学)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-08]

セメンヤ事件における対立構図の再考（哲）

身体的インテグリティ対女子競技のインテグリティ

*松宮 智生¹ (1. 東洋大学)

9:40 ~ 10:00

[スポーツ文化-B-09]

スポーツ・ハラスメント概念設定の必要性（コ）

*秋元 香穂¹、岡出 美則² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに向
かうのか？

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:30 ~ 13:50

[スポーツ文化-A-01]

JICA海外協力隊体育隊員の活動考察 (人)

オートエスノグラフィ研究を用いて

*馬場 徳文¹ (1. 日本体育大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-A-02]

中学校・高等学校部活動における柔道の魅力の構造化 (教)

自他共栄の精神に見られる勝ち負けを超えた柔道の魅力についての考察

*長谷川 勸¹、伊藤 優希 (1. 芝高等学校)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-A-03]

野球未開の地における競技普及 (経,人,政)

MLBインドによる競技普及活動を切り口に

*江原 昭博¹ (1. 関西学院大学教育学部)

14:30 ~ 14:50

[スポーツ文化-A-04]

なぜタイリーグへの移籍と永住を決意したのか? (社)

日本人元プロサッカー選手を事例に

*野田頭 尚¹、上杉 杏²、青山 将己³ (1. カセサート大学、2. 吉備国際大学、3. 流通科学大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

■ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-10]

嘉納治五郎は絞技と関節技をいかに考えていたか (人)

*稲川 郁子^{1,2} (1. 日本体育大学、2. 公益財団法人全日本柔道連盟医科学委員会)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-11]

伝統芸能の身体教育における「なぞり」と「さぐり」の構造に関する研究 (社)

*迫 俊道¹ (1. 大阪商業大学)

9:40 ~ 10:00

[スポーツ文化-B-12]

蹴鞠未経験者を対象とした「蹴鞠技術習得」までのプロセスに関する研究 (人)

*阿羅 功也¹ (1. 旭川工業高等専門学校)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-B-13]

学校における東京2020大会の”Post Games Legacy”の検討（教）

大会後3年間のオリ・パラ教育継続調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-B-14]

ピエール・ド・クーベルタンによる「スポーツと平和」思想の原点（史）

*和田 浩一¹ (1. 神戸医療未来大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-07]

大学サッカー選手におけるロングキックの飛距離と利き足、非利き足の筋力、筋量の関係（生,バ,測）

*加藤 雄一郎¹、阿部 渉² (1. 平成国際大学、2. アローレ八王子)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-08]

大学トップレベルのサッカー選手における突破のドリブル時の視線探索行動（コ）

*多賀 健¹ (1. 苫小牧工業高等専門学校)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-09]

全地球カメラ映像を活用したサッカーの個別練習の検討（コ,教）

*寺田 進志¹ (1. 大阪国際大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-13]

競技水準の異なるラグビーチームにおける試合中の運動特性の比較 (コ)
GPSデータを用いた競技力向上のための比較分析

*稲田 鎮¹、中野 貴博¹、中本 光彦¹、水野 太智¹、高橋 好波¹ (1. 中京大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-14]

セイバーメトリクス指標を用いた大学野球の勝率に影響を与える要因の検討 (コ)

*八田 歩¹、杉田 正明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学 体育学部)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-15]

世界男子ハンドボール競技のセットディフェンスにおけるスクリーンプレーに対する有効なディフェンスプレー (コ)

*宮代 花菜¹ (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-10]

女子100mハードルレース分析 (測)
12秒台から18秒台を対象にして

*木村 加乃¹、後藤 悠太²、欠畑 岳³、磯 繁雄³ (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 名城大学法学部、3. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-11]

全国高校総体陸上競技800mにおける通過順位および位置取りと最終順位の関係 (コ)

*佐藤 公一郎¹、丹治 史弥²、杉田 正明³ (1. 東海大学体育学研究科、2. 東海大学体育学部、3. 日本体育大学体育学部)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-12]

空手組手競技大学生競技者を対象にした作戦意識とパフォーマンスの関係 (測,コ)

*大徳 紘也¹、西山 哲成¹、大石 健二¹ (1. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

【2a404-06】競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-16]

レクリエーションレベルのゴルファーのスコア向上に必要な打球およびスイング特性 (バ)

*山下 佳倫¹、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-17]

栗山英樹監督のコーチングにみるアスリートセンタードと4つのコーチングアプローチの統合的活用 (哲,コ)

*佐藤 直央¹、佐良土 茂樹² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-18]

女性競技者とコーチの関係性に関する実態調査 (社,心,コ)

部活動現場における課題を中心に

*天羽 礼¹ (1. 筑波大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

【2a501-03】競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-B-07]

福岡県タレント発掘事業からトップアスリートに至った選手におけるアスリート選抜時の要件と過去の競技経験の特徴 (コ)

*山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-B-08]

中央競技団体におけるアスリート育成パスウェイモデルの活用実態に関する研究 (経,コ)

*山下 修平^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、山口 真未^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-B-09]

スポーツタレント発掘育成事業からトップアスリートに到達した者の特徴 (アスリート育成パスウェイ)

体格・体力面に着目して

*萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a504-05] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表④

座長:田井 健太郎(群馬大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-B-10]

世界トップレベルの兄弟姉妹アスリートの競技生活における相互関係のあり様（コ）

*高木 菜那¹、清野 隼²、尾縣 貢³ (1. Nanavy株式会社、2. 筑波大学体育系、3. 福井工業大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-B-11]

女性アスリートの育成段階によるコンディショニング行動の分析（生）

女性アスリート育成パスウェイ構築のために

*中村 有紀¹、中村 真理子¹、門馬 怜子¹、松田 知華²、相澤 勝治³、鈴木 なつ未⁴ (1. 日本スポーツ振興センター／ハイパフォーマンススポーツセンター／国立スポーツ科学センター、2. 名古屋大学、3. 専修大学、4. 拓殖大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 🏠 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a601-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表③

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-07]

演題取り下げ

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-08]

中学校保健体育科教師Aの不安から自信への軌跡（教）

第62回全国学校体育研究大会を舞台とした約1年半のアクションリサーチ

*木原 慎介¹、佐藤 若²、佐藤 裕行³ (1. 東京国際大学、2. 山形県立南陽高等学校、3. 山形県教育局)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-09]

大阪府における体力水準の高いA市教育委員会の取り組み（教）

子どもの体力向上に向けた施策の実態

*山本 聖也¹、藤浪 大輔²、小林 博隆¹ (1. 大阪体育大学、2. 大阪体育大学大学院)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

【2a604-06】学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-07]

小学校体育科における受容感を育む関わりが児童の運動有能感、運動意欲に与える効果
(教)

マット運動とハンドボールの授業との比較から

*金子 泰子¹、橋爪 和夫²、阿尾 昌樹³ (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立堀岡小学校)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-08]

体力二極化問題の改善に向けた小学校体育の授業の工夫 (発)

ボール運動・壁ありサッカーを事例にして

*津田 龍佑¹ (1. 金沢医科大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-09]

上肢のプライオメトリクスを取り入れた投動作指導が高校生の投能力および認識面に与える
影響 (教)

*池川 博史¹ (1. 兵庫県立伊丹北高等学校)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

【2a701-03】学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-10]

学校体育の起点の再考：身心一体科学 考え方と方法 (哲,生)

理科と体育の教育の狭間で抜け落ちる「生きている自分」

*跡見 順子¹、藤田 恵理²、清水 美穂¹ (1. 帝京大学先端総合研究機構、2. 帝京大学医療技術学部)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-11]

多様な学習者が共に学びあうための教材開発 (哲)

ルールや条件の設定をととして

*森田 啓¹、高橋 浩二²、中島 早苗⁵、戸枝 美咲⁶、佐藤 和⁴、小谷 恭子⁸、河鱈 一彦⁷、畑 孝幸³ (1. 大阪体育大学、2. 長崎大学、3. 東海学園大学、4. 千葉工業大学、5. 共立女子短期大学、6. 日本女子大学、7. 関西学院大学、8. 帝塚山学院大学)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-12]

SUSTAINABILITY IN SPORTS SCIENCE: RESEARCH GROWTH AND GLOBAL INFLUENCE
(政)

A BIBLIOMETRIC STUDY

*PONUGUPATI PREMANAND¹ (1. VICE- PRESIDENT , NAPESS)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 皿 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

【2a704-06】学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-10]

大学生を対象にした〈開脚とび〉の指導に関する事例研究（コ,教）
運動の先取りを促す用具の工夫に着目して

*仲宗根 森敦^{1,2} (1. 東京学芸大学、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-11]

器械運動の評価方法に関する基礎研究（発,測,コ,教）
側転の評価に関する一考察

*田中 光¹ (1. 流通経済大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-12]

学年および跳び箱の高さが開脚跳びの動作達成度に与える影響（発,測,教）
小学校中学年児童の縦断データを用いた検討

*佐野 孝¹、上田 恵子²、國土 将平¹ (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 畿央大学教育学部)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 皿 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

【2a801-03】学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-13]

女子大学生の運動実態と体育意識から考える授業改善（教）

*朴 京眞¹、洪 性賛² (1. 聖心女子大学、2. ソウル女子大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-14]

国立高等専門学校における保健授業の実態把握（保）
Webシラバスに基づく分析から

*南 雅樹¹、柴山 慧²、坂田 洋満³、高津 浩彰⁴、石飛 朱萌⁵ (1. 石川工業高等専門学校、2. 福山平成大学、3. 木更津工業高等専門学校、4. 豊田工業高等専門学校、5. 徳山工業高等専門学校)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-15]

体験型防災キャンプが体育系大学生の防災意識に与える教育的効果（生,介）
自衛隊駐屯地での実践を通して

*伊藤 三千雄¹、浦 佑大¹、坂本 康輔¹、清田 美紀¹、柴山 慧²、早田 剛¹、三浦 孝仁¹ (1. IPU環太平洋大学、2. 福山平成大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 皿 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

【2a804-07】学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-13]

「心臓の位置」の正答者は大学生が小学6年生よりもかなり少ない（保）
素朴概念の存在が引き起こす心肺蘇生法の指導のためエビデンス

*小浜 明¹、砂田 芽衣²、物部 博文³ (1. 仙台大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 横浜国立大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-14]

胸骨に着目した姿勢の調整が立位姿勢および視点に与える影響（コ）
高校生を対象に

*福岡 小百合¹、寺山 由美²、広野 泰子²、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院/追手門学院中・高等学校、2. 筑波大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-15]

タグラグビーに特有の「易しさ」の再考（教）

*渡部 颯斗¹、鈴木 秀人² (1. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2. 東京学芸大学大学院教育学研究科)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-16]

タグラグビーのルールをやさしく学習できるゲーム型教材の提案（教,政）
小学校中学年の児童を対象とした授業分析からの検証

*鈴木 利也^{1,2}、佐川 哲也³ (1. 小松市ラグビーフットボール協会、2. 石川県ラグビーフットボール協会、3. 金沢大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

■ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 9:40 皿 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

【2a901-02】学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:綿引 清勝(東海大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-16]

中学校における、主体的・対話的なダンスの授業作り（教）
よりよいダンス授業実践を目指す教師とのアクションリサーチを通して

*宮本 乙女¹ (1. 日本女子体育大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-17]

期間記録法から見た模擬授業の課題点（教）

*足立 美和¹ (1. 共立女子大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 ■ 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a903-05] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長:山田 考禎(福井大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-17]

保健体育授業における「原則、男女共習」を考える (測)

共習授業と別習授業を体験した大学生の意見および感想

*松田 繁樹¹、山田 淳子²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 龍谷大学、2. 滋賀大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-18]

中学校体育授業のバレーボールにおける男女共習と別習の違いが生徒の学びに与える影響 (発,教)

*山田 淳子¹、松田 繁樹²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 滋賀大学、2. 龍谷大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-19]

演題取り下げ

各種会議・ミーティング | 専門領域別：体育社会学

■ 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 ■ 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[2a13-1220] 体育社会学／理事会

12:20 ~ 13:20

[2a13-1220-1add]

各種会議・ミーティング

各種会議・ミーティング | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

■ 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 ■ 2312教室(教育研究棟 2街区 3階 2312)

[2a21-1220] アダプテッド・スポーツ科学／評議員会

12:20 ~ 13:20

[2a21-1220-1add]

各種会議・ミーティング

各種会議・ミーティング | 専門領域別：体育科教育学

■ 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 ■ 2306教室(教育研究棟 2街区 3階 2306)

[2a22-1220] 体育科教育学／理事会

12:20 ~ 13:20

[2a22-1220-1add]

各種会議・ミーティング

各種会議・ミーティング

■ 2025年8月28日(木) 12:20～13:20 皿 2501(中会議室)(教育研究棟 2街区 5階 2501)

[2a25-1220] 地域協力学会連絡会議

12:20～13:20

[2a25-1220-1add]

各種会議・ミーティング

展示

■ 2025年8月28日(木) 9:00～17:00 皿 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)

[2c1-0900] 企業・書籍展示

9:00～17:00

[2c1-0900-1add]

展示

ランチョンセミナー

■ 2025年8月28日(木) 12:20～13:20 皿 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[RS-03] ランチョンセミナー③／アーカイブティップス株式会社

協力:アーカイブティップス株式会社

座長:村井 楓子(アーカイブティップス株式会社)

※当日8:15から受付窓口『7番』にて食事券を配布します。(先着順定員制)

[ランチョン3]

北海道日本ハムファイターズのスポーツサイエンスを活用した選手育成の取り組み
動作解析の導入背景と活用事例

*山口 雄大¹ (1.株式会社北海道日本ハムファイターズ ベースボールオペレーション部)

ランチョンセミナー

■ 2025年8月28日(木) 12:20～13:20 皿 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[RS-04] ランチョンセミナー④／公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

協力:公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

座長:伊坂 忠夫(立命館大学副学長スポーツ健康科学部教授)

※当日8:15から受付窓口『7番』にて食事券を配布します。(先着順定員制)

[ランチョン4]

スポーツの歴史と文化と価値

*阿部 衛¹、三谷 舜² (1. 東京大学大学院総合文化研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

ランチョンセミナー

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[RS-05] ランチョンセミナー⑤／一般社団法人大学スポーツ協会

協力:一般社団法人大学スポーツ協会、株式会社KEIアドバンス

座長:一般社団法人大学スポーツ協会

※当日8:15から受付窓口『7番』にて食事券を配布します。(先着順定員制)

[ランチョン5]

ジェネリックスキル調査から考える運動部学生の育成支援

探究型教材を活用した学生の課題解決力の強化

*山本 啓一¹ (1.北陸大学教授)

本部企画シンポジウム

■ 2025年8月28日(木) 17:10～19:10 ■ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a107-09] 本部企画シンポジウム2／身体性の価値を再考する－冗長性や不可視性を手がかりに－

コーディネーター:大高 千明(奈良女子大学)、佐野 加奈絵(関西大学) 指定討論者:伊坂 忠夫(立命館大学)

テクノロジーの進化に伴い、現代社会は効率性が重視され、AIの発展によって疑問は瞬時に解決されるようになった。特にコロナ禍以降、この傾向は加速し、スマートデバイスを通じて心拍や運動量を簡単に把握できるなど、日常生活における身体情報の管理も容易になった。スポーツにおいても、リアルタイムでスキルのフィードバックを受けられるなど、最先端のツールを活用する若手研究者・実践家も増えている。一方で、こうしたデジタル化が進む社会において、見落とされてきたもの、フォーカスされてこなかった大事な要素があるのではないだろうか。体育・スポーツ科学において「身体」そのものが置き去りにされていないか、今一度立ち止まって考える必要がある。

本シンポジウムでは、体育・スポーツ科学における「身体性」の価値や本質について、一見効率でなく無駄と捉えられかねない冗長性や、定量的な評価が難しい身体感覚や経験値などの不可視性を手がかりに再考する。まず、運動制御における身体の冗長性に注目する。ヒトの運動は多くの自由度を持つ関節の制御によって実現され、冗長性は運動を複雑にする一方で、柔軟性や安定性を高める重要な特性でもある。この冗長性がもたらす豊かさを通じて、身体性の再認識を試みる。次に、学校体育における評価軸について議論する。現在、スポーツ科学や学校体育では、パフォーマンスの出来栄えや技術の習得が重視され、「できる」と「できない」、強弱や速遅による評価がマジョリティである。しかし、技やスキルを習得する過程では、試行錯誤や遠回りをする中で身体と向き合う経験が重要となる。「できない」ことの面白さや、そこから生まれる気づきもまた、体育・スポーツ科学における貴重な価値である。本シンポジウムでは、こうした冗長性や不可視性の観点から身体性を多角的に考察し、これからの体育・スポーツ科学において多様な価値を提供する可能性を探る。

[本部企画-S2-1]

「できる」だけが正解か？

身体の可能性と多様性

*田中 愛¹ (1. 東京学芸大学)

[本部企画-S2-2]

「うまくいく」だけが正解か？

熟達化の非線形科学

*岡野 真裕¹ (1. 神戸大学)

[本部企画-S2-3]

「最速・最短」だけが正解か？

遠回りするランニングの楽しさとGPSアートの活用

*齋藤 祐一¹ (1. 鳴門教育大学)

本部企画シンポジウム

📅 2025年8月28日(木) 17:10～19:10 📍 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a107-09] 本部企画シンポジウム2／身体性の価値を再考する－冗長性や不可視性を手がかりに－

コーディネーター:大高 千明(奈良女子大学)、佐野 加奈絵(関西大学) 指定討論者:伊坂 忠夫(立命館大学)

[本部企画-S2-1] 「できる」だけが正解か？

身体の可能性と多様性

*田中 愛¹ (1. 東京学芸大学)

＜演者略歴＞

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、修了。博士（教育学）。武蔵大学人文学部、明星大学教育学部を経て、現職。専門は、体育哲学、身体教育学。

「身体」とはなにか、そして、私たちは「身体」をどのように捉えるべきか。この問い立てに対し、本シンポジウムに掲げられている「冗長性」や「不可視性」は、有効な視点であるように思われる。演者の立場からは、現象学という学問の知見を借りながらこの問いについて再考を試みたい。

考察の手がかりの一つとして、「身体的可能感」を取り上げる。この概念は、体育やスポーツ実践における「できる」か「できない」かの現象のうち、「できない」から「できる」までの過程で、無自覚のうちに本人が抱く感じを指す。この概念を、通常認識されている「できる」との対比から〈できる〉と表記すれば、この〈できる〉は、人間が積極的に行動を起こす際のいわゆる「意欲」にも影響を及ぼすと考えられる。また、これらのことを学校教育という枠組みの中で評価することの難しさについても、とくに「不可視性」との関係から問題提起したい。

また、上記の議論に加え、「できる」ことの価値を認めつつも、「できない」ことにも「人と人を結び付ける」という独自の意味があることについて、スポーツやパラスポーツの実践場面にみられる能力志向という観点から議論を展開したい。

本部企画シンポジウム

⌚ 2025年8月28日(木) 17:10～19:10 皿 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a107-09] 本部企画シンポジウム2／身体性の価値を再考する－冗長性や不可視性を手がかりに－

コーディネーター:大高 千明(奈良女子大学)、佐野 加奈絵(関西大学) 指定討論者:伊坂 忠夫(立命館大学)

[本部企画-S2-2] 「うまくいく」だけが正解か？

熟達化の非線形科学

*岡野 真裕¹ (1. 神戸大学)

＜演者略歴＞

東京大学大学院総合文化研究科、修了。博士（学術）。立命館大学グローバル・イノベーション研究機構、同大学総合科学技術研究機構、日本学術振興会特別研究員を経て、現職。専門は、認知科学、パフォーマンス科学。

「非線形科学」とは、物理学や数学のいわゆる「複雑系」「カオス」などの研究に端を発する領域である。非線形科学ではしばしば、システムの構成要素が相互に作用し合うことを通して、複雑でありながら秩序だった振る舞いがシステム全体として生じるという現象（パターン形成、自己組織化）が扱われる。

人間（他の生き物も）の身体運動も言うまでもなく、筋骨格系、神経系、呼吸器系、循環器系、内分泌系、さらには外部環境といった、相互作用し合う構成要素からなるシステムである。したがって、身体運動が「うまくいく」とは、これらの要素間の相互作用の結果として、システム全体が、目的を果たすのに適した振る舞いをしている状態と言い換えることができる。

非線形科学というメガネを通して熟達化のプロセスを眺めると、熟達化とは身体・環境システムが現在示している秩序が、さらに目的に適した別の秩序に移り変わる過程だという捉え方ができる。この秩序が移り変わる過程では「臨界ゆらぎ」という、システムの状態が不安定になる局面が観察されることが知られている。

これらを踏まえると、既存の秩序を維持し続けようとする、すなわち「うまくいく」状態を維持し続けようとすることは、長期的に見て正解といえるのだろうか、という疑問が湧く。このような観点から、冗長性・不可視性を手がかりに、身体性について議論を深めるきっかけとなる話題を提供できれば幸いである。

本部企画シンポジウム

⌚ 2025年8月28日(木) 17:10～19:10 皿 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a107-09] 本部企画シンポジウム2／身体性の価値を再考する一冗長性や不可視性を手がかりにー

コーディネーター:大高 千明(奈良女子大学)、佐野 加奈絵(関西大学) 指定討論者:伊坂 忠夫(立命館大学)

**[本部企画-S2-3] 「最速・最短」だけが正解か？
遠回りするランニングの楽しさとGPSアートの活用**

*齋藤 祐一¹ (1. 鳴門教育大学)

＜演者略歴＞

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、修了。博士（教育学）。小学校、中学および高等学校、環太平洋大学体育学部を経て、2023年より現職。専門は、体育科教育学。

学校体育における持久走や長距離走は、児童生徒の体力維持・向上において一定程度の効果が認められている。しかし一方で、走行距離やタイムといった結果が重視されるあまり、子どもたちからの人気は依然として低く、運動の過程における楽しさが見過ごされがちである。特に限られた場所で実施される授業では、効率よくゴールすることが求められ、A地点からB地点へいかに速く到達するかが重要視される結果、移動過程の価値が軽視される傾向にある。

本シンポジウムでは、こうした「最速・最短」志向が持久走・長距離走授業に与える影響を考察するとともに、ランニングアプリのGPSトラッキング機能を用いて地図上に文字や絵を描く「GPSアート」を取り上げる。GPSアートを楽しむランナーがどのようにその魅力を感じているのかを探ることで、走行経路を工夫しながら目的地に向かうプロセスそのものに楽しさがあることを示す。さらに、GPSアートの実践がランナーの認識にどのような変容をもたらすかを考察し、従来の持久走・長距離走授業が抱える課題と、その改善に向けた視点を提案する。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツ指導者の幸せとは一成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

競技スポーツ研究部会における解決すべき上位課題の一つが、「競技スポーツをどのように豊かにするか」である。日本の指導現場では「アスリートセンタード」という言葉が広く使われているが、競技スポーツの発展には、選手の幸福だけでなく、スポーツ指導者がいかに充実感や幸福を感じ、自己実現を達成できるかを考えることも不可欠である。そこで、2025年度の課題Aでは「スポーツ指導者の幸せとは」をテーマにシンポジウムを開催する。

本シンポジウムでは、日々アスリートを指導する指導者が、指導の中で自己をどのように成長させ、QOL（生活の質）やワークライフバランスを維持していくのかについて議論する。また、そんな指導者をコーチングや心理学など多様な視点から支援する専門家を招き、指導者の心理的負担および自己実現に関する課題に対して、専門的知見に基づいた提言と支援の方向性、さらに今後の展望についてご講演いただく。

指導者の心身が充実していなければ、質の高い指導を行うことは難しく、結果として選手の能力を最大限に引き出すことも困難になる。本シンポジウムを通じて、スポーツに関わるすべての人がより幸福を感じるために何が必要なのかを、登壇者・参加者と共に考える場としたい。

[競技スポーツ-SA-1]

心理学に基づく指導者の抱えるストレスとの付き合い方

*筒井 香¹ (1. 株式会社BorderLeSS)

[競技スポーツ-SA-2]

アスリートセンタード・コーチング

*伊藤 雅充¹ (1. 日本体育大学)

[競技スポーツ-SA-3]

車いすバスケットボールの指導経験を通しての様々な気づき

*及川 晋平¹ (1. 一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 皿 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツ指導者の幸せとは一成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

[競技スポーツ-SA-1] 心理学に基づく指導者の抱えるストレスとの付き合い方

*筒井 香¹ (1. 株式会社BorderLeSS)

<演者略歴>

博士(学術)を取得して2020年起業。(株)BorderLeSS代表取締役としてメンタルトレーニングの普及活動、後進の育成を行う。日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング上級指導士としてジュニアからトップアスリート、指導者、ビジネスパーソンなど様々な方にメンタルトレーニング、心理サポートを行う。

指導者、特に監督やヘッドコーチになれば意思決定をする場面も多く、勝敗の責任を背負っている立場として非常にプレッシャーのかかるポジションである。そのため練習や試合、遠征、合宿と休日返上で現場に出て身体的に疲労するだけではなく、見えない心理的疲労も多くあると考えられる。日頃スポーツ心理学に基づくメンタルトレーニングの専門家として、指導者の方に携わる機会が多いが、「選手に成長してほしい」「選手には心身のコンディショニングをしっかりとしてほしい」などといったように選手に対するコメントが多い傾向にあり、自分自身のことは後回しになっている印象を持つことも少なくない。

実際、アスリートを支える人々であるアントラージュの重要性が謳われているが、指導者のアントラージュに関してはまだ議論が進んでいないと思われる。また、アスリートのキャリア支援の重要性はスポーツ庁もその必要性を発信しているが、指導者のキャリア形成も課題が多いと考えられる。

そこで本シンポジウムでは、指導者の抱えるストレスとの付き合い方について、自分自身によるセルフマネジメントと他者の存在によるソーシャルサポートの両側面からのアプローチを示し、皆様と議論を深めたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 ㊦ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツ指導者の幸せとは一成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

[競技スポーツ-SA-2] アスリートセンタード・コーチング

*伊藤 雅充¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

日本体育大学教授。博士（学術）。コーチング学を専門とし、国内外でコーチの成長支援に取り組んでいる。NSSU Coach Developer Academy (NCDA) のディレクターとして、国際的なコーチデベロッパー養成にも力を注ぎ、さまざまな側面からコーチの学びと実践を支える活動を行っている。

アスリートセンタード・コーチング——それは何を意味するのか。アスリートファーストとは何が違うのか。なぜ、今この概念が改めて問われているのか。そして、それはスポーツ指導者に何をもたらすのか。これらの問いを起点に、シンポジウムでは皆さんと共に考えていきたい。

セリグマンは、持続的幸福の構成要素として、肯定的感情、深い関与、意味や意義、達成、関係性を挙げている。スポーツ指導者が「有能感への欲求」を抱いているのは自然なことであり、「自分が勝ちたい」と思うこともまた、人として当然の感情だ。采配や指揮が求められる競技では、指導者同士が明確に勝負の一部を担っており、そこでの判断や戦略が競技結果を左右する。

加えて、指導者にとって「自律感の欲求がどのように充足されているか」も重要な視点である。アスリートのニーズに応えることが、指導者自身の意思による選択であれば、自らの価値を実感しうるだろう。しかし、義務感や周囲の期待に応じるだけの行為であれば、自律性はむしろ脅かされる可能性がある。

アスリートを“ファースト”にすることで本当によいのか。アスリートセンタード・コーチングをより豊かに発展させていくために、本シンポジウムでは、あえて挑戦的な問いを投げかけてみたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 皿 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a101-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／スポーツ指導者の幸せとは一成長・ウェルビーイング・キャリアを支えるためにー

コーディネーター:森嶋 琢真(中京大学)

[競技スポーツ-SA-3] 車いすバスケットボールの指導経験を通しての様々な気づき

*及川 晋平¹(1. 一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟)

<演者略歴>

2000シドニーパラリンピック男子代表選手、2012ロンドンパラリンピック男子代表アシスタントコーチ、2026リオパラリンピック男子代表ヘッドコーチ、2021東京パラリンピック男子代表監督(銀メダル)、2021-2023一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟専務理事、2023-2理事

車いすバスケットボールという競技において、アスリートを指導すること、チームを強化していくとはどういうことか？という大きな問いがある。選手の身体の状態は、下肢、上肢など、障害は多様であり、そのレベル(重度・軽度)も様々だ。そもそもインターネットや書籍などで得られるスポーツに関する情報は健常者と言われる選手たちのものであることが多い。常識的なことでも多くの情報は全く通用せず、しかしあるものは大変なヒントや答えになる。指導者として、選手たちと一緒にどうしたら強くなるのか、うまくなるのか、勝てるチームを作れるのかは、手探りであり、自分たちでその答えを導き出していくプロセスが重要になる。そして、答えを明確に探し出すことが難しいこのパラスポーツの世界で選手と一緒に強化、成長に注ぐ時間や機会は指導者にとっての醍醐味だと感じている。

指導においては、健常者のスポーツと目指すゴールは一緒であり、原則的なところでは同じであるものの、様々な観点での大きな違いがあることも事実だと思われる。本シンポジウムでは、パラリンピックの日本代表強化をはじめ、様々な観点でその経験を振り返り、その違いとは何か？を共に考える場としたい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

Ⓖ 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 Ⓖ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター:出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

2000年に策定された「スポーツ振興基本計画」により、日本の国際競技力向上は正式に「国策」として位置づけられ、今日まで数々の関連施策が展開されてきた。その結果、オリンピック等での日本のメダル獲得状況は改善し、それらを指標とした日本の国際競技力は相対的に向上している。しかし、国際競技力向上の目的は、単にオリンピック等でのメダル獲得数を増やすことにとどまるものではない。すなわち、そのプロセスと結果等を通じて、スポーツ分野のみならず国家・社会の発展や人々のウェルビーイング（幸福や健康）の促進に寄与するなど、より大きな意義を持つものでなければならない。

日本を含め競技スポーツに力を入れている国は、メダル獲得状況を国際競技力の評価指標とし、それを基に向上施策の成果を判断している。そして、国際競技力向上の意義や社会への効果については、日本の場合、「夢」「希望」「活力」「国際理解」「プレゼンス」などの漠然としたものであり、具体的な根拠や示唆を得られる議論はほとんど行われていない。そこで、本シンポジウムでは、国際競技力向上の意義や目的を深く掘り下げ、それが豊かな社会の実現にどのようにつながるかを議論する。これにより今後の国際競技力向上策の在り方について、その方向性などを見出すことを目指す。

[競技スポーツ-SB-1]

国際競技力向上を通じた社会への還元

ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ

*久木留 毅¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

[競技スポーツ-SB-2]

豊かな社会の実現に向けたトップアスリート養成の社会的意義

「活用」の観点から

*菊 幸一¹ (1. 国土館大学大学院)

[競技スポーツ-SB-3]

日本陸連ダイヤモンドアスリート制度にみる競技力と国際的素養を備えた次世代育成

*室伏 由佳¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター: 出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-1] 国際競技力向上を通じた社会への還元

ハイパフォーマンスからライフパフォーマンスへ

*久木留 毅¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター)

<演者略歴>

筑波大学大学院体育研究科修了。法政大学大学院政策科学専攻修了。スポーツ庁参与、日本パラリンピック委員会（JPC）運営委員会委員・特別強化委員会委員、英国ラフバラ大学客員研究員、国際スポーツ強化拠点連合（ASPC）アジア大陸理事、世界レスリング連合（UWW）テクニカル委員会委員・科学委員会委員、日本オリンピック委員会（JOC）情報戦略部門部門長、日本レスリング協会ナショナルコーチ兼テクニカルディレクター、専修大学教授などを歴任。

ハイパフォーマンススポーツセンター（HPSC）は、国立スポーツ科学センター（JISS）、HP戦略部、連携・協働推進部、国際情報戦略部、運営部等で構成されている。これらの部門は、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会などと連携・協力し国際競技力向上のための事業を展開している。HPSCの事業目的は、国際競技力向上である。スポーツ医・科学、情報面からの支援、アスリートの発掘・育成への関与、地域や大学との連携・協力、国際的なネットワークの構築と人的交流など様々な事業展開を行っている。また、JISSにおいては「JISSプラン2034」を作成し、知見の共有や人材育成なども視野に入れ外部への情報共有を図っている。さらに、HPSCは組織内外の情報についても広く展開する試みを実施している。具体的には、パッケージの地域への展開やフォーラム、カンファレンス、大学との連携講義の設定など、ハイパフォーマンス領域で得た知見を加工してライフパフォーマンスの向上を考慮した取り組みを始めている。さらに、2025年大阪・関西万博では、国連と連携しスポーツを通じた開発と平和へのフォーラムやオーストラリアパビリオンでの東京2020大会のレガシーでの発信も行なっている。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 皿 メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター:出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-2] 豊かな社会の実現に向けたトップアスリート養成の社会的意義

「活用」の観点から

*菊 幸一¹ (1. 国土館大学大学院)

<演者略歴>

体育・スポーツ社会学を専攻。九州大学、奈良女子大学、筑波大学を経て、現在国土館大学大学院特任教授。教育学博士（筑波大学）。日本スポーツ体育健康科学学術連合代表、前日本体育・スポーツ・健康学会会長、前日本スポーツ社会学会会長（現在顧問）、前文部科学省学習指導要領作成協力者（高校保健体育、座長）など。

国際競技力向上をめざすトップアスリート養成は、これまで<発掘→育成→強化>という時間軸でそのパスウェイが想定され、ひたすらメダル獲得に向けた施策や事業が展開されてきた。しかし、今日の国際的なスポーツビッグイベントにおけるゲームは、スポーツそれ自体のゲームと並行して、あるいはそれ以上に国際政治における政治的ゲームやグローバル経済における経済的ゲームのアリーナ（場）と化している。トップアスリートのパフォーマンスは否応なくこの2つのゲームに巻き込まれる身体性を有しているのだ。多額の税金や経済資本を投入して養成されたトップアスリートは、これら2つのゲームの手段や消費・消耗的な存在であってはならないだろう。これから求められる豊かな社会が、これまでの消耗・消費を最善とする産業型社会とは異なり、成熟型社会の循環・共生的ライフスタイルによって実現されるとすれば、トップアスリート養成の社会的意義はどのように変化せざるを得ないのであろうか。本報告では、文明（テクノロジー）と自然（エコロジー）の最前線（フロンティア）に身を置くトップアスリートだからこそ実現可能な両者の融和への示唆やその危機に対する予知的可能性といった、ポスト「強化」における「活用」の観点から新たな社会的意義について論じる。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

■ 2025年8月28日(木) 15:00～17:00 ■ メインアリーナ(奥側)(スポーツ棟 2階)

[2a104-06] 競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／国際競技力の向上を通じた豊かな社会の実現

コーディネーター: 出雲 輝彦(東京成徳大学)、田原 陽介(青山学院大学)

[競技スポーツ-SB-3] 日本陸連ダイヤモンドアスリート制度にみる競技力と国際的素養を備えた次世代育成

*室伏 由佳¹ (1. 順天堂大学スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科)

<演者略歴>

- ・2004年 アテネオリンピック 陸上競技女子ハンマー投 出場
- ・2019年 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 博士後期課程 修了（スポーツ健康科学博士）
- ・日本陸上競技連盟 理事、強化委員会ダイヤモンドアスリート プログラムマネージャー

日本陸上競技連盟は2014年より、競技者育成指針と連動した強化育成パスウェイの一環として、競技力と共に人間性・国際性を備えた人材を育成する「ダイヤモンドアスリート（DA）制度」を展開し、修了生の約3割が国際大会に出場、金メダル獲得者も輩出している。本制度では、専門家を招聘して行う語学（英語）・栄養・心理・リーガル・メディア対応・金融リテラシー等の研修や、海外での競技活動を通じて、国際的な舞台で活躍する際に求められる素養を備えると共に、競技引退後にもスポーツ界や国内外の社会で活躍できる次世代人材の育成も目指している。第8期には、他競技団体へのヒアリングを通じて得た多面的育成の成功例を分析した。一方、陸上競技は専門化の遅さや進学時の環境変化の特性を踏まえ、高校生から大学2年生までを対象とする従来の選考方針を維持しつつ、他競技の知見を制度の強化に活かした。第11期生では、プレッシャーへの配慮としてDAの前段階に「Nextage」を設け、また主体性を重視した自薦制の導入等、選考・支援体制の改革を進めている。本発表では統括団体の立場から、「豊かな社会の実現」に貢献するアスリート像の構築に向けた育成の在り方を共有する。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏢 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

日本の出生数は約15年前から3分の2に減少している一方で、「運動している子ども」の割合は変化していない。そのため、実際に運動やスポーツをしている子どもの数はどんどん減少している現状にある。また、働く母親の増加、手軽に楽しめるスクリーンデバイスの普及など、子どもを取り巻く環境や社会情勢はここ数十年で変化している。それに伴い、子どもや保護者の運動・スポーツに対するニーズや価値観も多様化してきていることがうかがわれる。

従来と同じアプローチに反応してスポーツをする層だけを集めていては、これ以上のスポーツ人口の増大は見込めないかもしれない。例えば、種目ごとにあるスポーツ協会は、それぞれの種目の競技人口を増やすことに依然として目を向けすぎではないだろうか。運動・スポーツの指導者や関係者は、自身が子どもの頃と同じように子どもがいるという感覚は改め、少ないスポーツをする子どもたちを取り合うのではなく、新たなニーズや価値観をもつ層を取り込むための視点や取り組みが必要である。

「多様化するスポーツ」とは、スポーツをする場所（学校、地域、スポーツクラブ、オンラインなど）や楽しみ方（価値観、参加スタイルなど）が多様になり、子どもが自分に合った形でスポーツを楽しめる選択肢が生まれつつある状況を指す。こうした多様な機会を生かし、より幅広い子どもたちがスポーツにアクセスできる環境を整えていくことが、今まで届かなかった子どもたちにもスポーツの魅力を伝え、スポーツ人口を拡大するために欠かせない視点ではないだろうか。

本シンポジウムでは、特に幼児期や児童期の子どもにフォーカスを当て、少子化時代に多様なスポーツの機会、価値を子どもに届け、スポーツ人口を増やすにはどうすればよいのか？様々な立場のシンポジストの具体的な取り組みやアイデアを共有し、生涯スポーツ社会の実現に向けた子どものスポーツの未来について考える。

[生涯スポーツ-SA-1]

子どもの運動を支える「親子の三間」

家庭と地域の実態とその展望

*香村 恵介¹ (1. 名城大学)

[生涯スポーツ-SA-2]

なぜランニングの授業は不人気で、生涯スポーツにつながらないか

*佐藤 善人¹ (1. 椋山女学園大学)

[生涯スポーツ-SA-3]

スポーツの原点に立ち返る

遊びを通じた地域クラブの取り組み

*永田 厚¹ (1. 特定非営利活動法人スポーツコミュニティ磐田・ポーラスター)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

[生涯スポーツ-SA-1] 子どもの運動を支える「親子の三間」 家庭と地域の実態とその展望

*香村 恵介¹ (1. 名城大学)

< 演者略歴 >

2008年に岐阜県スポーツ科学トレーニングセンターで測定業務専門職員、2014年より京都文教短期大学で幼児教育に携わる。2015年、同志社大学大学院スポーツ健康科学研究科を修了（博士：スポーツ健康科学）。2018年に静岡産業大学講師を経て、2020年より名城大学農学部および大学院総合学術研究科にて准教授を務めている。

子どもの身体活動をめぐる環境は、この20年で大きく変化している。かつては放課後や休日に友達と自由に遊ぶ姿が一般的だったが、現在は幼児の約半数が平日に園外で外遊びをまったく行っておらず、小学生でも高学年女子を中心に外遊びをしない子どもが3～4割を占めている。一方で、習い事の参加率は上昇しており、2019年時点で小学生の約8割が何らかの習い事を行っている。自由に遊ぶ時間は減り、費用をかけて運動機会を得る構造が広がっている。筆者が関わった笹川スポーツ財団の調査では、世帯年収が低いほど運動系の習い事をしていない幼児の割合が高く、年長児では高所得層と低所得層の間に40ポイントを超える差が確認された。運動習慣の獲得が家庭の経済状況に左右される実態が明らかになっている。

このような子どもの現状の背景には、「親子の三間」（時間・空間・仲間）のあり方が関係している。同調査では、親子で体を動かす頻度が高い家庭ほど幼児の運動時間が長く、「親子でまったく体を動かさない」家庭に比べ、「ほとんど毎日」遊ぶ家庭では週あたり7.5時間の差があった。また、両親とも週1回以上運動している家庭では、そうでない家庭よりも運動時間が約1.2時間長い。さらに、保護者同士のつながりがある家庭の子どもほど、運動時間が長い傾向も示されている。

本発表では、こうした調査結果をもとに、子どもの運動習慣を支えるために必要な視点として、①保護者の時間確保と意識啓発、②家族と一緒に、または自宅でも体を動かせる環境の整備、③地域コミュニティや仲間づくりの支援、という三つの柱を提案する。それぞれの柱に対応する実践として、大学での学生向け授業プログラム、親子で参加できるスポーツ環境や動画を活用したアクティブなスクリーンタイム、公民館を活用した親子や異年齢の運動遊びによる交流機会などを紹介し、「親子の三間」を支える取り組みの方向性を考察する。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

[生涯スポーツ-SA-2] なぜランニングの授業は不人気で、生涯スポーツにつながらないか

*佐藤 善人¹ (1. 椋山女学園大学)

<演者略歴>

小中学校教員(1995年～)、岐阜聖徳学園大学(2008年～)、東京学芸大学(2016年～)、2025年より椋山女学園大学教育学部教授。博士(学校教育学)。主な著書に、持久走・長距離走の授業革命—「つらいだけ」から「楽しい」への実践アイデア(2025年)、スポーツと君たち—10代のためのスポーツ教養(2019年)がある。2021年ランニング学会賞受賞。

体育授業は、子どもの豊かなスポーツライフの実現に寄与することが目指されている。小学校から高等学校まで必修であり、実に多くの時間をかけて運動・スポーツの学習を実施している。しかしながら、少なくない数の体育嫌い・運動嫌いを生んでいることは現実であるし、その代表格は持久走・長距離走(以下、ランニング)の授業である。この状況は改善されるべきであるが、一向にその兆しは見えず、ランニングの授業自体が豊かなスポーツライフの一場面とはなっていないと思われる。この状況を生み出している責任を教師や子どもといった個人に見出そうとするならば、問題を改善することは難しいであろう。

アイリス・マリオン・ヤング(2022)は、社会における不正義を改革するには、自己責任から政治責任へ目を向ける必要性があると訴えている。また、2025年はじめに放送されたTBS系ドラマ「御上先生」において、主人公の教師が「The personal is political」(個人的なことは政治的なこと)を用いて話題となった。ランニング嫌いを生んでいる体育授業の責任は、教師や子ども個人にあるのではなく、ランニングを取り巻く政治や社会の構造にあるとは言えないだろうか。

例えば、小学校学習指導要領解説体育編(2018)には、体づくり運動に「かけ足」あるいは「持久走」としてランニングは位置づいている。すなわち、「ランニング＝体力向上の手段」であり、その魅力を味わわせにくい状況をつくり出している。あるいはメディアはトップアスリートスポーツとしてのランニングを報道する。これらは「ランニング＝速さ(苦しさ)」といったステレオタイプを社会全体に浸透させており、その状況が、速く走らせること/走ることを、教師/子どもに強要しているとは考えられないだろうか。

一人でも多くの子どもが運動・スポーツを楽しみ、豊かなスポーツライフを実現することを目指して、体育授業におけるランニングの現状を契機として考えてみたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1103-05] 生涯スポーツ研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「多様化するスポーツ」の価値を再考する—子どものスポーツの未来—

コーディネーター:中野 貴博(中京大学)

[生涯スポーツ-SA-3] スポーツの原点に立ち返る

遊びを通じた地域クラブの取り組み

*永田 厚¹ (1. 特定非営利活動法人スポーツコミュニティ磐田・ポーラスター)

<演者略歴>

1990年学生時代にサッカースポーツ少年団ボランティアをはじめ、1994年より故郷である磐田市にてサッカークラブの指導を継続。2006年サッカークラブをNPO法人化しクラブマネージャーとして勤務。日本サッカー協会公認B級コーチ、フットサルC級コーチ、磐田サッカー協会技術副部長。

近年、スポーツクラブへの加入率が減少傾向にある。私たちのクラブでも、この5年間で約30%の減少が見られた。全国的にも、小学校5・6年生の加入率が大きく減少しているというデータ（2022年 笹川スポーツ財団）がある。背景には、学校部活動の地域移行により学校での活動機会が減ったことがあるが、民間や地域クラブへの流入も想定ほど伸びておらず、全体として競技人口が減少している。

もう一つの要因として、子どもや保護者のスポーツに対する価値観の変化が挙げられる。従来の「勝ちたい」「上手くなりたい」といった競技志向から、「楽しい」「仲間と関わりたい」といった楽しさやつながりを重視する傾向に移行していると感じている。

そこで私たちは、スポーツをもっと気軽に、誰でも楽しめる「遊び」のようなものにしたいと考え、遊びの要素を取り入れた「サッカーあそびスクール」や「親子deボルビ」といったプログラムを実施している。また、幼稚園や保育園を訪問し、保育時間内に「リーベ式運動あそび」や「出前サッカーあそび」も展開している。

これらの活動により、運動が苦手だったり内向的だったりする子どもがクラブに参加し、ボール遊びやスポーツの楽しさを体感している。一方で、運動が得意になった子どもが、より競技性の高い環境を求めてクラブを移るという傾向も見られる。

こうした状況から、「競技を本格的にやりたい層」と「楽しむことを重視する層」との二極化が進んでいるのではないかと感じている。そしてその背景には、「苦しいことを乗り越えることが競技力向上につながる」とする社会的な価値観も影響していると考えられる。

私たちは、幼少期には親子や仲間と気軽にスポーツを楽しみ、その過程で「もっと上手になりたい」「競技に挑戦したい」という自然な欲求が育まれることが、結果として持続的な競技力向上につながることを示していきたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

競技レベルの高度化、商業化やテクノロジーの進化によって、トップ（エリート）スポーツの分野はある種の臨界点にきているといわれて久しい状況である。それでも多くのトップアスリートが「進化」という言葉を口にするように、まだまだ右肩上がりのモデルを追求しなくていけないトップ（エリート）スポーツの世界に内在するイデオロギーが存在する。その一方、日常生活に根づいた環境で楽しむ、グラスルーツのスポーツの世界が連綿と存在する。この両者のギャップはますます深まるばかりである。これはまさしく、経済成長や限られた人の富を追求することからの社会的歪みや地球規模での環境の負荷を経験する日常社会と同じコンテキストにある。こうした社会を是正するために掲げられた国連のSDGsに向けた目標の多くは、スポーツの世界の歪みにも当てはまると思われる。持続可能な「生涯スポーツ」社会を実現することはSDGsに向けた目標の達成にも相通じるものがあるという観点から企画されたシンポジウムの第二段としての位置づけである。昨年度は「スポーツの持つ公共性」「スポーツ格差」の面も含めてこの両者のギャップの解消策を模索した。2年目の今回は、「パスウェイ」という観点に焦点を当てて上記の課題に取り組む。「パスウェイ」という概念が、わが国ではともするとアスリートの早期発掘、育成といったトップ（エリート）アスリート層に限定されたものと理解される傾向にある。グラスルーツからトップまでの連続性、それに向けてのグラスルーツの底辺の拡大、学校スポーツから地域スポーツへの連続性、アダプテッドスポーツにおける課題と一般的競技スポーツとの関係性、アスリートのキャリアパスと引退後の生涯スポーツサイクルへの循環論等さまざまな側面から議論を深める機会とする。

[生涯スポーツ-SB-1]

競技別パスウェイモデルの構築とその意義

*松井 陽子¹ (1. 仙台大学)

[生涯スポーツ-SB-2]

パラアスリート育成と地域資源

*兒玉 友¹ (1. 日本福祉大学)

[生涯スポーツ-SB-3]

“生涯スポーツライフ”を拓げるマスターズスポーツの可能性

*彦次 佳¹ (1. 関西大学)

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

[生涯スポーツ-SB-1] 競技別パスウェイモデルの構築とその意義

*松井 陽子¹ (1. 仙台大学)

<演者略歴>

東京都港区出身。早稲田大学大学院スポーツ科学学術院修了。フリースタイルスキーエアリアル種目全日本選手権優勝、日本代表としてワールドカップ等を転戦。引退後、日本代表コーチを経て、JOC、JSCにて主にタレント発掘・育成事業、アスリート育成パスウェイの構築支援事業を担当。2024年度より仙台大学に着任。

「パスウェイ」という言葉が我が国のスポーツ政策の文脈で初めて登場したのは2016年にスポーツ庁から発表された「競技力強化のための今後の支援方針（鈴木プラン）」である。同年には日本スポーツ振興センター（JSC）が「アスリートパスウェイの戦略的支援事業」を開始し、2019年衣笠らが「日本版FTEM」を開発、発表した。FTEMはFoundation、Talent、Elite、Masteryの頭文字をとったもので、オーストラリア国立スポーツ研究所で開発されたアスリート育成パスウェイの枠組みであり、2013年に発表された。このFTEMフレームワークでは人がスポーツの土台となる遊び・動作に触れるところからトップアスリートに至る過程を10段階に分けているが、日本版FTEMでは日本の文化的・社会的背景を考慮し、11段階に分けられた。現在この日本版FTEMを活用し、アスリートがスポーツをしていく中で経験するであろう事柄を競技レベル（段階）によって整理しつつ、各段階において必要な育成環境やプログラム、次の段階に進むためのシステム、コーチや関係者の役割などを明確化し、それぞれのスポーツにおけるアスリート育成パスウェイ（競技別パスウェイモデル）を関係者の共通認識として共有する活動が行われている。この競技別パスウェイモデルの作成にあたっては、トップコーチだけでなく、例えば地域のジュニアコーチや医科学スタッフ、競技団体の事務局など様々な関係者の意見を統合する。競技別パスウェイモデルは、そのスポーツを「する人」の指標となるだけでなく、「ささえる人」の共通言語を構築し、連携・協働を促すことで、「する人」が歩むアスリート育成パスウェイをよりスムーズに、歩きやすくする。JSCでは、スポーツを実施するねらいには大きく分けて「身体活動/活動的な生活習慣」、「スポーツへの参加」、「国際競技力の強化」の3つがあると考えられるが、それぞれのねらいに違いはあっても、一つのアスリート育成パスウェイによってつながっている、としている。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

[生涯スポーツ-SB-2] パラアスリート育成と地域資源

*兒玉 友¹ (1. 日本福祉大学)

<演者略歴>

兵庫教育大学大学院学校教育研究科修了。神戸市立市民福祉スポーツセンター支配人、文部科学省及びスポーツ庁障害者スポーツ振興室係長を経て現職。現在、日本パラスポーツ協会技術委員会推進部会委員、日本スポーツ協会地域スポーツクラブ育成委員会委員、愛知・名古屋アジア・アジアパラ競技大会組織委員会理事等を務める。

東京2020パラリンピック競技大会は、障害者スポーツへの社会的関心を高め、「誰もが個々の力を発揮できる社会」の実現という理念を可視化する契機となった。しかし、障害のある人にとって、こうしたレガシーを活かした持続可能な「生涯スポーツ」環境は、いまだ十分に整っているとは言い難い。本発表では、パラアスリートのパスウェイを軸に、障害のある人が生涯にわたりスポーツに関わり続けるための条件や環境整備について、スポーツ実施における促進要因・阻害要因を含む具体的事例を交えながら検討する。特に、学校、スポーツセンター、自治体、民間団体など、既存の地域リソースを活用した団体間の連携により、選手の発掘・育成から競技力向上までを支える仕組みが構築されつつある現状を紹介する。新たな制度や施設を設けるのではなく、既存資源をつなぎ直すことこそが、持続可能な推進体制の鍵となる。こうした地域連携は、競技の普及と強化、さらには誰もがスポーツにアクセスできる社会基盤の整備に寄与すると同時に、トップアスリートの育成にも資するものといえる。地域で育った選手が全国や国際大会で活躍することは、障害のある人のスポーツ参加においてロールモデルとなり、当事者や周囲の意識を変える契機となる。また、競技を継続する上で鍵を握るのが、アスリートを取り巻く関係者である「アントラージュ」の存在である。本人の意欲や能力だけでなく、家族や指導者、医療・福祉・教育機関との連携を含む支援体制が、競技継続やキャリア形成に深く関わる。さらに、セカンドキャリアまでを見据えた中長期的な支援のロードマップを描くことが、スポーツ参加の質を高める上で不可欠である。本発表では、既存資源を活かした連携体制の構築、支援環境の整備、促進・阻害要因への対応といった観点から、障害者スポーツを軸とした持続可能なスポーツ社会のあり方について議論を深める機会としたい。

テーマ別シンポジウム | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1110-12] 生涯スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／持続可能な「生涯スポーツ」社会実現とSDGs達成の親和性を考える

コーディネーター:海老島 均(成城大学) 指定討論者:勝田 隆(東海大学)

[生涯スポーツ-SB-3] “生涯スポーツライフ”を拡げるマスターズスポーツの可能性

*彦次 佳¹ (1. 関西大学)

<演者略歴>

神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程後期課程修了。和歌山大学教育学部を経て、2023年より関西大学人間健康学部。マスターズ甲子園実行委員会副委員長、World Masters games 2027 Kansai交通・宿泊委員会委員、同・硬式野球運営委員会副委員長。2021年・第23回秩父宮スポーツ医・科学賞奨励賞受賞。

近年、世界的に広がりを見せているマスターズスポーツ（ムーブメント）は、「技を磨き競う」というスポーツが本来持っている楽しさに挑戦することを目的とするスポーツ実施のことを言い、世界各地でマスターズスポーツイベントが増加している。我が国でも国内のマスターズスポーツイベントや国際的なマスターズスポーツイベントが起ちあがってきており、2027年にはWorld Masters Games 2027 Kansaiが、コロナ禍の2度の延期を乗り越えいよいよ開催されることになっている。このことは、長く根付いていた「競技スポーツ」（トップスポーツ）と「生涯スポーツ」（グラスルーツスポーツ）の2項対立的な感覚・間隔に、徐々に変化をもたらしてきている。例えば、国内レベルの野球のマスターズスポーツイベントである「マスターズ甲子園」では、高校硬式野球を引退した後も硬式野球というスポーツにこだわり、同窓会チームを作って高校時代と同じように甲子園を目指す場を提供している。また一方で、世界最大の国際マスターズスポーツイベントと言われる「World Masters Games」では、参加資格は年齢のみと定められていることから、競技レベルに関わらずに世界一を目指す場を提供している。前者はスポーツ種目はそのままに、高校3年間という限られた期間と世代の枠を超えた競技の楽しさを拡げ、愛着のあるスポーツを一生涯続けていくことの意味や価値を深めることに貢献しており、後者は、競技経験が浅くてもかつてのオリンピック選手やプロ選手にチャレンジできるなど、楽しみ方のバリエーションを拡げる潜在力を大いに持っている。本シンポジウムでの役割として、これらの事例を紹介し、歳を重ねていく中でよりスポーツライフが多様に、豊かになっていく可能性と期待について共有しながら、トップスポーツやグラスルーツスポーツの垣根を超えた生涯スポーツ社会（の実現）について、議論する契機となれば光栄である。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究 最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

75歳以上人口は現在2,008万人、2050年代には2,400万人を超えると推測されており（令和6年版高齢社会白書、内閣府）、フレイル対策の重要性は益々高まっている。フレイル予防における体育・スポーツの役割を議論した昨年度のシンポジウムでは、人とのつながりの醸成、健康意識の低い人および閉じこもりがちの人へのアプローチの重要性が強調された。これらのことから、体育・スポーツには筋力維持等の身体的効果に加え、運動の同調性および楽しさ・気持ちよさ等を通じてコミュニケーションや外出を促す心理的・社会的効果も重要であると考え、本年度は、フレイルと孤立の関連性や高齢者が主体的に運営する運動サークルに携わる研究者等を招聘した。本シンポジウムでは、如何にして多くの高齢者、多様な身体的・心理的・社会的背景を持つ高齢者に運動の実施を促すか、そして、運動を通じて多様なつながりを醸成する意義と方法について考えたい。

[健康福祉-SA-1]

フレイルにおける社会的側面

*桜井 良太¹ (1. 東京都健康長寿医療センター研究所)

[健康福祉-SA-2]

糸島幸福長寿研究の実践事例・研究成果

*岸本 裕歩¹ (1. 九州大学)

[健康福祉-SA-3]

シルバーリハビリ体操の実践事例・研究成果

*小澤 多賀子¹ (1. 駒沢女子大学)

[健康福祉-SA-4]

多様な障害を有する集団におけるアダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスの効果とリスク

*佐藤 敬広¹ (1. 東北福祉大学総合福祉学部)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-1] フレイルにおける社会的側面

*桜井 良太¹ (1. 東京都健康長寿医療センター研究所)

<演者略歴>

首都大学東京（現東京都立大学）人間健康科学研究科修了後、早稲田大学スポーツ科学学術院、カナダ・ウエスタンオンタリオ大学研究員を経て2017年より現職。

加齢に伴うフレイルとは、生理的な予備能力が低下し、心身に問題が起きた際の抵抗力が低くなる状態を示している。従来、フレイルは主に身体的脆弱性の特徴（Frailty phenotype）や、広範な健康障害の蓄積（Deficit accumulation frailty）に基づき評価されてきた。その後の研究や世界保健機関（WHO）の提言により、個々の機能低下に着目するのではなく、包括的な視点でフレイルを捉えることの重要性が認識されるようになってきている。このような背景から、社会的な健康リスク要因とフレイルの関連についても着目されてきているが、そこには問題も含んでいる。本シンポジウムでは関連する知見の紹介から、体育分野でのフレイル対策を社会的側面から考えていく。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究 最前線ー体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防ー

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-2] 糸島幸福長寿研究の実践事例・研究成果

*岸本 裕歩¹ (1. 九州大学)

<演者略歴>

2017年より九州大学・准教授として勤務、福岡県糸島市の市民や九州大学の学生を対象とした疫学研究の主任研究者を務める。地域のフレイル予防と産官学民連携による健康づくりを推進している。大学内外で複数の専門職・委員も兼任。

フレイル予防をめぐる体育・スポーツの多面的な役割を議論する中で、演者は地域に根ざした研究の一例として「糸島幸福長寿研究」の取り組みを紹介する。高齢者が継続的に関わる運動支援をどのように設計し、社会的・心理的・身体的側面をどう捉えるべきか。本シンポジウムでは2つの研究成果を中心に考えたい。

1つ目は、遠隔通信を活用した運動教室の試みである。週1回60分、筋力トレーニングが主体のプログラムを、対面指導群と遠隔指導群に分けて3ヶ月間実施し、身体的フレイルの割合の変化を比較した。その結果、両群に違いはなかったが、終了後に遠隔指導の継続を希望した参加者はいなかった。音声や映像の不具合、視聴覚的負担の理由は想定していたが、「寂しかった」といった交流欠如も主な理由に挙げた。運動の場が身体のためだけでなく、他者と共に過ごす社会的・心理的空間であることを参加者の声から再認識した。

2つ目は、ウォーキングと身体的フレイルとの関連をみた横断研究である。地域在住高齢者846名を対象に、ウォーキング習慣の有無と他の運動の実施状況から4群に分類し比較した結果、ウォーキング習慣のみある群の身体的フレイルの割合は、運動習慣がない群と変わらなかった。一方、ウォーキングに加え他に運動している群や、他の運動を継続している群では身体的フレイルの割合が有意に低く、多様な運動の組み合わせがフレイル予防に有効であることが示された。また、「運動習慣」「社会参加」「活動量基準」を軸に8群で検証したところ、2項目以上に該当する人々で身体的フレイルの割合が低かった。

これらの知見は、単一の運動介入や手法では不十分であり、量・質・つながりからなる“身体活動のデザイン”が求められることを示唆している。今回は、データのみならず、参加者の意見も交えながら、身体的・心理的・社会的な視点で高齢期の「運動・スポーツのある暮らし」を考えるきっかけとしたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究 最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-3] シルバーリハビリ体操の実践事例・研究成果

*小澤 多賀子¹ (1. 駒沢女子大学)

<演者略歴>

1994年筑波大学体育専門学群卒業、1996年筑波大学大学院修士課程体育研究科修了後、財団法人東京都健康づくり推進センター、株式会社T H F等に在籍。2015年に筑波大学大学院人間総合科学研究科（3年制博士課程）スポーツ医学専攻修了（博士 スポーツ医学）。現職は、駒沢女子大学人間健康学部健康栄養学科（教授）。

茨城県では、少子高齢・人口減少社会を見据え、平成17年から住民主体の介護予防事業として「シルバーリハビリ体操指導士養成事業」を展開している。本事業では、大田仁史氏が考案した介護予防体操「シルバーリハビリ体操」を普及する高齢のボランティア「シルバーリハビリ体操指導士」（以下、指導士）を養成し、住民自らが資源となり、住民が住民を育てる介護予防システムを構築してきた。

本事業では指導士の活動促進による介護予防や重度化防止を掲げ、体操普及活動による家族や高齢者自身の「自助」、地域社会で支え合う「共助」、公的制度の「公助」を組み合わせ、継続・機能していく体制づくりをしてきた。指導士は、概ね60歳以上（令和2年度より概ね50歳以上）の県民で、令和6年3月の指導士養成数は10,369人である。指導士は茨城県全44市町村に指導士会を設立し、行政と連携して活発な体操普及活動を展開してきた。体操普及活動は新型コロナウイルス感染症の影響で抑えられたが、令和5年度に開催された体操教室は延べ約3.5万回、参加高齢者は延べ約37万人、教室に携わった指導士は約12万人であった。

演者らは、シルバーリハビリ体操は、①指導士や地域で暮らす高齢者が取り組みやすく、両者の生活の質や生活機能の保持に有効で、長期にわたり安全に継続できる、②指導士の活力年齢は若く、地域社会での活躍が期待できる、③長期間かつ高頻度の体操普及活動に取り組む指導士はフレイル該当率が低く、精神的健康度が良好に保たれる可能性を報告した（2014, 2015, 2023）。さらに、指導士による体操普及活動は、地域における介護保険料、軽度の要介護認定率や介護保険給付費の抑制、健康余命の延伸に寄与する可能性も報告している（2014, 2015, 2017, 2023, 2024）。本事業は全国に広がっており（16道県97市町村、令和6年10月）、本シンポジウムでは地域における介護予防の推進に向けた住民主体の運動支援策の事例として紹介する。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1403-06] 健康福祉研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／フレイル研究 最前線—体育・スポーツによる身体的・心理的・社会的フレイル予防—

コーディネーター:大槻 毅(流通経済大学スポーツ健康科学部)

[健康福祉-SA-4] 多様な障害を有する集団におけるアダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスの効果とリスク

*佐藤 敬広¹ (1. 東北福祉大学総合福祉学部)

＜演者略歴＞

1999年順天堂大学スポーツ健康科学部卒業。2001年中京大学大学院体育学研究科修了後、2014年まで（公財）日本パラスポーツ協会、東京都障害者総合スポーツセンターに在籍。その間、東京都健康長寿医療センター研究所協力研究員としても活動した。現職は東北福祉大学総合福祉学部准教授（2022年より）。

様々な身体運動を実施対象者の特性（障害、体力など）に応じてアダプテッド（adapted）することは、スポーツを含む身体運動の楽しさを享受することは基より、多くの対象者におけるフレイル予防の観点からも重要である。またスポーツは、動きのダイナミックさや速さ、滑らかさ等を競うものに限らず、障害等による動作の制限下においても主体的・能動的に身体を動かそうとする行動も含めた広義な健康増進活動として捉える必要がある。演者はこれまで、脳血管障害者を含む多様な疾患・障害を有する集団におけるスポーツ・フィットネス等の運動支援を中心としながら、約500名の障害者の体力評価、介護予防事業における一次・二次予防対象者と脳血管障害者における体力評価の分析、アダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスによる身体的・心理的・社会的効果を介入研究によって示唆している。一方でスポーツ的要素は、対象者が主体的に活動できるツールとして有用であるが、過負荷や転倒などのリスクが存在し、それらが起こり得る背景には障害や体力、技術、コンディションなど様々な要因が考えられる。地域の指導・支援者が対象者による主体的な行動・活動を支援する上では、対象者の挑戦する意思や意欲を尊重しながらも、安全で効果的な環境と支援体制を作ることが重要である。本シンポジウムでは、アダプテッド・スポーツの要素を用いたフィットネスによる身体的・心理的・社会的効果を示しながら、スポーツの要素を用いたフレイル予防について、トレーニングリテリシーとリスクマネジメントの両面から考える機会にしたい。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える―誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツ―

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

本部会では、「子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか」という上位課題に対して、子どもを誰一人取り残さず健やかな成長に寄与する健康・福祉について、JDEI (Justice, Diversity, Equity, Inclusion) の観点から、障害児と性別に焦点を当て、本シンポジウムを企画した。

まず、発育発達学分野から田中氏には、国際的に懸念されている身体不活動について、障害を有する子どもの身体活動量とその変動要因に関する国際機関Active Healthy Kids Global Allianceのアプローチに基づき、障害のない子どもとの比較からご紹介いただく。アダプテッド・スポーツ分野から内田氏には、インクルーシブな視点での授業実践について、最新動向をご紹介いただく。スポーツ文化ジャーナリストの宮嶋氏には、ジェンダー平等の理念により男女の混合種目が増加する中、機会をつぶさないことや場の提供の重要性について、海外事例を含め（諸外国と異なる日本のスポーツ導入の視点から、男女を問わず、本来の運動の楽しさを享受できるスポーツ環境整備について）ご紹介いただく。最後に、体操指導者の佐藤氏には、子どもの運動あそび・運動指導現場における豊富な指導経験からその留意点と障害を有することへの適応について、ご紹介いただく。

[健康福祉-SB-1]

国際比較から見る障害のある子ども・青少年の身体活動・スポーツ参加の現状と課題

*田中 千晶¹ (1. 東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-2]

インクルーシブを目指す学校体育の取り組み

*内田 匡輔¹ (1. 東海大学)

[健康福祉-SB-3]

性別や障がいの有無にとらわれずスポーツをする権利を支える周囲の理解

*宮嶋 泰子¹ (1. 一般社団法人カルティベータ)

[健康福祉-SB-4]

幼児期の運動あそび指導から学んできたこと、そしてこれからの展望

*佐藤 弘道¹ (1. 有限会社エスアールシーカンパニー)

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える一誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツー

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-1] 国際比較から見る障害のある子ども・青少年の身体活動・スポーツ参加の現状と課題

*田中 千晶¹ (1. 東京家政学院大学)

<演者略歴>

同志社大学文学部を卒業。中京大学大学院体育学研究科を修了。博士（体育学）。アーティスティックスイミング元日本代表。専門は、発育発達学、公衆衛生学（専門社会調査士）。子どもと家族の身体活動量促進を目的として、71の国・地域が参画する国際機関「Active Healthy Kids Global Alliance」の日本チームのリーダーを務める。

本報告の目的は、障害のある者となない者をともに含むすべての子ども・青少年の身体活動促進に関する国際的な動向、および日本の現状を概観することである。2020年に発表されたWHO（世界保健機関）Guidelines on physical activity and sedentary behavior（身体活動・座位行動ガイドライン）では、WHOのガイドラインとしては初めて、障害を有する人々などを対象とした推奨が含まれた。5～17歳の子ども・青少年と、同年齢の障害を有する子ども・青少年の推奨を見ると、身体活動・座位行動のいずれについても、推奨の数値的な部分は、障害の有無に関わらず同じである。

Guthold et al. (2020)によると、世界146か国における青少年の81%が身体不活動であることが報告されている。一方、障害のある者については、「Active Healthy Kids Global Alliance」に参画する57の国・地域のうち、身体活動量のデータを報告できたのは11の国・地域のみ

(20%)であった(Nget al. 2022)。このように、世界の多くの国が、障害のない青少年の身体不活動の状況を調査・報告しているのに対し、障害のある青少年を対象に調査する国は少ない。日本における既存の調査の主眼はスポーツ参加状況に置かれており、子ども・青少年の日常生活全般の身体活動量がわかるデータはほとんどない。障害を有する日本の子ども・青少年のスポーツ参加については、ソフト・ハードの両面において課題が多く、同年齢の障害のない人たちに比べ、総じてスポーツを行うことが少なく、行うスポーツのバリエーションも乏しい。本報告ではこれらの調査結果を紹介するとともに、障害のある者となない者をともに含むすべての子ども・青少年の身体活動・運動・スポーツを考える上での論点を提示して議論につなげたいと考えている。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える―誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツ―

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-2] インクルーシブを目指す学校体育の取り組み

*内田 匡輔¹ (1. 東海大学)

<演者略歴>

東海大学体育学部体育学科 教授。筑波大学体育科学研究科修了。修士(体育学)。筑波大学附属ろう学校(現:聴覚特別支援学校)、筑波大学附属中学校保健体育科教員として勤務。2005年より現職に着任。アダプテッド・スポーツ科学を中心に研究。「教養としてのアダプテッド体育・スポーツ」(2018 大修館書店)。

2024年4月から我が国では、改正障害者差別解消法は施行され、法律に基づき合理的配慮の提供が、努力義務から法的義務に変更となった。この法的義務の対象となる事業者は、これまで努力義務であった民間企業や私立学校も対象として含まれている。この変更は事業者によって受け止め方や進め方はそれぞれであるが、合理的配慮提供の取り組みは、進みつつある。一方、公的機関である、役所や病院、学校では、法的義務として合理的配慮の提供が進められ、それぞれの現場で実践は進みつつある。

今回、報告するのは「共に学び共に育つ授業」を目指し取り組まれた、授業研究についてである。この授業研究は、「令和の日本型学校体育構築」を目指し、各教科にて取り組まれている中の、体育、保健体育の授業研究である。この授業研究を通じ、次期学習指導要領を見据え、学校における教科教育、すなわち「授業のあり方」が問われている。

障害のある子どもたちの増加や児童・生徒の多様化への対応も含め、令和の学校は、これまで以上に福祉的な役割や子ども達の居場所としての機能を担うことが求められている。この学校の中核を構成するのは、授業である。その授業は、教科と教科外で構成されている。この授業の内容は、法的拘束力のある学習指導要領(本体)として告示されている。現行の学習指導要領には、「共生の視点」が示され、すべての教科においてインクルーシブな視点での授業実践が進んでいる。この共生の視点に基づき実践される通常学級の体育・保健体育の授業は、障害のある児童生徒が共に学び、共に育つ学習がプログラムとして組み込まれていなければならない。

すべての子どもたちにとって、個別最適な学びと協働的な学びの一つとしての体育授業は、具体的には、技能の習得に偏らず、思考力判断力表現力等に視点があるという様子がある。合理的配慮として提供され変更や調整があるインクルーシブを目指す、学校体育の取り組みについて、報告する。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える一誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツー

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-3] 性別や障がいの有無にとらわれずスポーツをする権利を支える周囲の理解

*宮嶋 泰子¹ (1. 一般社団法人カルティベータ)

＜演者略歴＞

テレビ朝日にアナウンサーとして入社後、ニュースステーションや報道ステーションのスポーツ特集を制作するディレクター兼リポーターを務める。早稲田大学非常勤講師、順天堂大学客員教授を歴任後、現在は日本女子体育大学招聘教授。一般社団法人カルティベータ代表理事、スポーツ文化ジャーナリスト、かめのり財団理事長。

2028年のロサンゼルスオリンピックでも男女混合の競技種目が増えてきた。男性も女性も平等にスポーツをする機会を持てるようにという理念はオリンピックによって牽引されてきたと言ってもいいだろう。長い間日本の学校体育の現場では世界の潮流とは異なり男女別習が行われてきたが、ダンスと武道が必須となり、男女共修の目的や理念も理解されるようになり、子ども自身や親の考えにも変化が表れてきた。しかし、中学女子の三分の一は身体活動が週に60分未満という調査結果もあり、運動嫌いの女子が存在することは否めない。部活動の地域展開が行われる中、特別な用具がなくてもできる体操やダンスは民間クラブなどでも人気だ。世界でも類を見ない見事な動きのハーモニーを見せる日本の男子新体操を行う子ども達の中に最近では女子の姿が見られるようになってきた。女子の新体操といえばレオタードに種具をもって華麗に演じるものであったが、男子新体操を行う女子たちは黒いスパッツの地味な衣装を着てバク転や静止技を繰り返していき。ここで大切なのは指導者の考え方だ。子ども達がやりたいと言ったときに指導者はどのような声掛けをしているのか。2024の大会で女子だけのチームが優勝して周囲を驚かせた。

長きにわたり女子種目であったアーティスティックスイミングにも今では男子加入が認められているが、1990年代に米国で一人の男子選手が女子だけに許されていた重い扉をこじ開けた。その指導者はどのように彼をサポートしたのか。選手への言葉がけは常にやりたいという意味を尊重するものだった。さらには指導者だけではなく、選手達が大会に出場できるように国内ルールを作って尽力してきた役員たちの存在も忘れることはできない。

またダウン症の障害を持った子ども達に運動の機会を積極的に与えている親の考え方など、本来誰もが持っている「スポーツをする権利」について改めて考える。

テーマ別シンポジウム | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1411-14] 健康福祉研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／こどもまんなか社会での健康・福祉を考える―誰一人取り残さない、身体活動・運動・スポーツ―

コーディネーター: 檜皮 貴子(新潟大学)、田中 千晶(東京家政学院大学)

[健康福祉-SB-4] 幼児期の運動あそび指導から学んできたこと、そしてこれからの展望

*佐藤 弘道¹ (1. 有限会社エスアールシーカンパニー)

＜演者略歴＞

日本体育大学体育学部卒業後、1993年よりNHK「おかあさんといっしょ」の第10代体操のお兄さんを12年間務める。2002年に有限会社エスアールシーカンパーを設立し、全国で親子体操や幼児の運動指導、指導者の育成を展開している。さらに2015年には、親子体操を研究課題に弘前大学大学院にて博士号（医学）を取得。

12年にわたるNHK「おかあさんといっしょ」での体操のお兄さんとしての経験や全国での親子体操教室、幼児・小学生の運動あそび指導や幼稚園・保育園・こども園の先生方への実技研修会に関わった経験から、子どもたちの体を通した運動やあそびの世界について紹介する。具体的には、2015年に弘前大学大学院で親子体操をテーマに博士号を取得した学位論文の知見や体操教室での夏・冬のキャンプでの経験も踏まえて、今まさに現場で起こっている課題や指導的配慮についても述べていく。子ども（幼児）の身体活動は「スポーツ」ではなく「あそび」が中心である。その「あそび」の何が大切で、指導者として何に配慮をしながら指導実践を積み重ねてきたのかを実践内容を交えながら述べていく。

また、自身においては2024年6月に脊椎梗塞を患い、現在もなおりハビリを継続している。病と向き合い、日々続くリハビリに取り組む中で実践してきたこと、運動が持つ可能性について、子どもたちの「あそび」との共通項を探しながら、私の経験を語りたい。そして、生涯を通した豊かなスポーツ（運動・あそび）ライフの重要性について参会者の皆様と共に確認できたらと考えている。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・イシューにいかに関与し、立ち向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考えるー

コーディネーター: 植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

世界各地で止むことなく続く国家・地域間紛争は、我々スポーツ科学者・実践者に、スポーツが「平和な社会の構築」の有力な手段であるという認識の再考を強く促している。戦地の拡大や難民の発生・集合・離散、繰り返される社会制度の構築・解体など日々刻々と変化する状況に直面した時、有効と思われた既存の方法が一瞬にして無力化したり成立しなくなったりする事態が起こりうるからである。しかしながら、このような不安定な状況下においても手は止めるわけにはいかない「支援」はいかにし得るだろうか。

このような問題意識のもと、スポーツ文化研究部会「課題A」では昨年度から「スポーツと平和」研究や現場での実践に関わって来られた研究者や実践者の方々をお招きし、理論（＝研究）と実践（＝現場での活動）の「現在地」を捉えることをねらいとして議論を行ってきた。前年度の「オリンピックにおける平和の理念・理論と平和構築実践」の理論的再検討の成果をふまえて、今年度は平和構築が喫緊の課題となってきた現場に深く関わって来られた3名の先生にご登壇いただき、これまでの取り組みの成果をご提示いただく。また、現場での実践過程で直面してきた問題や課題についてもお話いただき、スポーツを通じた平和構築実践の実相（現場のリアリティ）と支援のあり方に迫ってきたい。

[スポーツ文化-SA-1]

インクルーシブな良質の体育の促進過程で派生する諸問題

*岡出 美則¹ (1. 日本体育大学)

[スポーツ文化-SA-2]

スポーツは地域のセーフティネットとなり得るか

アフリカの草の根クラブとの協働事例から考える

*岸 卓巨¹ (1. 一般社団法人A-Goal)

[スポーツ文化-SA-3]

紛争下の緊急支援におけるスポーツ・プログラムの実践のあり方について

*井本 直歩子^{1,2} (1. 一般社団法人SDGs in Sports、2. 聖心女子大学)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与し、立ち向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考えるー

コーディネーター:植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

[スポーツ文化-SA-1] インクルーシブな良質の体育の促進過程で派生する諸問題

*岡出 美則¹ (1. 日本体育大学)

<演者略歴>

専門は体育科教育学。博士（教育学）。筑波大学体育研究科終了後、小学校教員として職歴をスタートし、保健体育の教員養成に関わってきた。愛知教育大学を経て筑波大学体育系教授。現在は日本体育大学スポーツ文化学部教授。

本発表では、カンボジア、ミャンマー、ボスニア・ヘルツェゴビナ、南スーダンにおいて展開されたJICAの体育カリキュラムの開発、実施に関わるプロジェクトに専門家として従事してきた経験からプロジェクトの遂行に関わり現場で派生する課題について紹介したい。これら4ヶ国は期間の長短や時期が異なるとはいえ、いずれも内戦経験国であり、現在もその影響が残っている。また、体育のカリキュラム開発には公教育の保証に向けた取り組みであるとはいえ、体育の制度的な位置づけやその実行体制、能力も異なっている。他方で、プロジェクトの予算は規模が違うとは言え、配当されている。しかし、使い勝手がいいわけではない。この点を踏まえつつ、本発表では、1) 自分は受け入れられるのか、2) 言葉の意味は共有可能か、3) 成果を届けるシステムが存在しない、4) 現地での見えないステータス、手続きが存在する、5) カウンターパートが来ない、6) お金で動くわけではない、本音はどこにあるか、7) 自立に向けた自走と持続可能なシステム構築に必要な時間とは、という7つの課題を紹介し、スポーツを通じた平和構築にかかわるプロジェクトの実行段階の現場で派生する問題やその解決に向けた取り組みについて紹介したい。

なお、プロジェクトの現場という場合、企画が認められない、予算規模が不足する、専門家が常駐できない、あるいはいない、等々の問題も派生する。同時に、体育のプロジェクトという場合、競技化された近代スポーツの形態や競技の結果のみに目を奪われやすい。その結果、スポーツの持つ多様な価値に目が向けられなくなってしまうリスクも派生する。スポーツはプロジェクトの契機となり得るとはいえ、教育という課題のもとにおかれた体育の価値やその実現に必要な制度、文書、手続きにも目を向けることが求められる。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与し、立ち向かうのか？

■ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 ■ 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考えるー

コーディネーター:植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

[スポーツ文化-SA-2] スポーツは地域のセーフティネットとなり得るか
アフリカの草の根クラブとの協働事例から考える

*岸 卓巨¹ (1. 一般社団法人A-Goal)

<演者略歴>

2011年よりJICA海外協力隊としてケニアの児童保護措置所で活動。その後、Tokyo2020レガシー事業「Sport for Tomorrow」のコンソーシアム事務局での勤務や、大学院にてアフリカにおけるスポーツを通じた開発の実態について研究を行う。現在は（公財）日本アンチ・ドーピング機構に勤務する傍ら、一般社団法人A-GOALの代表として、ケニア・マラウイ・日本を主な拠点として、スポーツを通じた社会課題解決の取り組みを行っている。

本発表では、「平和」を、人々が互いの尊厳を認め合いながら共に生きることができる状態と定義し、スポーツが地域社会におけるセーフティネットとしてどのように機能し得るのか、アフリカでの事例を通して検討する。

ケニアでは、貧富の差が大きく、貧困層の人々は公的支援を得ることが困難な状態にある。ここでは、日々の生活を維持するために人と人とのつながりが、「ライフライン」として機能している。こうした地域において、多くの草の根のサッカークラブが、スポーツの場にとどまらず、ストリートチルドレンの保護、コミュニティスクールの運営といった多様な地域活動を行っている。サッカークラブの運営者が、そうした活動に取り組む背景には、様々な社会的要因があり、地域活動を通じた人とのつながりが、自らの暮らしを支える基盤となっている現実がある。

発表では、これまでの「スポーツを通じた開発」の研究において、十分に引き上げてこなかったスポーツの実相をより具体的に理解する手がかりとして、A-GOALの取り組みを紹介する。A-GOALでは、ナイロビのキベラスラムにおいて、複数の既存クラブや指導者とともにユースサッカーリーグを、年間を通して運営し、コミュニティの力を高めている。そこでは、政府系のプロジェクトなどで取られがちな「支援者と裨益者」といった2項対立的な構図ではなく、現地住民が主体となり、地域内での助け合いを日本や遠隔地から伴走的に支えるという関係性が築かれている。もともと、地域に根ざした活動を行い、人々のつながりを育み出している草の根のスポーツクラブとNGOが連携するからこそ、現地のニーズに根ざした活動や持続可能性の担保、その時々々の社会情勢（物価変動・災害等）に合わせた臨機応変な対応を可能にしている。

本発表では、スポーツがいかに関与して地域のセーフティネットとなり得るのか考察するとともに、地域や立場を超えて広がる協働のかたちを考える機会としたい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与し向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1604-06] スポーツ文化研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／「スポーツと平和」のリアリティー最前線の現場経験から考えるー

コーディネーター:植田 俊(東海大学)、沖 和砂(会津大学)

[スポーツ文化-SA-3] 紛争下の緊急支援におけるスポーツ・プログラムの実践のあり方について

*井本 直歩子^{1,2} (1. 一般社団法人SDGs in Sports、2. 聖心女子大学)

<演者略歴>

元競泳日本代表。アトランタ五輪4x200mリレー4位。マンチェスター大学大学院にて貧困・紛争・戦後復興の修士号を取得。国際協力機構（JICA）、国連児童基金（ユニセフ）のスタッフとして、約20年間発展途上国の平和構築・教育支援に従事。現在、聖心女子大学大学院で気候変動教育を研究する傍ら、スポーツ界の環境・気候変動対策およびジェンダー平等推進に取り組む。

国際的な紛争現場での緊急支援の現場において、「スポーツ」というセクターは未だメインストリームの地位を確立してはいないものの、心のケアの一環など、スポーツのプログラムはめずらしいものではなくなってきた。本発表では、小職が国連児童基金の教育専門家として、スリランカ（内戦）、マリ（内戦）、ギリシャ（難民）の緊急支援の教育プログラムの一環で実践してきたスポーツの活用事例、またモザンビーク北部の紛争地域でのNGOによるスポーツと平和のプロジェクトの実践事例を紹介する。緊急支援においてスポーツ・プログラムがどのようにその地位を確立してきたのか、目的、実施形態、予算配分、時間配分、効果測定、持続可能性等の観点からその効果や課題を検討したい。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター:周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者:中村 哲也(高知大学)

近年、学校部活動の地域移行／地域展開をめぐる議論が活発化することで、自明視されてきた学校中心のスポーツのあり方が大きな転換点を迎えている。こうした転機に際して、本シンポジウムでは、日本における青年期のスポーツ文化がどのように形成・継承されてきたのかを、学校と地域という二つの実践の場に焦点を当てて検討する。

学校においては、体育や運動部活動が身体的健全性の育成や、競い合いを通じた向上心の習得、さらには社会的規範や責任感の涵養といった教育的価値の体现の機会として定位し、スポーツは学校教育における人間形成の重要な要素として位置づけられてきた。各時代の社会的要請を反映した教育政策や制度に連動しながら、青少年スポーツの主要な場として戦後の学校教育に深く根づいてきた。一方、地域スポーツクラブにおいては、年齢や立場を超えた参加を可能にし、個人のニーズやライフスタイルに応じた柔軟なスポーツの楽しみ方が展開されてきた。こうした地域社会の実践は、コミュニティ・スポーツや生涯スポーツの推進といった政策的な動向とも連動しつつ、地域に独自のスポーツ文化を育んできた。

本シンポジウムでは、これら二つの場において育まれてきたスポーツ文化の様相について、歴史的・制度的・文化的に捉え直しながら、それぞれの場ではいかなるスポーツ文化が構築・継承されてきたのかについて議論する。部活動の地域移行／地域展開という制度改革を単なる「再配置」として見做し、そのメリットとデメリットを性急に比較したり、その運営に要するリソースの問題へと足早に落とし込んだりするようなスタンスではなく、それぞれの場におけるスポーツ文化の具体像やその存在意義について深く視野を向けたい。バックグラウンドの異なる専門家・実務家をシンポジスト・指定討論者に迎え、青年期のスポーツ文化のあり方について多角的・批判的に検討することにより、より持続可能で包摂的なスポーツ実践のあり方、ならびに次世代のスポーツ教育の方向性を展望する機会としたい。

[スポーツ文化-SB-1]

運動部活動がスポーツ文化に及ぼした影響

教育言説からのアプローチ

*神谷 拓¹ (1. 関西大学)

[スポーツ文化-SB-2]

学校運動部と地域および行政におけるスポーツ文化

体育社会学的解釈をもとに

*谷口 勇一¹ (1. 大分大学)

[スポーツ文化-SB-3]

子ども一人ひとりにフォーカスした柔道大会の創設経緯とその成果

*永瀬 義規^{1,2} (1. 一般社団法人スポーツひのまるキッズ協会、2. 株式会社ジャパンスポーツコミッション)

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター:周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者:中村 哲也(高知大学)

[スポーツ文化-SB-1] 運動部活動がスポーツ文化に及ぼした影響 教育言説からのアプローチ

*神谷 拓¹ (1. 関西大学)

<演者略歴>

筑波大学大学院人間総合科学研究科修了。博士（教育学）。岐阜経済大学（現在、岐阜協立大学）、宮城教育大学を経て現職。日本部活動学会会長、日本体育科教育学会理事。

本報告では、運動部活動がスポーツ文化に及ぼした影響を教育言説の観点から読み解いていく。これまで学校でスポーツ活動に取り組む際に、その教育的意義が「体力づくり」「競争」「道徳」に見出されてきた。これらは学習指導要領の目標として、そして、内申書・調査書の評価項目として位置づけられてきたことによって教育現場に影響を及ぼしてきた。また、学校の対外試合の方針を定めた対外試合基準も、「体力づくり」「競争」「道徳」を理由に緩和され続け、各時代の教育政策を具現化する役割を果たしてきた。

しかし、これらの教育言説は、学校に部活動を位置づける論理として脆弱であった。実際に1969年以降、さらには、1998年以降に部活動の地域移行が進められたが、「体力づくり」「競争」「道徳」は学校でなくても取り組める教育内容でもあり、これらの言説は学校に部活動を位置づける根拠にならなかった。その問題は2008年以降の学習指導要領でも続いており、「総則」で示された部活動の方針に貫かれている原理は、依然として「体力づくり」「競争」「道徳」である。そのため、現在も学習指導要領の方針から部活動を捉える限り、学校に位置づける根拠を見出すことはできないのである。

そのような問題をふまえ、修正を図ろうとする対抗言説もあった。戦後初期の学習指導要領で提唱された「レクリエーション」言説であり、また、その言説を教師の専門性との関連で理論化しようとした宮坂哲文、城丸章夫、中村敏雄といった民間在野の研究者たちの主張である。しかし、それらの理論を推進する役割を果たすことが期待された教職員組合には、部活動よりも教師の労働環境の改善を重視する人も多く、この言説は一部の実践家に継承されるに止まり、3つの教育言説を批判・是正する勢力にはならなかった。今後のスポーツ文化の在り方を展望するうえでも、このような教育言説の歴史をふまえた議論が求められる。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター:周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者:中村 哲也(高知大学)

[スポーツ文化-SB-2] 学校運動部と地域および行政におけるスポーツ文化 体育社会学的解釈をもとに

*谷口 勇一¹ (1. 大分大学)

<演者略歴>

県立宮崎南高等学校、群馬大学教育学部卒、広島大学大学院修了（教育学修士：1994年）、福岡大学体育学部助手、財団法人福岡市体育協会嘱託職員を経て現職（2001年～）、日本体育社会学会理事、ロジェ・カイヨワの遊びの文化論（ミミクリ）を尊び、衣笠祥雄（広島カープ）の打撃模倣を特技とする。

「部活動の地域移行のことですか、行政と学校、それに地域の三者間の思いみたいなものが噛み合っていない状態が続いていますね。難題そのものです…。」直近にフィールドワークを実践した際、某県教育（スポーツ）行政指導主事から得られたコメントである。批判の学問である体育社会学の研究者としては実に興味深い。

スポーツ庁（文部科学省）が推進している部活動の地域移行・展開をめぐる今日の様相は、各自治体および地域事情により大きく異なっている。都道府県もしくは市区町村教育（スポーツ）行政による積極的主導をもとに、自治体単位で推進されている事例とそうでない事例とが混在しているのである。それもまた興味深く、研究関心を高揚させてしまう。上記したような部活動をめぐる今日の様相は「それが当然、それで構わない」のである。

スポーツが文化であること、そのことに疑いの余地は一切ない。但し、スポーツを取りまく「場」にもまた各々の文化が形成・醸成されてきた。文化とは、一義的な概念ではなく実に多義的なものである。教育社会学者である久富善之の文化論は「（組織・集団をめぐる文化とは）歴史的に選択され、形成され、継承され、また創造されながら変容していく」とされている。すなわち、スポーツに関与し続けてきた学校、地域、そして行政においては、各々に「スポーツへの関わりに伴って形成されてきた文化内容」が存在しているのである。しかるに、今日の学校部活動を取りまく構造変革の動向は、学校、地域および行政各々が有してきた個々のスポーツ文化（観）をめぐるコンフリクト（揺らぎ＝文化的営為）が生起されつつある状態との解釈こそ妥当であろう。当該のコンフリクトの「勝者」は、社会学的再帰論の観点からしても学校になるであろう（なるべき）と思えてならない。地域資源の活用を基軸とした学校「部活動」の再生は、社会に新たなスポーツ文化の創出をもたらすに違いない。

テーマ別シンポジウム | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1611-13] スポーツ文化研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／青年期のスポーツ文化を問い直すー学校と地域ではどのようなスポーツ文化が継承されてきたのかー

コーディネーター: 周東 和好(上越教育大学)、関根 正敏(中央大学) 指定討論者: 中村 哲也(高知大学)

[スポーツ文化-SB-3] 子ども一人ひとりにフォーカスした柔道大会の創設経緯とその成果

*永瀬 義規^{1,2} (1. 一般社団法人スポーツひのまるキッズ協会、2. 株式会社ジャパンスポーツコミッション)

<演者略歴>

中央大学文学部国文学科卒 卒業後出版社勤務→渡米→帰国後全日本柔道連盟にて企画広報課長。1996年アトランタ五輪、2000年シドニー五輪ではJOCプレスアタッシュとして全競技の取材対応責任者を歴任。2008年に独立し、2009年からスポーツひのまるキッズプロジェクトを展開。2025年度は柔道を中心に全国14か所で小学生の親子イベントを開催。2021年東京五輪・日本武道館メディアマネージャー。『柔道マガジン』発行人でもある。

「また、永瀬が変わったことをやりだした・・・」17年前、起業して2年目からスタートした『スポーツひのまるキッズ』、5年後に一般社団法人を立ち上げ事業を移してから一貫して実施したのは『スポーツで親子の絆を深め、子と夢をつなげる』こと。そして、その取り組みはやがて『スポーツのテーマパーク』を言われるようになり、数年前、『勝利至上主義につながるから』と全柔連が小学生の個人戦を主催しないと決定した時点で唯一無二の全国小学生柔道イベントとなった。`当たり前のことを当たり前にできる子供の育成`を掲げ、エントリーシートには`勝負だけにこだわる人の参加はご遠慮ください`と明記され、最高の賞は学年で1名しか選ばれない『マナー賞』。さらに、『一回戦で負ける人は半分、負けてからが勝負』とオリンピックが講師となって受け身コンテスト、打ち込みコンテストを実施し点数をつける。イベントが終わったら全国400社のスポンサーがバックアップする衣食住遊のブースで楽しみまくる……。試合、コンテスト、ブース参加ですべての規範となるのが『ひのまるキッズ六訓』。柔道以外の競技でもそれぞれの特性を活かしつつ『親子で参加』『マナー賞が一番』の形は崩さず展開している。今回は、これまで参加無償で実施されている部活動を地域で有償で継承するにあたり、すでに『道場』という地域活動の拠点を持っていた柔道界においてある意味ビジネス化できつつある要因を検証していきたい。「ライバルは？」と聞くと真顔で「ディズニーランドです」と答える弊社スタッフ代表として……。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 ㊦ 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

本シンポジウムでは、「多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは」をテーマに、共生の視点からみた保健体育の現代的課題やカリキュラムに係わる問題を共有し、今後について展望することを目的とする。本シンポジウムでは、保健体育のうち「体育」の授業に焦点をあてる。

昨今、多様性の理解や共生社会の実現が社会的課題として位置づけられ、教育課程においても実現のための手立てが示されるようになった。小学校・中学校学習指導要領（体育編／保健体育編、平成29年）、高等学校学習指導要領（保健体育編、平成30年）では、「豊かなスポーツライフの実現を重視し、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう、共生の視点を踏まえて指導内容を示すこと」が明記された。

制度としてのカリキュラムや枠組みが示された一方で、そのねらいとは反して展開されている授業や形骸化しているカリキュラムがあることも見逃してはならない。「共生社会の実現」や「豊かなスポーツライフの実現」を目指した学習指導要領の改正によって、体育は如何に変化したのだろうか、あるいは変化していないのだろうか。加えていえば、学習指導要領に記される共生社会や豊かなスポーツライフの実現は、すべての学習者が対象にされているのであろうか。

以上の問題意識から、本シンポジウムでは、体育授業における男女共習と障害のある児童生徒を取り上げ、実践研究の蓄積から得られたエビデンスをもとに現代的課題を共有する。さらに、ジェンダー・セクシュアリティの視点から学校体育やカリキュラムの問題について問う。本シンポジウムにおける問題提起から、性別や障害のある児童生徒に留まらず、多様な学習者が学び合う体育授業のあり方や共生社会の実現に向けた保健体育の可能性について考えたい。

[学校保健体育-SA-1]

男女共習の実際とジェンダー平等な体育の在り方

*佐野 信子¹ (1. 立教大学)

[学校保健体育-SA-2]

多様な学習者が共に学び共に育つ体育授業の課題と展望

*綿引 清勝¹ (1. 東海大学)

[学校保健体育-SA-3]

体育は多様性を受け入れることができるのか？

ジェンダー・セクシュアリティの視点から

*井谷 恵子¹ (1. 京都教育大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏢 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

[学校保健体育-SA-1] 男女共習の実際とジェンダー平等な体育の在り方

*佐野 信子¹ (1. 立教大学)

<演者略歴>

立教大学スポーツウエルネス学部教授。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程単位取得退学。弘前大学教育学部専任講師を経て、立教大学社会学部専任講師、助教授、現在に至る。3年間の弘前大学在職中は、同僚や附属中学校教諭らと「体育とジェンダー」について議論を重ね、新しい体育の在り方を実践した。

本発表は、「男女」がお互いを強く意識し合い、最も男女共習体育の実践が難しいと考えられる、中学校の男女共習体育授業について述べるものである。現行の学習指導要領解説保健体育編では、「原則として男女共習で学習を行うことが求められる」と示されている点をまず確認したい。しかし、「原則」故か未だそれが守られず、男女別習体育を実践し続けている学校が散見されるのが現状である。

さらには、「男女」共習という用語が独り歩きし、「男女」が一緒に体育の授業を受ければよいのだろう、と短絡的に解釈されているようにもみえる。そのため、グループ作りも「男女」同人数で分けられたり、スポーツが苦手な「女子」に配慮したルールで授業が進められたりといった実態が確認できる。これらが、少なからぬ中学校でまかり通っている「男女」共習体育の実際の一部である。

本発表者は、今、希求されているのは「ジェンダー平等な体育」の理念を有した「男女共習体育」であると考えている。

では、「ジェンダー平等な体育」とは、どのようなものであろうか。それは、あらゆるジェンダーの生徒の中で合理的な配慮が必要な生徒には配慮がなされた上で、ジェンダーに関わりなく、生徒達が共に学習することのできる体育ではなかろうか。そのため、グループの構成が同じジェンダーだけの場合もあれば、ランダムなジェンダーになる場合もある。スポーツが苦手な「女子」への配慮ではなく、スポーツが苦手な「学習者」への配慮が必要な場面はあるかもしれない。

このような授業を可能とするためには、体育を離れ、普段の学校生活の中でも、「ジェンダー平等」な実践がなされてなければならないであろう。そして、体育でのこのような試みが浸透していくことによって、「ジェンダー最後の砦」といわれるスポーツを学ぶ体育の時間が、学校内に「ジェンダー平等」を定着させる起爆剤ともなり得るのではないかと本発表者は考えている。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏢 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

[学校保健体育-SA-2] 多様な学習者が共に学び共に育つ体育授業の課題と展望

*綿引 清勝¹ (1. 東海大学)

<演者略歴>

筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程修了。修士（体育学）。公立特別支援学校の保健体育科教員として勤務。小田原短期大学、いわき短期大学を経て東海大学児童教育学部特任講師。公認心理師。臨床発達心理士。特別支援教育士。日本体育・スポーツ・健康学会学校保健体育研究部会部会長。領域横断特別委員会委員。

現行の学習指導要領の解説（小学校体育編／中・高等学校保健体育編）では、改訂の要点として「運動やスポーツとの多様な関わり方を重視する視点から、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際、共生の視点を重視して改善を図ること」と示されており、共生社会の実現へ向けた学校保健体育の果たすべき役割として、運動やスポーツの価値の一つに「共生」が含まれている。第三期スポーツ基本計画においても「生涯にわたって運動・スポーツを継続したい子供の増加」や「体育授業への参加を希望する障害のある児童生徒の見学ゼロを目指した学習プログラムの開発」が目標に掲げられており、運動につまずきがある児童生徒も含めたすべての子どもたちがどう身体活動を楽しみ、学びを深めるかは重要な教育課題と言える。

近年、通常の学級や特別支援学級の授業研究などでも教育現場を訪問する機会をいただいている。様々な相談の中には、協調運動の困難さを示す発達性協調運動症や肢体不自由等の体育の授業に直接関連する学習上の困難さだけでなく、授業におけるつまずきや失敗が不適応の原因になっているという事例がある。一方で、体育の授業を介して日常生活場面でも社会的な関わりが広がったという事例もある。

本シンポジウムでは、神奈川県立総合教育センターが令和の日本型学校体育構築支援事業の委託を受けて取り組んだ「共に学び共に育つ体育授業の調査研究」の成果と課題を交えた話題提供を行う。そこから得られた知見や教育現場からの声を参加者と共有しつつ、多様な学習者が共に学び、共に育つインクルーシブ体育のあり方について議論を深めたい。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 10:10 ~ 12:10 🏛 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a201-03] 学校保健体育研究部会【課題A】テーマ別シンポジウム／多様な学習者が学び合う保健体育の授業とは

コーディネーター:木村 華織(東海学園大学)、吉永 武史(早稲田大学) 指定討論者:横山 剛士(金沢大学)

[学校保健体育-SA-3] 体育は多様性を受け入れることができるのか？ ジェンダー・セクシュアリティの視点から

*井谷 恵子¹ (1. 京都教育大学)

<演者略歴>

京都教育大学名誉教授。博士（学校教育学）。専門分野：体育科教育学、体育・スポーツとジェンダー研究。日本スポーツとジェンダー学会理事。近著：『どうして「体育嫌い」なんだろう ジェンダー・セクシュアリティの視点が照らす体育の未来』（2025, 大修館書店）

人々の多様性を考えるにあたって、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、障害などのカテゴリーがそれぞれ別個にではなく、相互に関係し、人びとの経験を形づくっていることを示すインターセクショナリティ（交差性）という概念を捉えることが重要である。「多様性を尊重」するとは、多様な側面を持つ個人の存在を認め、尊重するだけでなく、複合的な差別や権力関係、特権の交差に眼を向ける必要がある。

一方、学校体育の現状を見ると、エリート男性の教育手段として発祥・発展してきた競技スポーツが体育カリキュラムや運動部活動の中心に置かれており、経験でも能力でも優位な特権性を持つ者が制度設計や指導にあたっていることが常である。「ボールが怖い」「水着が嫌」

「体育がなくなればいいのに」という「体育嫌い」の子どもたちの思いがカリキュラム作成や指導の場にどれほど反映されているのか改めて問い直す必要があるだろう。例えば、「スポーツはすべての人の権利である」と謳われながら、スポーツでも学校でも性別二元制は絶対的な規範として機能している。男女に分けることによって見えなくなる存在は、置き去りにされている。また、学習指導要領の変遷とともに体育の目標が変化しても、実践段階での評価は相変わらず技能に重心が置かれている。

本発表では、「体育は多様性を受け入れることができるのか？」という基本的クエストに立ち、ジェンダー、セクシュアリティの視点から議論を深める。発表の構成として、(1)多様性とは何か (2)男はできて当たり前？ 女は嫌いでも仕方がない？ (3)競技スポーツ中心の学校体育の問題 (4)解決に向かうために を予定している。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

我々は実社会に求められる学校保健体育の課題を「身体」の教育と定め、児童生徒が主体的・対話的に学ぶ学校保健体育の可能性を検討している。昨年度のシンポジウムでは、変動練習の授業実装例の紹介から「身体を知る、護る、楽しむ」ことの重要性、バイオメカニクス研究による測定が児童の主体的・対話的な学習につながる可能性、自己調整学習の紹介を通じた児童生徒の主体的な学びを促す可能性、大学体育が再検討すべき課題と主体的・対話的な学びを高校から大学へ拡張する見通しが提案された。さらに、学びの一連のプロセスとして「内化・外化・新内化」が紹介され、ICTやAIの活用による効果について討議がなされた。

本年度のシンポジウムでは、学校保健体育の真正の学びの実現に向けて、ICTやAI等の技術支援の見通しを共有し、近年注目されているライフパフォーマンスと連携させることで児童生徒の学びが深化する可能性を検討する。この検討から、「身体」の教育を通底させた学校保健体育・スポーツ科学の新たな連携を提示し、「内化・外化・新内化」の往還が学校保健体育の真正の学びを実現すること、それがライフパフォーマンスの向上の一助となることを提案したい。

[学校保健体育-SB-1]

拡張のみのりとしての「外化・内化・新内化」

その技術支援と「深い学び」への展望

*山田 孝禎¹ (1. 福井大学)

[学校保健体育-SB-2]

ハイパフォーマンススポーツのライフパフォーマンス向上への汎用可能性を探る

*清水 和弘¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター)

[学校保健体育-SB-3]

「身体」から見出すリテラシー教育としての学校保健体育

*高橋 浩二¹ (1. 長崎大学)

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 📍 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

[学校保健体育-SB-1] 拡張のみのちのりとしての「外化・内化・新内化」 その技術支援と「深い学び」への展望

*山田 孝禎¹ (1. 福井大学)

<演者略歴>

金沢大学教育学部卒業、金沢大学大学院教育学研究科修了、金沢大学大学院自然科学研究科修了、博士(学術)。福井工業高等専門学校講師、福井大学教育学部講師・准教授を経て同大学教授。日本体育測定評価学会理事。

コロナ禍を経て、ICTを活用した実践をさらに推し進めようとする動きが高まった。この動きの中で試行錯誤されてきたICTの活用方法は、対話的な学びに一定の貢献を果たしていると評価される一方で、技能の獲得や改善・向上に直結させようとするものであるようにも捉えられる。学習者の興味・関心や学習意欲を高め、さらに主体的で対話的な学びを促進し、「深い学び」へ繋がられるようなICTの活用方法が求められる。とりわけ、学校保健体育領域においては、動きの可視化・客体化を目的にICTが活用される場面が多いが、動画撮影・閲覧に留まっているケースが大半である。ICTとバイオメカニクスあるいは運動生理学等の分野で代表される動きのキネマティクスや筋電図あるいは心拍数等とを組み合わせ、簡便にかつリアルタイムで授業実践に活用されているケースは稀である。導入に向けて、経済的なハードルをはじめ、授業者の活用スキル(パラメータの選択や提示方法)、学習者の情報を読み取る力(情報量や読み取り方)等、多くのハードルが想定される。本発表内容が今後の学校保健体育分野におけるICTの活用を通じた「深い学び」のきっかけになることを祈念する。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

■ 2025年8月28日(木) 15:00～17:00 ■ 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

[学校保健体育-SB-2] ハイパフォーマンススポーツのライフパフォーマンス向上への汎用可能性を探る

*清水 和弘¹ (1. 独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター)

<演者略歴>

筑波大学第一学群卒業、筑波大学大学院体育研究科修了、筑波大学大学院人間総合科学研究科修了、博士（スポーツ医学）。早稲田大学スポーツ科学学術院助手、筑波大学スポーツR&Dコア研究員、独立行政法人日本スポーツ振興センター研究員・前任研究員を経て同センター副主任研究員。筑波大学体育系准教授（連携大学院）。

競技における最大限のパフォーマンス発揮には、体力や技術、心理に加え、疾患、用具、スケジュール、戦略・戦術等、多岐にわたる要因を望ましい状態に調整すること（コンディショニング）が求められる。コンディショニングは、アスリート自身がその知識や技能を備えて主体的に実践・継続できるようになることが重要であり、そのための支援が必要である。例えば、演者はコンディショニングの相談窓口（免疫機能を数値化し、主観や運動、睡眠、リカバリーを鑑みたコンディショニングを提案）、ハンドブックやセミナーを通じて、アスリートのコンディショニングのリテラシー向上を図った試みを進めている。このようなハイパフォーマンススポーツのコンディショニングの知見はライフパフォーマンスの向上に貢献できる可能性があり、その検討や取組みが始まっている。コンディショニングの知識や技能の習得、習慣化は早期になされることが望ましく、学校教育は最適な場であると考え。しかし導入には、学習指導要領や教員の負担、コスト、学習者の運動・スポーツへの興味・関心等、様々な観点の検討が必要である。本発表は、その課題解決の糸口を見出す場にできればと考える。

テーマ別シンポジウム | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 15:00 ~ 17:00 記念講堂(教育研究棟 1街区 B階 1B01)

[2a204-06] 学校保健体育研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／身体の主体的・対話的学びから「深い」学びへ

コーディネーター:大塚 光雄(日本体育大学)、梶田 和宏(京都先端科学大学)

[学校保健体育-SB-3] 「身体」から見出すリテラシー教育としての学校保健体育

*高橋 浩二¹ (1. 長崎大学)

<演者略歴>

千葉大学教育学部卒業、上越教育大学大学院修了、東京学芸大学連合大学院修了、博士（教育学）。大阪産業大学講師を経て長崎大学准教授。日本体育・スポーツ哲学会理事、日本体育・スポーツ・健康学会体育哲学専門領域運営委員。学校保健体育研究部会部会員（副部会長）。

本発表では、大学を含む学校保健体育における「身体」の教育を概観し、その教育と近年注目されているフィジカルリテラシーやライフパフォーマンスの向上との関係について検討する。例えば、フィジカルリテラシーは身体活動に取り組む全ての者にとって育成可能であり、学校保健体育における真正の学びや本質的な問いの設定に繋がる。また、ライフパフォーマンスの考え方は学校教育における「生きる力（未来を生き抜く力）」と類似する点が多く、この能力の向上は学校保健体育の目的の一つとなり得る。特に、学校保健体育では、主体的・対話的に学習（修）を進める過程で自己の心身の変化を自覚しながら調整して対応したり、先を見通す力が養われる。そこには他者への気付きも含まれ、生涯にわたる身体活動への動機、自信にも繋がるだろう。しかし、それらの適用には競技力の向上といった先鋭化の問題や数値による評価といったメリトクラシーの問題が生じる可能性があり、スポーツ科学や健康科学の知見を学校保健体育と連携させる際には注意する必要がある。学校保健体育で育成される能力は時代の要請によって変化するが、その基盤は「人間の身体」であり続けることになる。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-18]

部活動改革に伴う教員の兼職兼業の運用に関する一考察（教）

*笠井 義明¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-19]

滋賀県大津市における運動部活動の地域移行・地域展開に関するグランドデザイン（経,教）
政策科学的アプローチによる試論

*大西 祐司¹、黒澤 寛己¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-20]

部活動地域移行における指導者確保に関する研究（社,経,政）
体育系大学生を対象としたアンケートより

*藤原 悠太¹、早田 剛¹ (1. 環太平洋大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00～10:00 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:00～9:20

**[学校保健体育-A-18] 部活動改革に伴う教員の兼職兼業の運用に関する一考察
(教)***笠井 義明¹ (1. 静岡産業大学スポーツ科学部)

スポーツ庁・文化庁は2023（令和5）年度から2025（令和7）年度までの3年間を「改革推進期間」と位置付け、学校部活動の地域連携・地域クラブ活動への移行（以下「部活動の地域展開」という）を進めている。改革推進期間の最終年度を迎え、改革をさらに進めるため、「地域スポーツ・文化芸術創造と部活動改革に関する実行会議」が組織され、2026（令和8）年度以降の地域展開の方針等が議論されている。

部活動の地域展開において、指導者確保の観点から教員の兼職兼業を活用することが提案され、「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関するフォローアップ調査結果（速報値）」では、地域スポーツクラブ活動の指導者の属性として「教員の兼職兼業」が最も多く、地域クラブの指導者等として教員が携わることへの期待は大きい。

一方、文部科学省初等中等教育企画課長名の「「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」を受けた公立学校の教師等の兼職兼業の取扱い等について」においては、教育委員会が兼職兼業の許可をする際の留意事項が示されているが、「学校における時間外在校等時間と地域団体における労働時間の通算が1箇月45時間以内になること」や、「兼職兼業許可後の当該教師の地域団体での労働時間等の確認をする」等とされ、兼職兼業の許可に際し、教育委員会や当該教師に新たな負担が生ずることになる。

自治体において部活動の地域展開を進める部署と教員のサービスを監督する部署が異なる場合には、地域クラブの指導等に従事することを希望する教員が、希望どおりに携わることができないことが懸念される。自治体が兼職兼業を運用する際の課題を指摘するとともに、地域クラブ等での指導を希望する教員が円滑に指導できるための方策について提案していきたい。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00～10:00 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:20～9:40

[学校保健体育-A-19] 滋賀県大津市における運動部活動の地域移行・地域展開に関するグランドデザイン (経,教)

政策科学的アプローチによる試論

*大西 祐司¹、黒澤 寛己¹ (1. びわこ成蹊スポーツ大学)

部活動の地域移行が告示されてから3年が経過した。2026年には、スポーツ庁からの補助金が終了する見込みであり、各自治体は地域での自走・持続可能な運営体制の構築を迫られている。これまで、モデル事業の検証や学校からの部活動の切り離しといった多様な取り組みが進められてきたが、それらは生徒・保護者、そして長年部活動を担ってきた教員の意向をどの程度反映していたのだろうか。本研究はこの問題意識に基づき、政策科学の視点から運動部活動の地域移行に関するグランドデザインを構想し、自走・持続可能な枠組みの構築を目指す。研究課題1では、運動部活動の地域移行における政策プロセスを明らかにし、その結果として描かれるべきグランドデザインのあり方を検討した。研究課題2では、指導者確保が喫緊の課題となる中、有力候補である教員の意識と、彼らが求める条件について調査を行った。研究方法はコンテキスト・マップ法を用い、以下の3点に基づいて分析を行った。①大津市教育委員会による「部活動の実態調査」の結果をもとに、運動部活動の規模を大・中・小に分類し、地図上に可視化した。②各校の施設条件をGoogleマップや学校ホームページから把握し、稼働状況と過密度を推定した。③通学手段、隣接学区の部活動状況、周辺スポーツ施設の有無、外部指導者の登用状況などを総合的に考慮した。その結果、地域や学校の実情に応じて、巡回型、拠点型、派遣型、委託型、合同型の5つのモデルを適切に割り当て、あるいは組み合わせることで、自走・持続可能な運営が可能であることが確認された。ただし、すべての運営を民間に委託するのではなく、教育委員会が主導権を握ることに多くの利点があることも明らかとなった。研究課題2では、大津市立中学校18校に勤務する教員約570名を対象にアンケートを実施し、221名(38.8%)からの回答を得た。詳細については、当日報告する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00～10:00 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1001-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑦

座長:原 祐一(岡山大学)

9:40～10:00

[学校保健体育-A-20] 部活動地域移行における指導者確保に関する研究（社,経,政）

体育系大学生を対象としたアンケートより

*藤原 悠太¹、早田 剛¹ (1. 環太平洋大学)**1. 緒言**

部活動の地域移行とは、これまで教員が担ってきた部活動の指導を地域団体や関係事業者に移し、地域活動として位置づける取り組みである。生徒の健全な育成や地域活性化につながる一方、専門的な指導者の確保が課題となっている。そこで本研究では、体育系大学生に着目し、指導者確保に関する意識を調査した。

2. 目的

体育系大学生を対象に、部活動地域移行への意見、指導を行いたい場所について調査し、持続可能な運動部活動の在り方を検討することを目的とした。

3. 方法

被験者は体育系大学生54名（男29名・女25名、平均年齢21.4歳）で、教員希望者33名、企業希望者21名であった。Googleフォームを用いてアンケートを実施した。

4. 結果

部活動の地域移行に対する意見では、賛成が81.5%、反対が18.5%であり、教員希望者と企業希望者で有意な差はみられなかった。部活動指導を希望する場所は、教員希望者のうち52%が「自分の勤務校」での指導を望み、次いで「どこでもよい」が24%であった。一方、企業希望者では「どこでもよい」が33%、「地元ならよい」・「家の近くならよい」がともに29%であった。

5. 考察

本研究における部活動地域移行に対する意見では、賛成が多く、体育系大学生は部活動を支援したいという意欲が強く見られることが示唆された。指導希望場所については、教員希望者は自身の勤務校での指導を望む傾向が強く、これは生徒への責任感や愛着が影響していると考えられる。一方、企業希望者は、勤務校という概念がないため、「どこでもよい」「地元ならよい」「家の近くならよい」という意見が多く立地条件が影響することが考えられた。

これらの結果から、部活動の地域移行を持続可能にしていくためには、大学生だけでなく、現場に行きやすい地元の卒業生が指導者になることが有効であると推察した。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-20]

保健体育授業の男女共習に対する中学生の認識（教）

男女別の分析

*三谷 林太郎¹、松田 繁樹²、山田 淳子³、出村 友寛⁴ (1. 滋賀大学大学院、2. 龍谷大学、3. 滋賀大学、4. 仁愛大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-21]

「教育の目的」に則した大学体育授業の学修成果指標の作成（心）

大規模私立大学を事例とした検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-22]

体育実技授業がもたらす大学生活への適応と学びの実感（教）

社会情動的スキルの特徴に着目して

*難波 秀行¹、上村 明²、小見山 高明¹、島本 英樹¹、七五三木 聡¹ (1. 大阪大学、2. 和洋女子大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-23]

動作合成・可視化システムを導入したダンス動作学習実験による「動きの理解」に関する検討（教）

*三輪 亜希子¹、中内 悠太²、曾我 麻佐子² (1. 尚美学園大学、2. 龍谷大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-20] 保健体育授業の男女共習に対する中学生の認識（教） 男女別の分析

*三谷 林太郎¹、松田 繁樹²、山田 淳子³、出村 友寛⁴ (1. 滋賀大学大学院、2. 龍谷大学、3. 滋賀大学、4. 仁愛大学)

中学校学習指導要領保健体育編(平成29年告示)では、「体力や技能の程度、性別や障害の有無等に関わらず、運動の楽しみ方を共有することができるように留意する」という共生の視点から、授業を「原則として男女共習で行うこととする」と示された。一方、体育の男女共習授業については、体力・能力の性差の問題や学習意欲および運動技能に及ぼす影響といった課題も指摘されている。男女共習については検討すべきことが多いと考えられるが、ほとんど検討されていない。生徒の男女共習に対する認識についても検討されるべきことのひとつと考えられるが検討されていない。加えて、生徒の男女共習に対する認識は体育や運動に対する好嫌意識や運動の得意・不得意により異なる可能性がある。そこで、本研究では中学校生徒を対象にアンケート調査を実施し、体育に対する好嫌意識、運動に対する好嫌意識、運動の得意不得意が体育の男女共習授業に対する認識に与える影響を明らかにすることを目的とした。対象者は中学1年生286名(男子141名、女子145名)、中学2年生294名(男子150名、女子144名)、中学3年生267名(男子125名、女子142名)であった。希望する授業形態については「完全共習」、「一部共習」、「別習」に分類した。分析の結果、体育の男女共習に対する認識について、男子では運動の得意不得意の違いにより有意差が認められ、運動の得意な生徒は「完全共習」を希望する生徒の割合が有意に多かった。女子では、体育が好きな生徒および運動が好きな生徒は「完全共習」を希望する者の割合が有意に多く、嫌いな生徒は「別習」を希望する者の割合が有意に多かった。また、女子において、運動が得意な生徒は「完全共習」を希望する生徒の割合が有意に多く、不得意な生徒は「別習」を希望する生徒の割合が有意に多かった。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-21] 「教育の目的」に則した大学体育授業の学修成果指標の作成(心)

大規模私立大学を事例とした検討

*西田 順一¹ (1. 近畿大学)

教養体育科目での運動・スポーツ実践より、様々な学修成果の修得の可能性が示されてきた。大半の学生にとって正課体育授業の受講は最後の機会のため、教養体育授業を一層充実・発展させる意義は極めて大きい。さて、私立大学における教育の鍵は「教育の目的」と考えられる。大学設立の目的や理念を考慮し、建学の精神に則した体育授業が行われ、それに相応しい学修成果が得られれば、体育科目の評価を高められる可能性がある。以上より、本研究では事例的に大規模私立大学における体育授業の学修成果をアセスメントする心理指標を作成し、他指標との関連を検討し特徴を解明することを目的とした。対象者はK大学の教養体育科目を履修した学生であった。調査内容は基本的属性、学修成果の自由記述、「初年次体育授業の主観的恩恵評価尺度(PBS-FYPE：西田他, 2016)」、「学校への適応感尺度(大久保, 2005)」等であった。調査は令和5年度に対面またはWebにより実施し、適切な回答が得られた1,295名および282名を解析対象とした。まず、自由記述に対してテキスト解析を行い、教育の目的に見合った体育授業での行動や思考等の概念を抽出した。続いて、抽出した概念を基として作成した学修成果に関する項目について探索的因子分析を行った。結果、「教育の目的」に則した3因子(「運動技能のアドバイスと発揮」、「ポジティブ感情の伝達とエール」、「運動の課題解決のための自己開示と傾聴」：各3項目)にて構成される「生涯スポーツLTR尺度(KU-PALTR)」が作成され、尺度の信頼性が確認された。また、運動部所属有無や実施種目の技能レベルによりKU-PALTR因子得点に差異があること、「運動スキル」、「協同プレー」との関連および「居心地の良さの感覚」、「自尊感情」への影響があること等が示唆された。本アセスメント指標の意義や今後の活用等について議論を行う。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-22] 体育実技授業がもたらす大学生活への適応と学びの実感 (教)

社会情動的スキルの特徴に着目して

*難波 秀行¹、上村 明²、小見山 高明¹、島本 英樹¹、七五三木 聡¹ (1. 大阪大学、2. 和洋女子大学)

【背景】心身の健康に関わる行動資質（非認知能力）の醸成が期待されている。体育実技授業が非認知能力に包含される社会情動的スキルや学習への適応感に与える影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】対象者は必修体育の受講生239名（女性98名、男性140名）であった。調査期間は2024年後期のPre（2～3回目）、Post（14～15回目）とし、調査は、社会情動的スキルに関する内容（誠実性、グリット、SOC）、学習に関する内容（学校適応感、体育の主観的恩恵、「授業を通じて得られたこと」の自由記述）で構成した。SPSSを用いて各調査について対応のあるt検定により前後比較を行い、クラスター分析を行い各クラスター×前後比較について二要因分散分析を行った。KHCoderを用いて形態素解析を行い同時に出現する語の組合せによる共起ネットワークを作成した。

【結果】前後比較の結果、社会情動的スキルに有意な変化は見られず、学校適応感と主観的恩恵のみ有意な変化($p<0.01$)があった。社会情動的スキルの得点によるクラスター分析から、平均的な「標準群」($n=177$)、グリットに優れた「優群」($n=25$)、大学生活に慣れて欲しい「期待群」($n=37$)の3群が抽出された。すべての群で学校適応感と主観的恩恵が有意に向上し($p<0.01$)、交互作用は確認されなかった。Pre時の学校適応感と主観的恩恵は優群、標準群、期待群の順に高く($p<0.01$)、主観的恩恵は優群が標準群および期待群よりも高かった($p<0.01$)。自由記述では、チームワーク、協力、楽しさといった語が多く抽出された。

【結論】半期の大学体育授業は社会情動的スキルに有意な変化を与えなかったが、初期の社会情動的スキル特性に関係なく、学校適応感と主観的恩恵に有意な向上があり、ポジティブな感情や対人関係を通じて肯定的な影響を与えていることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2204教室(教育研究棟 2街区 2階 2204)

[2a1004-07] 学校保健体育研究部会 【課題B】 口頭発表⑦

座長:梶田 和宏(京都先端科学大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-23] 動作合成・可視化システムを導入したダンス動作学習実験による「動きの理解」に関する検討（教）

*三輪 亜希子¹、中内 悠太²、曾我 麻佐子² (1. 尚美学園大学、2. 龍谷大学)

本研究では、舞踊の動きについて①インプロヴィゼーションと②ダンステクニックの2つの解釈を採用する。①は可動域や身体部位への探索的メソッドであり、②は各ダンススタイルに根付いた合理的メソッドである（Gretchen・Susan,2008）。そして、動作合成システムBody-part Motion Synthesis System（以下、BMSS）とは、②の特性を活かし、プロダンサーの舞踊動作をモーションデータとして利用し、分析的に解体した短い要素動作（モーションデータ）をタブレット上で合成・置換して新奇な舞踊動作を創出し、3DCGで再生するシステムである。本研究では、BMSS ver4.5.4 Vis（支持基底、重心とZMP、①の特性を活かしたモーションラインを導入した可視化版）を利用した。実験は、ダンサーのトレーニング支援を目的とし、ダンサー9名（21.6±2.98歳）による実演を交えた評価実験とした。結果、提案した可視化手法が身体の使い方の理解に繋がると示唆された（中内ほか,2025）。次に、支持基底と重心を追加した際のBase Motionのカテゴリー別に関しては、Jump、Floor、Acrobaticの3つのカテゴリーが評価された。また、自由記述回答による動きの理解に関するダンサーの評価として、＜身体部位への視点＞、＜空間と動きの関係性＞、＜重心位置＞、＜動きの感覚的理解＞、＜動きの大小＞、＜動きのダイナミックさ＞、＜動きのコーディネーション＞という言葉が顕在化した。これらは「動きの質」（ラバン,1980；ドゥブラー,1974）に関する舞踊の定石的な評価であり、動きへの変換によるアイデアの生成といったダンスの本旨を踏まえると、本実験がダンスのトレーニングとして有効であると示唆される。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1101-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:赤澤 暢彦(鹿屋体育大学)

9:20 ~ 9:40

[生涯スポーツ-A-10]

学外スポーツ活動が小学生の学内身体活動レベルに与える影響（教）
心理社会的因子との関連性に着目して

*鄭 天従¹ (1. 早稲田大学大学院スポーツ研究科)

9:40 ~ 10:00

[生涯スポーツ-A-11]

運動部活動の期待と機能が及ぼす継続への困難感（経）
中高生の抵抗条件の認識と運動者行動論からの問題提起

*常浦 光希^{1,2}、田原 陽介³ (1. くらしき作陽大学、2. 広島大学大学院、3. 青山学院大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20～10:00 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1101-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:赤澤 暢彦(鹿屋体育大学)

9:20～9:40

[生涯スポーツ-A-10] 学外スポーツ活動が小学生の学内身体活動レベルに与える影響（教）

心理社会的因子との関連性に着目して

*鄭 天從¹ (1. 早稲田大学大学院スポーツ研究科)

本研究は、中国における児童の身体活動の量および強度の不足という現状を改善するために、既存の資源と条件を活用しつつ、児童の学習に影響を与えないことを前提として、児童の身体活動への意欲と活動強度を有効的に向上させる方法を究明することを目的とする。近年、中国でスポーツ塾とスポーツイベントなど、児童向けのスポーツ産業が急速に発展している。学外スポーツ活動は有料で提供されるため、学習指導要領や学校施設の制約を受けず、より優れた指導者の支援を得ることが可能であり、児童により良いスポーツ体験を提供することができる。そこで本研究では、学外スポーツ活動の参加有無が、学内における身体活動（PA）レベル、および心理社会的因子に及ぼす影響を明らかにする。具体的には、中国の小学校5年生280名を対象に、学外スポーツ活動への参加が学内身体活動（PA）レベルおよび心理社会的要因（態度、ソーシャルサポート、自己効力感、メリットと障害）に与える影響をアンケート調査によって検討する。学外スポーツ活動への参加の有無に応じた児童の身体活動レベルの比較により、当該活動が児童の身体活動レベル向上に有効かどうかを検証する。また、心理社会的因子との関連性分析を通じて、各グループにおける児童の身体活動に影響を与える関連因子を明らかにする。本研究の成果によって、身体活動レベルと強く関連する心理社会的因子を体育教育現場で積極的に取り入れることで、児童がより主体的に身体活動に取り組むための基盤を整えられることが可能と考えられる。今後の学校体育教育において、重要な示唆を与えられられる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月28日(木) 9:20～10:00 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1101-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:赤澤 暢彦(鹿屋体育大学)

9:40～10:00

[生涯スポーツ-A-11] 運動部活動の期待と機能が及ぼす継続への困難感（経）
中高生の抵抗条件の認識と運動者行動論からの問題提起*常浦 光希^{1,2}、田原 陽介³ (1. ぐらしき作陽大学、2. 広島大学大学院、3. 青山学院大学)

中高生の運動部活動からの逃避行動は、部活動の地域展開という変革期において、その成否を左右する重要な課題である。単に活動の場を地域へ移行するだけでは、生徒のスポーツからの離脱を防げない可能性があり、活動継続を困難にする要因の理解が不可欠である。本研究は、この課題に対し生活者の主観的意味に着目した運動者行動論（常浦・高岡, 2016）の視座から、生徒が捉える抵抗条件の認識パターンを類型化し、それが逃避行動としての離脱にどう関連するかを検討する。

調査はT県の中高生運動部所属生徒を対象とした。退部予測関連の項目を用いた探索的因子分析の結果、6つの抵抗条件を抽出した。これらに基づくクラスター分析により、生徒は、低抵抗・比較的適応型と多重抵抗・葛藤型に分類された。次に、退部経験の有無との関連をロジスティック回帰分析で検討した。その結果、希望する部活動への入部の有無と部の機能不全と刺激不足を独立変数としたモデルが有意であった。希望部活動に入部した生徒は中学時代の退部経験が有意に少なく、部の機能不全と刺激不足の認識が高い生徒は退部経験がある傾向が見られた。

以上から、生徒が捉える抵抗条件にはパターンが見出され、これらのパターンを特徴づける個別の抵抗条件が過去の逃避行動と関連する可能性が示唆された。さらに、これらの抵抗条件は、生徒自身の価値観や期待と、部活動運営実態や学校・家庭環境との間の不協和が個人の主観的意味でネガティブに意味づけられた結果と考えられる。このことは、部活動の地域展開において、現状の学校部活動において、生徒の逃避行動に繋がり得る要因を理解し、それを繰り返さない新たなアプローチが求められることを示唆する。具体的には、生徒の主観的意味によって形成される複合的な抵抗条件を踏まえ、個々の生活者に寄り添うスポーツサービスの設計が継続への困難感を軽減し、肯定的な関与を促す上で重要である。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-01]

部活動に対する生徒の主体性を育む場のデザイン（経）

*行實 鉄平¹、横山 剛士² (1. 久留米大学、2. 金沢大学)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-02]

Dose-Response Relationships Between Environmental Fitness Support and Physical Activity
(発, 測)

Insights from a Large-Scale National Survey in China

*PAN XIANG^{1,2}、鈴木 宏哉²、Gao Yibo^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学 スポーツ健康科学研究科)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-03]

当事者の精神障害者サッカー競技参入および継続的な参加を促す要因の検討（ア）

*秋本 成晴¹ (1. 平成国際大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-04]

スポーツサービスにおける価値共破壊（経）

車椅子ハンドボールクラブKnockü SCを事例として

*宇野 博武^{1,2}、岡田 美優³ (1. 武庫川女子大学、2. 神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程、3. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期過程)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-01] 部活動に対する生徒の主体性を育む場のデザイン (経)

*行實 鉄平¹、横山 剛士² (1. 久留米大学、2. 金沢大学)

少子化や教員の長時間労働、地域スポーツ環境の整備といった課題を背景に、2018(平成30)年にスポーツ庁が「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を策定して以降、わが国では、部活動を学校単位から地域単位へと展開する政策が進められている。

本研究では、部活動改革(部活動の地域展開)という「多主体協働共生」(小泉,2014)が求められる取り組みの中で、大人達による環境構築ではなく、生徒達も「スポーツアクター」(山本,2024)として参画することを目指した地域(A中学校)での実践事例を踏まえて、その環境醸成に向けた現状と課題を提示することを目的とした。

具体的には、当該事例における実践「生徒との対話場(部活動ワークショップ)」の展開内容やその実践がもたらす生徒達への影響といった現状を把握するために参与観察調査およびアンケート調査を実施した。また、「学校組織開発理論」(佐古,2011)や「部活動と生徒の自主性・自律性・主体性」(下竹,2022;横山,2022;大畑ら,2020,2023)に関する先行研究に基づき、部活動ワークショップの展開内容や生徒達への影響を考察・評価することで課題の提示を試みた。

その結果、まず、部活動ワークショップは、当該地域の部活動改革検討委員会の協議を経て開発され、2024年度に3回実施されたプログラムは「教育活動の良循環サイクル(実態認識,課題生成,実践化)」(佐古・住田,2014)に基づき実施されていることが確認できた。次に、生徒達への影響は、同プログラムへの参加有無にかかわらず多くの生徒において部活動に対する自立性や主体性意識の醸成を確認することができた。一方で、当該地域の取組は、2024年度より3年間の構想で開始されたばかりであることから、その実践サイクルや生徒への影響を継続してモニタリングしていくことが望まれる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会 【課題B】 口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

13:50 ~ 14:10

**[生涯スポーツ-B-02] Dose-Response Relationships Between Environmental Fitness Support and Physical Activity (発, 測)
Insights from a Large-Scale National Survey in China**

*PAN XIANG^{1,2}、鈴木 宏哉²、Gao Yibo^{1,2}、Jiang Lupei^{1,2}、許 東海² (1. 中国国家体育総局体育科学研究所、2. 順天堂大学 スポーツ健康科学研究科)

Objective: To explore Environmental Fitness Support (EFS) associations with physical activity (PA) intensity and dose-response patterns.

Methods: Data included 58,844 adults (China National Fitness Survey 2020); PA measured by International PA Questionnaire, using regression and generalized additive models.

Results: EFS negatively associated with MVPA at low scores, positively above 35.06. Facility support ($\beta=0.15$, $p<0.01$) and aesthetics ($\beta=0.05$, $p=0.02$) positively correlated to vigorous PA; traffic hazards negatively ($\beta=-0.13$, $p<0.01$). Moderate PA positively linked to facility support ($\beta=0.42$, $p<0.01$), aesthetics ($\beta=0.63$, $p<0.01$), traffic safety ($\beta=0.24$, $p<0.01$); accessibility negatively ($\beta=-0.07$, $p=0.01$).

Conclusions: Enhancing EFS supports population PA in a variety of ways.

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-03] 当事者の精神障害者サッカー競技参入および継続的な参加を促す要因の検討（ア）

*秋本 成晴¹ (1. 平成国際大学)

東京パラリンピックや東京デフリンピックを初め、近年障害者スポーツへの注目が集まっている。障害者にとってスポーツは多様な効用をもたらすが、精神障害（e.g. 統合失調症, うつ病）のある者にとってスポーツ活動は、気分の高揚や不安の改善といった運動療法的効果が見込めるだけでなく、スポーツを通じて当事者同士の交流が促され、人間関係や体調管理、就労に関して互いに学び合うことで、日常生活全体の質の向上が見込める点でも期待が高まっている。ところが、国内での精神障害者スポーツの振興状況は、他の2障害（身体障害・知的障害）と比べて大幅に遅れているため、当事者の精神障害者スポーツ参入や、継続的な参加を阻んでいる要因について明らかにしていくことが喫緊の課題となっている。

そこで本研究では、精神障害者スポーツの中でも最も人気のあるソーシャルフットボール（以下、「SF」）に注目し、当事者の精神障害者スポーツ参入や継続的な参加を促進・阻害している要因を明らかにすることを目的とした。そこで本研究では、トップ選手とグラスルーツの両方の選手が所属するチームAの11名の選手を対象にインタビュー調査を行った。

調査の結果、SFに関わる以前に、自分以外の精神障害者との何らかの接点があった者は、SF参入における心理的障壁が下がっていることが明らかになったほか、参入後にチーム内で役割が与えられることが当事者の当該スポーツの継続を容易にしていることが示された。一方で、近年のSF競技の高度化に伴い、グラスルーツ層が試合等で活躍できる場面が減っており、結果的に継続を阻害する要因となっていることも指摘された。同様に、競技の高度化に伴い、練習の強度が上がっていることや、練習の事前準備への負担が増えており、結果的に病状の悪化並びにSF継続を困難にしているケースも示された。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3201教室(教育研究棟 3街区 2階 3201)

[2a1106-09] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表①

座長: 館 俊樹(静岡産業大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-04] スポーツサービスにおける価値共破壊（経） 車椅子ハンドボールクラブKnockü SCを事例として

*宇野 博武^{1,2}、岡田 美優³ (1. 武庫川女子大学、2. 神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程、3. 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科博士後期過程)

顧客が価値創造プロセスに大きく関与するスポーツサービスでは、不確実性への柔軟な対応が重要と指摘されてきた（宇野・山口，2025）。ところが、先行研究では、柔軟性の発揮が却ってネガティブな事業パフォーマンスをもたらす可能性が示唆されている（Arias-Aranda，2003）。本研究の目的は、サービス・マーケティング分野における価値共破壊研究を参照しながら、スポーツサービスをめぐるどのような相互作用が諸アクターのウェルビーイングの低下をもたらすのか、あるいはウェルビーイングの低下がどのように経験されるのかについて理解を深めることである。

価値共破壊（Value Co-Destruction）とは「サービスシステム間の相互作用プロセスであり、その結果、少なくとも一方のシステムのウェルビーイングが低下するもの」（Plé and Chumpitaz Cáceres，2010，p.431）と定義される。ウェルビーイングの低下は、イルビーイング（ill-being）の概念とともに、個人的または集団的に経験される物質的・身体的・心理的・社会的な害として論じられてきた（Gummerus et al.，2024）。なお、価値共破壊は、資源の意図的もしくは偶発的な誤用（misuse）によって生じるとされる。

以上を感受概念として本研究では、車椅子ハンドボールクラブKnockü SCを対象とした事例研究を行う。Knockü SCは、エリアサービス（体育館利用）において、「身体障害者用駐車場に荷物が置かれている」などの価値共破壊的なプロセスを経験してきた。方法論的には構成主義的グラウンデッド・セオリー（constructivist grounded theory）に依拠し（シャーマズ，2020）、「研究者の持ち込む観念からこぼれ落ちる、生きられた世界の場」（松嶋ほか，2015，p.47）へと接近することを試みる。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1201-02] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:林 洋輔(大阪教育大学)

9:20 ~ 9:40

[生涯スポーツ-A-12]

総合型地域スポーツクラブの世代交代の課題（社,経,政）
人材循環と理念継承の視点から

*眞鍋 隆祐¹ (1. 彰栄保育福祉専門学校)

9:40 ~ 10:00

[生涯スポーツ-A-13]

体育・スポーツ経営学に関する研究トピックの動向（経）
トピックモデル分析による学術論文（2000ー2024年）のレビュー

*柴田 紘希¹、奥田 直希²、林田 敏裕³、宇野 博武⁴ (1. 日本体育大学、2. 大阪学院大学、3. 筑波大学、4. 武庫川女子大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

📅 2025年8月28日(木) 9:20～10:00 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1201-02] 生涯スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:林 洋輔(大阪教育大学)

9:20～9:40

[生涯スポーツ-A-12] 総合型地域スポーツクラブの世代交代の課題（社,経,政）
人材循環と理念継承の視点から

*眞鍋 隆祐¹ (1. 彰栄保育福祉専門学校)

本研究は、総合型地域スポーツクラブの持続可能性に焦点を当てるものである。日本における総合型地域スポーツクラブは、多世代・多種目・多志向のスポーツ活動を支える地域の基盤として発展してきたが、創設期の中心的メンバーと、後から参加した世代との間に、理念や活動参加への温度差が生じつつある。また、持続可能なクラブ運営に向けて「100年続くクラブ像」を描くには、理念の継承や役割移行の仕組み構築が不可欠である。

本研究では、会員数500人を超える5つの総合型地域スポーツクラブを対象に、クラブ運営の中心を担うキーパーソンへの半構造化インタビューを実施し、世代交代に関する課題や成功事例を質的に分析する。分析の焦点は、①人材育成とリーダーシップの継承、②組織文化の共有、③継続的なモチベーションの醸成の3点に置かれる。特に、クラブが直面している「次世代へのバトンタッチ」に対する困難と、それを克服するための具体的な実践知に注目する。

本発表では、調査から得られたデータをもとに、今後のクラブ運営において人材の循環と理念の継承を両立させるための方策を提示し、地域スポーツの持続性に貢献する可能性について検討する。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題A】ライフステージに応じた「スポーツの価値」とは？

2025年8月28日(木) 9:20～10:00 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1201-02] 生涯スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:林 洋輔(大阪教育大学)

9:40～10:00

**[生涯スポーツ-A-13] 体育・スポーツ経営学に関する研究トピックの動向（経）
トピックモデル分析による学術論文（2000－2024年）のレビュー**

*柴田 紘希¹、奥田 直希²、林田 敏裕³、宇野 博武⁴ (1. 日本体育大学、2. 大阪学院大学、3. 筑波大学、4. 武庫川女子大学)

人々の豊かなスポーツ生活の実現を目指し、スポーツをめぐる場や機会の生産・提供・分配のあり方を考究してきた体育・スポーツ経営学研究は、学校体育組織の経営を端緒として始まり、その後、スポーツ産業に関わる実践領域の拡大とともに、対象を広げつつ研究が展開されてきた。一方で、研究対象の急速かつ無批判に拡大してきたことで、それらを整理・体系化する必要性がかねてより課題として指摘されている。また、近年では研究の国際化に伴い、国内外で蓄積されている研究成果の統合や、研究動向の差異や独自性の解明も課題となっている。しかし、体育・スポーツ経営学領域の研究においては、国内外でどのような研究トピックが蓄積されてきたのか、その全体像を把握し、そのうえで、研究動向の差異や共通点を分析することで、国内研究の位置づけや課題を明らかにする試みはこれまで十分に行われてこなかった。そこで、本研究では、2000～2024年に発表された国内外の体育・スポーツ経営学に関する研究のトピックを明らかにすることを通じ、国内研究の独自性及び今後の研究課題を考察することを目的とする。方法はトピックモデルによる推定を用いた。トピックモデルはテキストデータにおける語の出現パターンから潜在的なトピックを明らかにする分析手法である。対象となるデータは、体育・スポーツ経営学に関する国内外の総合ジャーナルに収録された学術論文（2,519編）のタイトル及びアブストラクトである。なお、分析により推定されたトピックの数や内容等については、発表時に詳述する。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-05]

女子のスポーツ参加を促進するためのアプローチ（社）

日本語版ポジティブ・ボディ・イメージ尺度（PBIAS）の作成とその信頼性・妥当性の検討

*竹澤 美郁¹、三倉 茜²、小笠原 悦子⁴、鯉川 なつえ²、桜間 裕子³、青木 瑛美³ (1. 東海大学、2. 順天堂大学、3. 順天堂大学女性スポーツ研究センター、4. 順天堂大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-06]

女子のスポーツ参加促進のためのアプローチ（社）

ボディ・イメージ課題に対処するコーチの自己効力感を高める介入研究

*三倉 茜¹、竹澤 美郁²、小笠原 悦子³、鯉川 なつえ¹、桜間 裕子⁴、青木 瑛美⁴ (1. 順天堂大学、2. 東海大学、3. 順天堂大学大学院、4. 順天堂大学女性スポーツ研究センター)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-07]

中国および日本の女性高齢者における体格、生活空間および体力・運動能力の年代差、ならびに国別比較（社,測,介）

*武 可¹、李 忠林²、山次 俊介³、山田 孝禎³、杉浦 宏季⁴ (1. 福井工業大学大学院、2. 中国井岡山大学、3. 福井大学、4. 福井工業大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-08]

「暮らしと健康とスポーツに関する調査」報告（社）

調査の概要・基礎分析の結果を中心に

*下窪 拓也¹、山本 悦史² (1. 順天堂大学、2. 新潟医療福祉大学)

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:30 ~ 13:50

[生涯スポーツ-B-05] 女子のスポーツ参加を促進するためのアプローチ (社)

日本語版ポジティブ・ボディ・イメージ尺度 (PBIAS) の作成とその信頼性・妥当性の検討

*竹澤 美郁¹、三倉 茜²、小笠原 悦子⁴、鯉川 なつえ²、桜間 裕子³、青木 瑛美³ (1. 東海大学、2. 順天堂大学、3. 順天堂大学女性スポーツ研究センター、4. 順天堂大学大学院)

【背景】笹川スポーツ財団 (2017) によれば、運動・スポーツ実施率は高校進学とともに低下し、特に女子の減少率が男子よりも著しいことが示されている。このような思春期の女の子がスポーツから離れる要因の一つとして、ボディ・イメージに関する課題が挙げられる。具体的には、「自分の身体に対する恥ずかしさや罪悪感、他者との比較による劣等感」などが、楽しさや継続意欲の低下につながるとされており (Vani et al., 2017)、思春期の身体変化も影響している (Schneider et al., 2023)。

一方、自身の身体を肯定的に認識するほど、自分の体型を正確に認識することから、ポジティブ・ボディ・イメージを育むことが強調されている (生田目ら, 2021)。ポジティブ・ボディ・イメージは、身体への愛着、尊重、受容、快適さ、身体を守る視点でメッセージを解釈する力などを含む多面的概念である (Tylka & Wood-Barcalow, 2015)。その測定には Body Appreciation Scale (BAS)、およびBAS-2が用いられてきたが、思春期特有の発達背景を反映していないことから、Positive Body Image among Adolescents Scale (PBIAS) が新たに開発された。日本では、日本語版BAS-2 (生田目ら, 2017) が作成されているが、PBIASの日本語版は作成されておらず、その信頼性や妥当性についての検討も行われていないのが現状である。

【目的】日本語版PBIASを作成し、信頼性と妥当性を検討することである。

【方法】本研究では日本語版PBIASを作成するためにバックトランスレーションを行い、女子高校生204名にアンケート調査を実施した。データは、確認的因子分析を実施し、信頼性と妥当性を検討した。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

13:50 ~ 14:10

[生涯スポーツ-B-06] 女子のスポーツ参加促進のためのアプローチ (社)

ボディ・イメージ課題に対処するコーチの自己効力感を高める介入研究

*三倉 茜¹、竹澤 美郁²、小笠原 悦子³、鯉川 なつえ¹、桜間 裕子⁴、青木 瑛美⁴ (1. 順天堂大学、2. 東海大学、3. 順天堂大学大学院、4. 順天堂大学女性スポーツ研究センター)

【背景】近年、女子の運動・スポーツ実施率が低い現状が問題視されている。女子の運動・スポーツ参加を阻む要因の1つにボディ・イメージに関する課題が挙げられる。ボディ・イメージとは、身体に対する自己の知覚や態度を含む、多次元的な構造を持つ概念であり、ポジティブなボディ・イメージを高めることでwell-beingを向上させたりすることが明らかになっている。ボディ・イメージの改善による女子のスポーツ参加において十分な研究はなされていないが、スポーツを通じて女子は多くのボディ・イメージに関するネガティブな経験をしていることが明らかになっているため、その解決のための取り組みを行う必要がある。一方で、スポーツ現場にて女子のボディ・イメージに影響を与えるコーチは、ボディ・イメージが与える影響について認識しつつも、十分に対処できるという自信がないことも明らかになっている。

【目的】女子の運動・スポーツに関わるコーチのボディ・イメージに対処する自己効力感を高めるための介入方法について、その有効性を明らかにすることである。

【方法】本研究ではコーチを対象に、以下2つの研究を実施した。

研究1：ボディ・イメージに対処する自己効力感を測定する尺度（Coach Self-Efficacy for Body Image Scale; CSEBIS）日本語版の作成

研究2：ボディ・イメージに対処する自己効力感を高める介入の効果測定

研究1については、英語版のバックトランスレーションを行い、妥当性の検討を行った。研究2については、2つの介入（オンライン学習ツール、セミナー）の効果を測定するため、ベースラインと各介入後の3時点でのCSEBISの得点を混合モデルによる分析を用いて比較した。

【結果】148名のコーチから回答を収集し、日本語版CSEBISを作成した。介入の効果を測定した結果、2つの介入後有意にCSEBISの得点は向上した。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

14:10 ~ 14:30

[生涯スポーツ-B-07] 中国および日本の女性高齢者における体格、生活空間および体力・運動能力の年代差、ならびに国別比較（社,測,介）

*武 可¹、李 忠林²、山次 俊介³、山田 孝禎³、杉浦 宏季⁴ (1. 福井工業大学大学院、2. 中国井岡山大学、3. 福井大学、4. 福井工業大学)

中国における2025年の高齢化率は14.9%（約2.1億人）であり、本格的な高齢化社会に突入した。2050年には高齢化率が約30.7%（約3.8億人）に達することが推測されており、健康の維持・増進および平均寿命の延伸は喫緊の課題とされている。一方、日本は世界第一の長寿国であり、特に健康寿命の延伸において一定の成果を上げてきた。本研究では、中国人女性高齢者の体格、生活空間（LSA）および体力・運動能力と日本人を比較すること、ならびに両国の年代差を検証することを目的とした。対象者は、65歳以上の女性高齢者684名（中国：409名；日本：275名）であった。評価変数は、身長、体重、BMI、LSA、握力、開眼片足立ち支持時間、Functional Reach、10m歩行時間、敏捷性ステップ時間、股関節移動距離とした。年代（65歳代、70歳代、および75歳以上）および国（中国および日本）を要因とした2要因とも対応のない2要因分散分析の結果、中国と日本のいずれにおいても75歳以上は65歳代および70歳代よりもLSAおよび体力・運動能力が劣る傾向にあった。また、中国は日本よりも体格は大きいものの、LSAおよび体力・運動能力は劣る傾向にあった。以上のことから、生活空間および体力・運動能力の加齢変化は中国と日本で変わらないものの、いずれの年代においても多くの変数は中国が日本よりも劣る。

テーマ別研究発表 | 生涯スポーツ研究部会：【課題B】学際的分野を有する生涯スポーツがもたらす社会貢献とは？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3205教室(教育研究棟 3街区 2階 3205)

[2a1203-06] 生涯スポーツ研究部会【課題B】口頭発表②

座長:川邊 保孝(東海大学)

14:30 ~ 14:50

[生涯スポーツ-B-08] 「暮らしと健康とスポーツに関する調査」報告（社）

調査の概要・基礎分析の結果を中心に

*下窪 拓也¹、山本 悦史² (1. 順天堂大学、2. 新潟医療福祉大学)

報告者らは、スポーツ実施の社会経済的格差に問題関心を抱き、現代社会におけるスポーツ実施と社会経済的地位（SES）の関連を把握することを目的として、2024年に「暮らしと健康とスポーツに関する調査」を実行した。本報告では、調査の概要、基礎分析の結果、およびその他の雑感について報告を行う。本調査では、関東圏内の一都六県に居住する20歳から89歳（2024年9月1日時点）の男女を母集団とした。層化二段無作為抽出法によるサンプリングを行った上で、個人の抽出には住民基本台帳を利用し、2,000名を抽出した。調査票は返信用封筒とともに郵送し、回答後に返送してもらう方法を採用した。有効回収数（率）は514名（25.7%）であった。回答者のうち、過去1年間に運動・スポーツを「1日でも実施した」と回答したのは、8割程度であった。そのうち、1週間に1日以上頻度で実施した者は、5割程度であった。もっとも多く実施された種目は散歩・ウォーキングであり、筋力トレーニングや体操がそれに続いた。運動・スポーツを実施した理由としては、「健康のため」が最も高く、その他、「運動不足を感じるから」や「体力増進・維持のため」「楽しみ・気晴らしとして」がそれに続いた。他方で、運動・スポーツを実施しなかった理由としては、「仕事や生活が忙しいから」、「面倒くさいから」、「疲れるから」などの項目があがった。本調査では、スポーツ実施の状況に加え、回答者の所得や学歴、出身家庭の社会経済的状況などといった回答者のSESについても質問を行った。スポーツ実施状況とSESに関しては明確な関連が見られなかったものの、スポーツ・運動を実施しなかった理由については、回答者の所得や出身家庭の環境との関連が確認された。当日は、基礎分析の結果に加えて、調査を通じて得られた雑感や今後の検討課題についても報告する。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1401-02] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長:岩沼 聡一朗 (帝京科学大学)

9:20 ~ 9:40

[健康福祉-B-04]

知的障害特別支援学校の生徒は水泳授業に何を期待しているか？（発,教,ア）
高等部生徒を対象とした意識調査より

*岩井 祐一¹、森山 進一郎² (1. 東京学芸大学附属特別支援学校、2. 東京学芸大学)

9:40 ~ 10:00

[健康福祉-B-05]

ICTを活用した大学生の睡眠習慣の実態調査（生）

*西村 一樹¹ (1. 広島工業大学環境学部食健康科学科)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1401-02] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長:岩沼 聡一朗 (帝京科学大学)

9:20 ~ 9:40

[健康福祉-B-04] 知的障害特別支援学校の生徒は水泳授業に何を期待しているか？
(発,教,ア)

高等部生徒を対象とした意識調査より

*岩井 祐一¹、森山 進一郎² (1. 東京学芸大学附属特別支援学校、2. 東京学芸大学)

【はじめに】障害のある生徒は、日常生活における身体活動の確保が課題とされ、屋内で実施できる水泳は有効な手段として位置づけられる。また、余暇と関連して保護者のニーズも高い。一方、学校での水泳授業は泳法習得や可泳距離の延伸を重視した内容が多いこと、障害のある生徒への指導は経験に基づいたものにとどまっていることが指摘されている。本研究では、当事者である高等部生徒の視点から水泳授業に対する意識を明らかにし、今後の授業設計に資する知見を得ることを目的とした。【方法】知的障害特別支援学校1校を対象に、高等部に在籍する生徒27名（男性14名，女性13名）に質問紙調査を実施した。質問紙は、選択式及び自由記述式で構成され、水泳授業に対する「期待」「不安」「疲労感」等の心理面や身体面及び「水泳経験」等の個人の特徴の全18項目であった。得られたデータは、選択肢ごとに集計され、自由記述はカテゴリー化された。本研究は、東京学芸大学研究倫理審査委員会の承認後、保護者及び対象生徒に同意を得て実施された。【結果・考察】選択式項目の結果では、「水泳が楽しい」と回答した生徒が約9割であった。授業に対する期待では、「楽しむ」（44.4%）、「体重を落とす」（37.0%）といった、心理面・身体面に関する回答が多く見られた。また、「余暇・生涯スポーツ」（11.1%）という回答もあった。一方、「怖かったこと」では、「溺れる」「水が怖い」等、事故や水環境に対する回答があった。以上、知的障害特別支援学校高等部生徒への水泳授業は、単なる泳法習得にとどまらず、健康的な体づくり、余暇の充実といった多様な意義を持つことが示唆された。同時に、水泳特有の不安や恐怖への配慮が授業設計において不可欠であることも明らかとなった。今後は、「楽しさ」や「安心感」を大切にしながら、卒業後の余暇にも繋がる水泳授業の在り方を研究していく必要がある。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題B】子ども・青少年の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 9:20 ~ 10:00 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1401-02] 健康福祉研究部会【課題B】口頭発表②

座長:岩沼 聡一朗 (帝京科学大学)

9:40 ~ 10:00

[健康福祉-B-05] ICTを活用した大学生の睡眠習慣の実態調査 (生)

*西村 一樹¹ (1. 広島工業大学環境学部食健康科学科)

【目的】大学生の睡眠教育に活用することを目的にICTを活用した睡眠習慣の実態を把握することを目的とした。【方法】健康・スポーツ系の教養教育科目を履修した大学生2,000名を対象とした。研究倫理審査委員会の承認を得た(生15-003)。対象者は自記式の生活習慣調査を1週間実施した。調査項目は起床、就寝、食事時刻とした。得られたデータに基づきインターネットサイトの質問紙調査(ピッツバーグ睡眠質問票、ミュンヘンクロノタイプ質問紙日本語版)に回答させた。生活習慣調査、質問紙調査で得られたデータに基づき対象者には睡眠に関する改善策を検討する課題を提出させた。【結果と考察】睡眠障害得点の四分位数は4、5、8点であった。睡眠障害得点が6点以上であった対象者は48%であった。社会的時差ボケの四分位数は0.5、1.2、1.9時間であった。社会的時差ボケを1時間以上有する対象者は60%、2時間以上が24%であった。睡眠不足度の四分位数は9、24、44分であった。睡眠不足度が60分以上の対象者は15%であり、120分以上が3%であった。これらのことから、社会的時差ボケの要因である起床、就寝時刻の不規則性の影響が睡眠障害得点を高める要因になりえるものと推測される。提出された主な改善策は「ICTを使用することで定期的に睡眠習慣を評価できる」「睡眠障害得点が思ったよりも高く、休日であっても起床や就寝時刻の差を1時間程度にする」などであった。ICTを活用した睡眠習慣の定量的把握によって、改善策の第1歩を踏み出しやすいものと期待される。今後は、ICTを活用した睡眠スクリーニングによって、真に睡眠の改善指導が必要な対象者を効率的に選定し、効果的な睡眠指導を実施する。【結論】ICTを活用した大学生の睡眠習慣の実態調査から、48%が睡眠障害を有し、60%が1時間以上の社会的時差ボケを有することが明らかになった。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

13:30 ~ 13:50

[健康福祉-A-01]

一事例研究によるSNS運動プログラムの効果の検討 (測,コ)

*兼山 真愛¹ (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科)

13:50 ~ 14:10

[健康福祉-A-02]

日中の眠気に対する等尺性ハンドグリップトレーニングの効果検証 (生)

主観および客観評価を用いたパイロットスタディ

*山形 高司¹ (1. 川崎医療福祉大学)

14:10 ~ 14:30

[健康福祉-A-03]

転倒予防アセスメント・ツール“Strömqvist Bååthe Falling Competence” (SBFC)日本語版の開発 (介)

*曾我部 晋哉¹、ソリドーワル マーヤ² (1. 甲南大学、2. 津田塾大学)

14:30 ~ 14:50

[健康福祉-A-04]

バーチャルリアリティを用いた簡便な歩行分析システムの精度検証 (測)

高齢者の歩行支援への応用を目指して

*脇 遼太郎¹、井上 純輝^{1,2}、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. ソニー株式会社技術開発研究所)

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

13:30 ~ 13:50

[健康福祉-A-01] 一事例研究によるSNS運動プログラムの効果の検討 (測,コ)

*兼山 真愛¹ (1. 中京大学大学院スポーツ科学研究科)

【背景・目的】近年、若者は「トレーニング」や「ダイエット」といったワードに敏感で、SNSを活用した運動プログラム動画を実践する人が増えている。本研究では、一事例研究法を用いて、SNSで発信されている運動プログラムの効果を検証することを目的とした。

【方法】対象者は22歳の女性1名であり、2024年6月から11月までの5か月間を研究期間とした。使用する運動プログラムは、大殿筋を鍛えるトレーニング（以下Tg、12分）と骨盤矯正のストレッチ（以下Sp、10分）であり、①入浴前Tg、②入浴後Tg、③入浴前Tg+Sp、④入浴前Tg+入浴後Spをそれぞれ21日間（インターバル〇日）実施した。大腿最大周径部（大腿上部）、膝直上大腿部（大腿下部）、下腿部の周径、皮下脂肪厚を毎日測定した。これらの値から、全面積、筋面積、脂肪面積を算出した。それぞれの測定値の変化について、共分散分析を用い、傾き・切片の差を検証した。

【結果・考察】測定部位三箇所の三つの断面積とも、トレーニングにより有意に減少し、筋量は増加すると予想した仮説とは異なっていた。多重比較の結果、脂肪面積は、②④より①③が傾きは有意に大きく、筋断面積は、大腿上部では②④より①③が、大腿下部では②③より①④が、下腿部では④より①②③がそれぞれ傾きは大きく、筋の低下傾向は部位により差が見られた。総じて、筋量、脂肪量ともにトレーニング・ストレッチとも入浴前に実施したほうが減少率が高いことが明らかとなった。

【結論】入浴前に行うトレーニングは、全体・筋・脂肪の各面積を減少させ、より高い効果が得られた。また、骨盤矯正を組み合わせた複数の運動プログラムを実施することで、脂肪減少に対する効果が高まる可能性があることが明らかとなった。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

13:50 ~ 14:10

[健康福祉-A-02] 日中の眠気に対する等尺性ハンドグリップトレーニングの効果検証 (生)

主観および客観評価を用いたパイロットスタディ

*山形 高司¹ (1. 川崎医療福祉大学)

【背景】日中の眠気は事故の発生や生産性、QOLの低下などにつながる。我々は、等尺性ハンドグリップトレーニングが健常な女子大学生の主観的な日中の眠気を改善させる可能性を示唆する知見を得た。本研究では、日中の眠気症状を呈する対象者に対し、同トレーニングが日中の眠気に及ぼす影響を主観的および客観的に検討することを目的とした。

【方法】対象は日中の眠気症状を訴える成人女性5名（42±9歳）とした。6週間、週3回の等尺性ハンドグリップトレーニング（30%MVC、2分間×4セット）を実施し、介入前後にエプワース眠気尺度（ESS）および精神ビジランスタスク（PVT）を用いてランダムな間隔でPC上に提示される信号に対する反応時間（10分間、約100回）から眠気を評価した。夜間の睡眠評価には、ピッツバーグ睡眠質問票（PSQI）とアクチグラフを用いた。介入期間前後の測定値の比較には、Wilcoxonの符号付順位和検定を用いた。

【結果および考察】ESSは中央値15（12-17）点から12（7.5-16）点へ変化（ $P=0.250$ ）、4名に改善がみられ、そのうち2名は5点以上の大幅な改善を示した。PVTの有意な変化は認められなかったが、ESSが大幅に改善した2名で反応速度の向上が確認された。PSQIは中央値9（6.5-10.0）点から9（6.0-10.0）点（ $P>0.99$ ）へ推移し、アクチグラフによる睡眠効率 $\bar{x}$ は中央値85.7（77.5-89.1）%から82.2（64.8-85.5）%へ低下傾向を示した（ $P=0.063$ ）。睡眠の変化は、実験期間（春から夏）の変化による環境温度変化の影響と考えられる。

【結論】等尺性ハンドグリップトレーニングは日中の眠気症状を主観的ならびに客観的に改善し、その効果は夜間の睡眠変化に依存しない可能性が示唆された。ノンレスポonderの特定や運動方法の更なる検討が求められる。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長: 霜島 広樹(福岡大学)

14:10 ~ 14:30

[健康福祉-A-03] 転倒予防アセスメント・ツール“Strömqvist Båathe Falling Competence” (SBFC) 日本語版の開発 (介)

*曾我部 晋哉¹、ソリドーワル マーヤ² (1. 甲南大学、2. 津田塾大学)

転倒は、死亡事故に至らなくても、重篤な頭部傷害などにつながることも多く、WHOも転倒予防対策を各国に要請している。この要請を受け、我々の柔道を利用した世界共通の転倒予防プログラム開発チームでは、2024年5月には我々を含む転倒予防に関する研究者による公式声明“Global Consensus Statement How Can Judo Contribute to Reducing the Problem of Injurious Falls in Older Adults?”を発表し研究を推進してきた。柔道を利用した転倒予防プログラムを実施することで、転倒リスクの低減につながることはこれまでも証明されている

(Jadczak AD et.al. 2023)。更には、高齢者に安全な転倒方法を身に付けさせることで、転倒に対する恐怖やリスクを低減し医療費削減にも寄与すると考えられる。現在、スウェーデンの研究者を中心に安全に転倒する能力を評価するStrömqvist Båathe Falling Competence (SBFC) テストが開発され、その有効性が示されている。SBFCテストにおける「転倒能力」とは、転倒の仕方を知的に知っていること（理論的知識）、転倒を行う自信があること（効力）、そして柔道から着想を得た転倒・安全着地戦略に従って安全に転倒を行う運動技能や筋力があること

（身体能力）の組み合わせである。既に、オーストラリア、スペインではオリジナルのSBFCテストを改良し英語版として研究を始めている。本研究では、専門家により英語を日本語に翻訳し、更に日本語を英語に翻訳することで翻訳に齟齬がないことを確認し、日本の転倒予防のアセスメントに寄与する世界共通の転倒予防アセスメント・ツール日本語版を提案したいと考えている。

テーマ別研究発表 | 健康福祉研究部会：【課題A】成熟期以降の健康福祉に対して身体活動・運動・スポーツはいかに貢献するか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 3202教室(教育研究棟 3街区 2階 3202)

[2a1407-10] 健康福祉研究部会【課題A】口頭発表①

座長:霜島 広樹(福岡大学)

14:30 ~ 14:50

[健康福祉-A-04] バーチャルリアリティを用いた簡便な歩行分析システムの精度検証（測）

高齢者の歩行支援への応用を目指して

*脇 遼太郎¹、井上 純輝^{1,2}、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学人間健康科学研究科、2. ソニー株式会社技術開発研究所)

超高齢社会において、高齢者の転倒は社会的問題となっている。高齢者の一部では、歩行中に足元を注視することが指摘されている。足元の注視は、安全な移動に必要な歩行中の進路認識を妨げ、転倒危険性を高めてしまう恐れがある。本研究室は今までバーチャルリアリティ（VR）を用いて、歩行中の進路認識を評価するVR-MTS課題を開発してきた。VR-MTS課題とは、歩行路に等間隔で配置した3色の四角形のうち、指定した1色を連続で踏み続けるMTS課題をVR上で再現した課題である。MTS課題では、頭部と両足部の位置情報を用いて課題遂行時間や頭部屈曲角度を分析し、課題中の行動特性を評価する。本研究では、VR 機器を用いて頭部と両足部をトラッキングする簡便な歩行分析システムを開発し、その測定精度を動作解析装置と比較する形で検証した。健常若齢者10名（ 25.6 ± 4.2 歳）を対象とし、VR-MTS課題を15試行実施した。課題中の課題遂行時間と頭部屈曲角度を動作解析装置と簡便な歩行分析システムで測定した。2つ測定機器での課題遂行時間と頭部屈曲角度の測定誤差を算出し、測定誤差の平均値及び95%信頼区間を算出する形で測定精度を検証した。実験の結果、課題遂行時間の絶対誤差については平均値が0.11秒、95%信頼区間が0.02～0.16秒であった。頭部屈曲角度の平均絶対誤差については平均値が 1.46° 、95%信頼区間が $0.17 \sim 2.76^\circ$ であった。課題遂行時間と頭部屈曲角度の結果は、本歩行分析システムは動作解析装置に近い測定精度をもつことを示した。これにより、高額な動作解析装置を用いなくても、本システムを用いて高精度かつ簡便に動作解析が行える可能性が示唆された。将来的に、道路横断場面など、より実践的な場面をVRで再現し、そうした場面の歩行を安全に評価することも可能である。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-07]

都市空間におけるスケートボードを「犯罪化」するポリティクスとは？（社）
スポーツ犯罪学的試論

*市井 吉興¹ (1. 立命館大学)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-08]

セメイヤ事件における対立構図の再考（哲）
身体的インテグリティ対女子競技のインテグリティ

*松宮 智生¹ (1. 東洋大学)

9:40 ~ 10:00

[スポーツ文化-B-09]

スポーツ・ハラスメント概念設定の必要性（コ）

*秋元 香穂¹、岡出 美則² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-07] 都市空間におけるスケートボードを「犯罪化」するポリティクスとは？（社）

スポーツ犯罪学的試論

*市井 吉興¹ (1. 立命館大学)

本報告の目的は、ポスト東京2020の都市におけるスケートボードを犯罪化するポリティクスの把握を試みることにある。周知のように、東京2020オリンピックとパリ2024オリンピックにおける日本のスケートボード・オリンピアン活躍は、多くの日本国民によって称賛され、公設のスケートボードパークの増設を後押ししてきた。その一方で、ストリートでのスケーターのスケートイングがメディアによって報じられ、今まで以上にスケーターが厳しく非難されることも増えてきた。さらには、スケートボードやスケーターをストリートからスケートボード専用の施設、つまり、スケートボードパークへと「囲い込む」ことを当然視する傾向も強まっている。このような現状を分析するにあたり、本報告は近年英語圏のスポーツ研究において注目されている「スポーツ犯罪学」という理論枠組みを参照する。スポーツ研究に犯罪学的な視点を導入することのアクチュアリティとは、近代スポーツと社会規範との「適切な関係」を批判的に考察することにある。まさに、スケートボードは、近代スポーツと社会規範との「適切な関係」を動揺させるものと捉えられている。それゆえに、都市空間の秩序を形成するために、スケートボードを「犯罪化」することが検討され、実施されてきた。しかし、ストリートでのスケートイングが迷惑行為と認識され、その解決がスケーターのモラルやマナーに任されているようでは、ポスト東京2020オリンピックのスケートボード文化は醸成するのであろうか。そもそも、スケートボードは「犯罪」なのであろうか。本報告では、スポーツ犯罪学という理論枠組みを参照しながら、都市空間の規制化や衛生化、近代スポーツのイデオロギーとの編み合わせに注目し、スケートボードを犯罪化するポリティクスを検討する。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-08] セメンヤ事件における対立構図の再考 (哲)

身体的インテグリティ対女子競技のインテグリティ

*松宮 智生¹ (1. 東洋大学)

2018年、国際陸上競技連盟（IAAF。現世界陸上競技連盟：WA）は、DSD（からだの性の多様な発達）を有する女性選手が女子種目に参加する条件として、経口避妊薬の服用等によって、血清中テストステロンを一定の基準以下に抑制することを求める規定、いわゆる「DSD規定」を制定した。セメンヤ事件は、南アフリカのキャスター・セメンヤがDSD規定の停止を求め、スポーツ仲裁裁判所（CAS）に仲裁を申し立てた事例である。

CASは、セメンヤを含むすべての選手が競技に参加する権利と、男子選手と比較して生物学的に不利な女子選手の権利とが相反し、両立し得ないとしたうえで、DSD規定が女子種目の公平性を守るために必要であり、手段（経口避妊薬の服用等）についても適切であるとし、セメンヤの訴えを退けた。

CASの裁定に対しては、女子競技における包摂性と公平性を中心に議論がされてきたが、経口避妊薬服用の要求については、身体の根源的権利である「身体的インテグリティ」（他者から身体への介入を受けず、あるがままの身体でいる権利、あるいは、その人にとって良好な状態でいる権利）が侵害されているにもかかわらず議論が乏しい。

そこで、本発表において、セメンヤ事件が「身体的インテグリティ」対「女子競技のインテグリティ」という対立の構図を有し、CASがスポーツにおける「女子」を狭く定義したうえで、セメンヤの身体的インテグリティが女子競技のインテグリティに収まらないがために、セメンヤを女子競技から排除したことを指摘する。

多様な性のあり方をめぐっては、スポーツのみならず、政治の舞台でも対立や分断が生じている。スポーツの世界では、性別二元制を堅持し、公平性にこだわり（あるいは、公平性を名目に）、身体的インテグリティを侵害する事態が起きている。本発表では、身体に関する権利の重要性を説き、これらの権利を守るスポーツのあり方を構想したい。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1601-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表③

座長:高尾 尚平(日本福祉大学)

9:40 ~ 10:00

[スポーツ文化-B-09] スポーツ・ハラスメント概念設定の必要性 (コ)*秋元 香穂¹、岡出 美則² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

我が国では、スポーツに関連した暴力問題を適切に表現する際には、厚生労働省の職場におけるパワー・ハラスメントやセクシュアル・ハラスメント等が引用されることが多い。そのため、スポーツに関連した多様な暴力の実態把握やその派生機序が明らかにされにくいまま今日に至っていると考えられる。しかし、スポーツの価値を高めるスポーツ関係者の取り組みの中で、日本スポーツ協会がスポーツ・ハラスメントの定義を明示するようになっている。しかし、同概念がスポーツに関わるハラスメントの実態把握にどのような効果を生み出しているのかは定かではない。そこで、本研究では、日本スポーツ協会のスポーツ・ハラスメントの概念を踏まえ、学術研究で報告されている我が国のスポーツ・ハラスメントの実態把握を試みることを目的とした。そのため本研究では、スポーツ・ハラスメントをキーワードとして設定し、J-stageとCiNiiを使用して学術誌で確認できるスポーツに関連した暴力の実態を把握することとした。その際に学術誌においてスポーツ・ハラスメントが扱われた始めた時期を把握するため、論文の出版時期を限定せずに対象文献を抽出した。分析に際しては、重複文献並びに本文がないもの、趣旨から外れるものは対象外とした。また、対象文献に記された実態の分析に際しては被害者、被害時期、加害者等の観点を設定した。その結果、調査対象数としては親が多くみられた。また被害時期については中学生が最も多く、加害者については他の部員が最も件数が多かった。またが多くを占めた。この結果から、現状では指導者以外が加害者になっているケースがみられるにもかかわらず、スポーツ・ハラスメントに関する研究は指導者（加害者）とスポーツ競技者（被害者）という枠組みで展開されていることが多いことが示唆された。このことは、スポーツ・ハラスメントの概念検討の必要性を示唆している。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈ーにいかに向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:30 ~ 13:50

[スポーツ文化-A-01]

JICA海外協力隊体育隊員の活動考察 (人)

オートエスノグラフィ研究を用いて

*馬場 徳文¹ (1. 日本体育大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-A-02]

中学校・高等学校部活動における柔道の魅力の構造化 (教)

自他共栄の精神に見られる勝ち負けを超えた柔道の魅力についての考察

*長谷川 勸¹、伊藤 優希 (1. 芝高等学校)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-A-03]

野球未開の地における競技普及 (経,人,政)

MLBインドによる競技普及活動を切り口に

*江原 昭博¹ (1. 関西学院大学教育学部)

14:30 ~ 14:50

[スポーツ文化-A-04]

なぜタイリーグへの移籍と永住を決意したのか？ (社)

日本人元プロサッカー選手を事例に

*野田頭 尚¹、上杉 杏²、青山 将己³ (1. カセサート大学、2. 吉備国際大学、3. 流通科学大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与しているのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:30 ~ 13:50

[スポーツ文化-A-01] JICA海外協力隊体育隊員の活動考察（人）
オートエスノグラフィ研究を用いて

*馬場 徳文¹ (1. 日本体育大学大学院)

近年、開発と平和のためのスポーツに関する取り組みが盛り上がりを見せている。日本の取り組みの中心となるのは、JICA海外協力隊の体育・スポーツ隊員であると考えられる。だが、体育・スポーツ隊員の考察は十分にされず、特に、当事者視点による考察が成されていない。当事者視点の考察は、オートエスノグラフィ研究に該当する。よって、隊員の活動をオートエスノグラフィ研究を用い、考察する。その結果、活動における隊員の感情から、文化的・社会的理解を深める。さらに、対象のヨルダンにあるパレスチナ難民キャンプを考察するにあたり、オートエスノグラフィ研究を用いることが、適切である。なぜなら、ヨルダン国民の9割以上がイスラームを信仰し、イスラーム法を守り、生活している。箕浦（1990）が述べるように、日本とは異なる子ども観を有している。加えて、ヨルダンは、パレスチナから難民を受け入れてきた。結果、国連パレスチナ難民救済事業機関が管轄するキャンプが存在し、小中学校もある。国連パレスチナ難民救済事業機関（2000年）によれば、学校では、国連の掲げる価値と原則を確実に準拠するように努めているとしている。そのため、人権などに価値を置く考えが入ってくる。さらに、JICA海外協力隊を中心とした日本人の価値観も流入する。つまり、難民キャンプの学校は「異種混淆」した場所である。その環境での活動は、独自の困難さが生じる。その困難さを考察するには、活動を行った隊員の当事者視点が必要であると考え、オートエスノグラフィ研究を用いる。以上を踏まえ、本発表では、ヨルダンにおけるJICA海外協力隊の活動をオートエスノグラフィ研究と関連づけ述べる。その中では、自身の実践及び経験の振り返りによる意味の捉え直しを行い、活動を行った当事者による視点を重視する。さらに、「体育」や「スポーツ」、「難民」といったものに揺さぶりをかけることを試みる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-A-02] 中学校・高等学校部活動における柔道の魅力の構造化（教）
自他共栄の精神に見られる勝ち負けを超えた柔道の魅力についての考察

*長谷川 勤¹、伊藤 優希 (1. 芝高等学校)

現在、日本の柔道競技の人口減少は顕著であり、また、中学校・高等学校においても部活動の多様性が求められ、現状の環境では部活動での柔道に魅力を感じることができない生徒が増えている。

そこで本研究では中学・高校の柔道部に所属する柔道競技者が、多様な環境の中でもより楽しく柔道を続けられることを目的とし、また、先行研究で示されている柔道の本来の魅力の抽出に留まらず、現代社会における柔道競技の持つ必要性を構造化してみたいと考えた。本研究では、柔道の「基本属性」、「社会要因」、「競技特性」、「練習メニュー」、「柔道精神」の5つの領域に焦点を当て、主に4件法を用いた質問紙調査を東京都内及び栃木県内の中学校・高等学校柔道部に所属する生徒167名に実施し、統計学的分析(相関係数・クラスター分析・重回帰分析)を行った。有意水準は5%とした。重回帰分析の結果より、社会要因と練習メニューは全ての項目に対して有意差が見られ、社会要因と練習メニューが柔道の魅力を形成するうえで大きな要素であることが示された。特に、他者との広い柔道関係の構築、乱取り練習、ウォーミングアップでの充実感が柔道の魅力に繋がっていることが示唆された。

クラスター分析の結果より、中高の柔道部活動集団は属性項目や技術から判断すると4グループに大別され、その中でも柔道実績の高い人は、柔道の動機づけとして、試合に勝つことではなく、柔道精神を体得したいと考える傾向があることが示された。ここでの柔道精神とは「精力善用」と「自他共栄」の精神を指しており、柔道競技での技術的な上達が、これを助長させると予想される。つまり柔道競技においては、勝敗よりも柔道精神を獲得する行程において、現代の競争社会や格差社会の改善に繋がる、精神の充足を得られるのではないかと考察した。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかに関与しているのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-A-03] 野球未開の地における競技普及 (経,人,政)
MLBインドによる競技普及活動を切り口に

*江原 昭博¹ (1. 関西学院大学教育学部)

他競技関係者（ファン？）から「マイナースポーツ」と揶揄（称賛？）されることの多い野球。確かに日本では絶大な人気を誇る野球(*1)だが国内競技人口は減少が止まらず、笹川スポーツ財団の調査では2016年にサッカーに抜かれて以来現在は2位(*2)の268万人になっている。少ない少ないと槍玉に挙げられる割には、100人いたら2、3人は野球をやっていることになる。

そこで今回取り上げるクリケット大国インドである。厳密な数字は難しいが一般的にクリケットの競技人口は約1億5千万人と言われる。マイナースポーツである野球ですら10万人ほどと言われている。まあまあに思えるが、それはインド国民の1万5千人に1人ということの意味している。10人に1人がやっているクリケットとは絶望的な差だ。よく言われる言語や宗教の違い以前に、数字の上でも極めて不利な環境にあるインドで、野球というマイナーな競技を普及させようとする時、どんな戦略が考えられ、どんな困難が体现されるのか。今回の報告ではMLBインドによる野球普及活動を切り口に競技未開の地における普及活動について考察を進める。

先行研究を探すものの「インド・野球」や「インド・MLB」といった基本的なタームですら芯をくったヒットはほとんどない。色々試した結果は「ワインドアップ」「マインドマップ」「ウインドサーフィン」。インドにおける野球普及に関する先行研究はほぼ皆無である。そこで今回はインドにおける野球競技の普及過程について、MLBインドの成立から発展を基軸にインドの野球競技の現状を描くことを目指す。その際、MLBの海外展開、インドにおけるMLBインドの展開、インドの野球普及と本場MLBとの関係の三点を通じて、インドの野球競技普及から競技の本場米国への国際的連関までを俯瞰する考察を進める。

*1：MUFGRC2024年

*2：笹川スポーツ財団2023年

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題A】スポーツは現在のグローバル・ 이슈にいかにか立ち向かうのか？

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 1301教室(教育研究棟 1街区 3階 1301)

[2a1607-10] スポーツ文化研究部会【課題A】口頭発表①

座長:尾川 翔大(岐阜薬科大学)

14:30 ~ 14:50

[スポーツ文化-A-04] なぜタイリーグへの移籍と永住を決意したのか？（社）
日本人元プロサッカー選手を事例に

*野田頭 尚¹、上杉 杏²、青山 将己³ (1. カセサート大学、2. 吉備国際大学、3. 流通科学大学)

グローバル化の進展に伴い、アスリートの国境を越えた移動はキャリア形成上、重要な要素となっている。特に、エリートアスリートの地理的流動性は、国際的スポーツ産業において価値ある資産と見なされ、競技キャリアの発展のみならず、異文化への適応力も求められる。異国でキャリアを構築するアスリートにとって、引退後にホスト国で新たな職業選択を行うことは重大な課題であり、制度的支援の不足や文化的障壁の存在が指摘されてきた。これまでの研究において、アスリートのキャリア発達や引退後の適応に関する知見は蓄積されているものの、ホスト国における移民アスリートのキャリア移行に関する研究は限定的である。本研究は、タイにおいてプロサッカー選手として活動し、引退後に現地で農業に従事している元アスリートを事例とし、移民アスリートにおけるキャリア移行およびその意味づけを明らかにすることを目的とする。質的ライフヒストリー研究のアプローチを採用し、ナラティブ・インタビューおよびリフレクシブ・ライフライン法を用いてデータ収集を行った。データ収集は2回の半構造化インタビューで構成され、1回目は幼少期から現在に至る人生経験、教育歴、スポーツキャリア、引退後の職業選択、文化的適応に関する自由叙述を促した。インタビュー中に語られた主要なライフイベントは研究者によって時系列で整理され、2回目のインタビューではそのライフラインを視覚資料として提示し、参加者とともに内容の検討・修正を行いながら、人生の転機に関する内省を促進した。参加者は各転機の意味づけおよび感情的影響（0～10段階）を示し、人生軌跡に対する認識を再構築した。本発表では、移民アスリートのキャリア移行およびその意味づけの分析を通じ、国際的競技経験が引退後のキャリア選択にいかなる影響を与えるのかを明らかにし、ホスト国におけるアスリートのキャリア形成に関する理解の深化を図る。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-10]

嘉納治五郎は絞技と関節技をいかに考えていたか (人)

*稲川 郁子^{1,2} (1. 日本体育大学、2. 公益財団法人全日本柔道連盟医科学委員会)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-11]

伝統芸能の身体教育における「なぞり」と「さぐり」の構造に関する研究 (社)

*迫 俊道¹ (1. 大阪商業大学)

9:40 ~ 10:00

[スポーツ文化-B-12]

蹴鞠未経験者を対象とした「蹴鞠技術習得」までのプロセスに関する研究 (人)

*阿羅 功也¹ (1. 旭川工業高等専門学校)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:00 ~ 9:20

[スポーツ文化-B-10] 嘉納治五郎は絞技と関節技をいかに考えていたか (人)

*稲川 郁子^{1,2} (1. 日本体育大学、2. 公益財団法人全日本柔道連盟医科学委員会)

柔道は、嘉納治五郎（以下「嘉納」）により、柔術から危険な要素を取り除き教育に活かせるよう再編、創出されたものである。一方で嘉納は、柔道の武術性も重視し、殺傷の技術としての柔道を放棄することはなかった。嘉納は、危険度の高い当身技については「形」にいわば封印したが、固技から絞技と関節技を排除することはしなかった。嘉納は「咽喉を絞めて一時気絶することがあるを嫌うものがあるが、活さえ入れれば、すぐ平生の通りになるもの」「関節の傷んだのは内臓に故障が出来たのと違い、療治をして少し注意さえすれば、癒るもの」と述べる。さらに嘉納は「絞業〔ママ〕の場合は実際絞っているのに合図をせぬことがあり、関節業〔ママ〕の場合にもそれ以上我慢すれば怪我をするという場合に、合図がなくも審判者の見込で勝負を決定することが出来るようにしてある」と述べ、「見込」による勝負判定を是とし修行者の安全に配慮している。また嘉納は「固勝負」について、投技と異なり「負け方の修行をことさらにする必要がない」と述べている。つまり、柔道修行者は、投技への対処として「受身」を習得するが、固技については「負け方の修行」に相当するものがないと主張する。本研究では嘉納による絞技や関節技に関する言及を手がかりとしながら、嘉納がこれらの技術に対しどのような思想を持っていたかについて考察した。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

■ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 ■ 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:20 ~ 9:40

[スポーツ文化-B-11] 伝統芸能の身体教育における「なぞり」と「さぐり」の構造に関する研究 (社)*迫 俊道¹ (1. 大阪商業大学)

「日本の芸道で習得すべきものは、もともと単元に分割できるものでもなく、明確な言葉で目標を語れるものでもなく、ただ理想事例を手本にその活動の全体を身をもってなぞるほか仕方がないもの」(尼ヶ崎『ことばと身体』勁草書房、1990年)と表されている。「なぞり」は学習者が指導者の模範例を習う際の方法として論じられてきた。

本報告者は日本の芸道の伝承者(指導者、学習者)の間で展開される相互作用に関して、伝承に付随する段階性の概念を分析してきた。指導者と学習者の相互作用の中で学習者が新たな身体所作を獲得した瞬間においては、指導者は学習者に次の新たな段階へと進む課題を提示することがわかった。この段階性の生成には、指導者、学習者で展開される「なぞり」という相互作用が影響している。

さらに本報告者は伝統芸能の「神楽」の参与観察を行い、指導・学習過程について調査研究を行ってきた。その結果、学習者が指導者の模範演技を「なぞる」だけでなく、指導者もまた学習者の動きを「なぞる」行為が確認された。また、指導者は自身の身体を用いて、学習者の技芸の正否の確認、検証を行っており、「なぞり」では説明が困難な事象が浮かび上がった。それは指導者が学習者の躰きを「探る」行為(さぐり)と推測出来た(「さぐり」とは、本報告者が「なぞり」の概念を踏まえて創り出した造語である)。

本研究では指導者と学習者による「なぞり」と「さぐり」が、伝統芸能の稽古の場面においてどのように現出しているのかを描出し、「なぞり」と「さぐり」の相互性に関して考察を行った。実際の伝承活動では指導者が学習者に身体所作を教える際、学習者が直面している課題は何か、指導者はその要因を探るために様々な試みを行っている。学習者もまた「さぐる」行為を行っているが、指導者と学習者の「さぐり」には相違がある。本研究はJSPS科研費JP19K11609の助成を受けた。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 9:00～10:00 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1701-03] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表④

座長:久保田 浩史 (東京学芸大学)

9:40～10:00

[スポーツ文化-B-12] 蹴鞠未経験者を対象とした「蹴鞠技術習得」までのプロセスに関する研究 (人)*阿羅 功也¹ (1. 旭川工業高等専門学校)

これまでの蹴鞠研究は渡辺融氏、桑山浩然氏の「蹴鞠の研究－公家鞠の成立－」によってまとめられている。そこには貴族の蹴鞠「公家鞠」が成立した背景やその技術、施設・用具といった全体像が記されている。大衆の蹴鞠「地下鞠」についても村戸弥生氏が外郎右近政光著『中撰実又記』を翻刻したことによって町人層が愛好した蹴鞠の様態も明らかとされた。貴族と大衆によってその技術構造が異なることは蹴鞠の特徴であるが、蹴鞠技術を身につけるまでの記録や研究は蓄積されていない。そこで本研究の目的は、蹴鞠未経験者が蹴鞠技術の習得するまでのプロセスを明らかにすることである。まず、紙風船のような特徴的な構造を持つ蹴鞠の持ち方について。蹴鞠の「ふくら」と呼ばれる部分を押しつぶし、蹴鞠を蹴り上げる前に鞠が変形する事象が多く現れた。蹴鞠の「とり革」と呼ばれる突起を掴む変形させない持ち方指導と鞠構造の理解は、鞠を蹴り上げる以前に必要な不可欠であった。次に、蹴鞠を持ち自ら蹴り上げる「1足目」では、鞠を手から大きく投げ上げ足を振る様子が見られた。蹴鞠は110-120gとサッカーボールと比較しても軽いため、屋外で実施される蹴鞠は風の影響も受けやすく投げ上げた鞠は揺れ動くことになる。さらに目測の難易度も上がるため1足目が右足に当たらない。鞠は胸の前で肘をやや伸ばした状態で抱え、鞠を離すのみ。落下地点に足を送り込むことで安定した1足目となった。また、サッカーのリフティングのように足の甲で鞠を捉える様子も多く見られた。表面積の大きい足の甲で鞠を捉える蹴り方では、紙風船構造の蹴鞠は凹みやすい。足のつま先、つまり点で捉えることによってこの凹み問題は解決することができた。このように蹴鞠技術習得にはまず、蹴鞠の「鞠」構造に関する知識・理解が必要不可欠であり、蹴鞠技術書に記載されている内容を元にした技術習得も有効であることが明らかとなった。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

13:50 ~ 14:10

[スポーツ文化-B-13]

学校における東京2020大会の”Post Games Legacy”の検討 (教)

大会後3年間のオリ・パラ教育継続調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-B-14]

ピエール・ド・クーベルタンによる「スポーツと平和」思想の原点 (史)

*和田 浩一¹ (1. 神戸医療未来大学)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会 【課題B】 口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

13:50 ~ 14:10

**[スポーツ文化-B-13] 学校における東京2020大会の”Post Games Legacy”の検討
(教)**

大会後3年間のオリ・パラ教育継続調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学)

東京2020大会に向けて全国各地で展開されたオリンピック・パラリンピック教育の大会後の継続状況と、活動内容、必要とされる支援等について、これまで2年にわたり本学会で報告してきた。各国で過去に行われたオリ・パラ教育について、大会後の継続や学校教育への定着に関する研究はほとんど行われていない。大会のレガシーとして何が残されたのか（Post Games Legacy）を明らかにすることには意義があり、そのためには継続的な調査が必要である。本研究では大会終了後3年間継続して実施している調査から、大会後の学校におけるオリ・パラ教育活動の実態を明らかにし、大会のレガシーを検討することを目的とした。2024年度は5つの自治体を対象としたが、昨年度から継続して対象とした4自治体のうち3つで回答校数が増加し、2つについては大幅に増加した。2024年夏にパリ大会が開催されたことから、教員や児童生徒の関心が高まったものと考えられる。昨年度までの調査から、大会の終了後、時間を追ってオリ・パラ教育の実施率は低下していたが、今年度は4割強～6割と向上した。パリ大会が開催されたことに加えて、大会後に自治体が主体となってアスリート派遣やスポーツ教室等が行われている自治体があり、それが定着していることが示された。教育活動を実施しない理由としては、これまでと同様、時間の確保が困難であること、教育課程に位置付けられていないことが多く挙げられた。具体的な展開の機会として、教科教育が6～7割と最も多く、学校行事の活用は1割前後と低かったが、福祉・人権教育などの題材としては高い割合で活用されていた。大会終了後一定の時間が経過しても、学校教育の様々な場面でオリ・パラ教育が定着していることが明らかとなった。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会：【課題B】継承されてきたスポーツ文化を問い直す

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[2a1704-05] スポーツ文化研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:榎本 雅之(滋賀大学)

14:10 ~ 14:30

[スポーツ文化-B-14] ピエール・ド・クーベルタンによる「スポーツと平和」思想の原点 (史)*和田 浩一¹ (1. 神戸医療未来大学)

「スポーツと平和」の源流は、近代オリンピックの制度を創出したピエール・ド・クーベルタン（1863-1937年）の思想にさかのぼる。本発表では、平和に関するクーベルタンの初の論考である「平和への教育」を取り上げ、彼がスポーツと教育と平和を結びつけるに至った背景とその内容とをQuanz（1994年）に学びながら明らかにする。「平和への教育」は、社会経済学会発行の『社会改革』1889年9月号で発表された小論である。1889年は6月にパリで列国議会同盟が設立されるなど、組織的な国際平和運動の起点となった年である。この小論には、列国議会同盟設立の会議で示されたという、学校の中で生じた争いを自分たち自身で解決するという仕組みの教育現場への導入が紹介されている。クーベルタンはこの平和教育の一つのモデルを、パブリック・スクールのスポーツ活動の中に見ていた。例えば、イギリスではボクシング・グローブが「平和の番人」と呼ばれ、ボクシングが子どもたちに「より長続きする確かな平和をもたらす」と述べている。イギリスの教育についてのさらなる指摘は、クーベルタンが「うってつけの審判」と形容するキャプテンの存在である。年齢や日々の行い、スポーツ競技における力と巧みさの点で仲間の長となったキャプテンは、重みのある言葉や絶対的な権威により喧嘩をしずめ、仲間を驚かせるような賢さを示すと説明されている。クーベルタンは「平和への教育」の冒頭で、戦争仲裁の枠組みを作ろうとする列国議会同盟の目標を高く評価している。少年たちの社会におけるキャプテンの役割（うってつけの審判）は、まさに争いの仲裁である。この同じ構図が、スポーツ（オリンピック）が「全世界の平和を確保する、間接的にはあるが有力な一要因となる」（1896年）という、クーベルタンによるスポーツと平和に関する思想につながっている。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-07]

大学サッカー選手におけるロングキックの飛距離と利き足、非利き足の筋力、筋量の関係（生,バ,測）

*加藤 雄一郎¹、阿部 渉² (1. 平成国際大学、2. アローレ八王子)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-08]

大学トップレベルのサッカー選手における突破のドリブル時の視線探索行動（コ）

*多賀 健¹ (1. 苫小牧工業高等専門学校)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-09]

全天球カメラ映像を活用したサッカーの個別練習の検討（コ,教）

*寺田 進志¹ (1. 大阪国際大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-07] 大学サッカー選手におけるロングキックの飛距離と利き足、非利き足の筋力、筋量の関係（生,バ,測）

*加藤 雄一郎¹、阿部 渉² (1. 平成国際大学、2. アローレ八王子)

【緒言】 青少年期のサッカー選手におけるロングキックにおいて、スイング速度、ボール飛距離ともに大腿筋量との間に正の有意な相関があったことが報告されている（谷口, 2002）。そこで本研究の目的は、サッカーのロングキックにおけるボール飛距離と、利き足（蹴り足）、非利き足（支持足）の筋力、筋量との関係を明らかにすることであった。【方法】 対象者は、サッカー部に所属する男子学生15名であった。ボール飛距離の測定は、利き足でのインステップ、インフロントキックで2回ずつ蹴ってもらい、メジャーでメートル単位で計測した。脚筋力の測定には、片足用筋力測定台（竹井機器工業, T.T.K571）を用い、脚伸展筋力（利き足、非利き足）、膝屈曲筋力（利き足、非利き足）を測定した。脚筋量の測定にはInbody 体成分分析装置（Inbody 770）を用い、両足について1/10 kg 単位で分析した。【結果】 インステップキックとインフロントキックにおけるボール飛距離と膝伸展筋力との間には、利き足で有意な相関関係は見られなかったが、非利き足で有意な相関関係が認められた。一方、両キックともボール飛距離と膝屈曲筋力、脚筋量との間には、有意な相関関係が認められなかった。【考察】 インステップキック、インフロントキックともにボール飛距離に関係したのは、支持足の膝伸展筋力であった。支持足の筋力は、蹴り足の運動エネルギーが最大になる点、すなわち支持足の真横にボールがある時、最大になることが考えられる。このことから、蹴り足よりも支持足の伸展筋力がボール飛距離に関係していなと示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-08] 大学トップレベルのサッカー選手における突破のドリブル時の視線探索行動 (コ)

*多賀 健¹ (1. 苫小牧工業高等専門学校)

＜目的＞本研究の目的は、大学トップリーグに属するサッカー部の中でドリブルスキルがハイレベルの選手と、ミドルレベルの選手を対象に、視線計測器を用い、突破のドリブル時の視線の停留時間や回数、経路、及び認知情報を比較検討することで、突破のドリブルにおける熟練者の視線探索行動を明らかにすることである。

＜方法＞実験参加者は、大学トップリーグに属するサッカー部の中で、ドリブルスキルがハイレベルの選手5名、ミドルレベルの選手10名であった。実験参加者は視線計測器（Tobii Pro Grass3）を装着し、守備者との1対1のドリブル突破を5回試みた。測定項目は、攻撃者が守備者の突破を図る2秒前から突破するまでの注視点の①停留（脳に送られる視覚情報）時間、②停留回数、③停留経路、④各試技後のインタビューによる認知情報であった。

＜結果＞成功回数は、ハイレベル群がミドルレベル群より有意に多かった。視線の停留の合計時間は、ハイレベル群は守備者の足や膝で有意に長く、ミドルレベル群は守備者の足下で有意に長かった。視線の停留回数は、ハイレベル群は守備者の足や膝で有意に多く、ミドルレベル群は守備者の足下で有意に多かった。インタビューによる認知分析では、ハイレベル群は足や膝、ミドルレベル群は足や足下を認知していた。

＜結論＞ハイレベル群は、①守備者の足を長い時間、かつ多く見ている、②守備者の足や膝の動きを認知している、③守備者の足の接地や、膝関節の屈曲による重心変動から、突破のタイミングを見計らい、成功回数を高めていると考えられる。突破のドリブルでは、熟練者は視線を守備者の足に向け、守備者の足や膝の動きを認知しながら突破のタイミングを図っていることが示唆される。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a301-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表③

座長:田中 光(流通経済大学)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-09] 全天球カメラ映像を活用したサッカーの個別練習の検討（コ、教）*寺田 進志¹ (1. 大阪国際大学)

サッカーの指導現場では練習や試合を撮影し、その映像を用いて個人やチームの技術・戦術の指導を実践することは一般である。この際、一般には市販のビデオカメラで撮影が行われる。撮影された映像を選手自身が観察する場合、その選手は外部視点から自身のプレーを観察することになる。このような観察は他者観察と呼ばれる。他者観察の場合、身体移入の問題が生じる。また、科学技術の発達が著しい昨今、VRをトレーニングに採り入れたU-17ドイツ代表がヨーロッパチャンピオンになったという事例が紹介される（Adam, 2023）。しかし、VRである以上、その映像はあくまで仮想でしかない。

筆者は選手に装着して全天球を撮影できるカメラの映像を使用する機会に恵まれ、その映像を基にサッカーの個別練習を実施した。全天球カメラから得られた映像はその時のプレーを想起させやすいと考えられ、個別練習の可能性を広げることができると考えられる。そこで本研究では、選手が試合中に装着した全天球カメラから得られた映像を活用して実践されたサッカーの個別練習について検討することを目的とする。

検討の結果、全天球カメラから得られた映像を活用した個別練習は個人の競技力向上に有効な方法となり得る可能性がある、と結論づけられる。サッカーの個別練習の際、指導者は「試合を想像して練習しよう」と選手に投げかけることがある。この際、そのプレー時の自身の立ち位置から全方向を観察することで、その場面を「ありありと」想像しながら練習することができるだろう。この映像を、このように活用することで個別練習の質を向上させられると考えられる。今後、スポーツ運動学の立場から個別練習を実施する選手や指導者を厳密に分析することで、新たな練習法や指導法の開発に繋がる可能性があると考えられる。ただし、カメラ自体の限界もあるため、同時にその改善も要することを付言する。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-13]

競技水準の異なるラグビーチームにおける試合中の運動特性の比較 (コ)

GPSデータを用いた競技力向上のための比較分析

*稲田 鎮¹、中野 貴博¹、中本 光彦¹、水野 太智¹、高橋 好波¹ (1. 中京大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-14]

セイバーメトリクス指標を用いた大学野球の勝率に影響を与える要因の検討 (コ)

*八田 歩¹、杉田 正明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学 体育学部)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-15]

世界男子ハンドボール競技のセットディフェンスにおけるスクリーンプレーに対する有効なディフェンスプレー (コ)

*宮代 花菜¹ (1. 筑波大学大学院)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-13] 競技水準の異なるラグビーチームにおける試合中の運動特性の比較 (コ)

GPSデータを用いた競技力向上のための比較分析

*稲田 鎮¹、中野 貴博¹、中本 光彦¹、水野 太智¹、高橋 好波¹ (1. 中京大学)

【目的】ラグビーにおいては、試合中の運動量が勝敗を分ける重要な要因である。しかし、むやみに運動量が多いばかりでは効率的ではないことも考えられ、適切な運動強度やポジションにおける役割分担に基づく運動特性が重要になることも考えられる。そこで本研究では、競技水準の異なるラグビーチームにおける試合中の運動特性を検討することで、今後の競技水準向上のための示唆を得ることを目的とした。【方法】2024年度の東海リーグ1部に所属するC大学、全国大会上位のD大学、トップリーグ所属のチームEの試合中の運動特性をGPS計測器により計測した（最高速度等の6項目）。C大学は、リーグ戦全7試合を対象とし、出場時間が40分以上のデータのみを有効とした。D大学、チームEに関しては、web上に公表されているデータを二次利用した。最初に、C大学と他チームの各項目の差をt検定により確認した。次に、C大学におけるポジションおよび試合展開（得点差で2分類）による各項目の違いを二元配置分散分析により検討した。【結果・考察】中速度走行距離、高速度走行距離、一分間走行距離、総走行距離はC大学がFW、BKともに概ね有意に長くなっていた。一方、最高速度はFWにおいてチームEに有意に劣り、アクセル回数はFW、BKともに他2チームに有意に劣っていた。C大学内の比較では、最高速度、中速度走行距離、高速度走行距離ではポジション間の有意な差が確認された。また、一分間走行距離、総走行距離では、点差が少ない試合でいずれもBKが有意に長くなっていた。これらのことから、瞬間的な加速局面の回数の差が競技水準に強く影響すること、競技水準が高い程ポジション間の走行距離が明確になることが明らかになり、試合中におけるメリハリや明確な役割分担が重要な要素となっていることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-14] セイバーメトリクス指標を用いた大学野球の勝率に影響を与える要因の検討 (コ)

*八田 歩¹、杉田 正明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学 体育学部)

本研究の目的は、セイバーメトリクス指標を用いて大学野球の勝率と関連する要因を明らかにし、競技力向上に資する知見を得ることである。対象は、全国26連盟中、一球速報.comのウェブ上で確認できた2024年春季および秋季リーグ戦に出場した22連盟138チーム（1622試合）とした。各リーグで勝率1位となったチームをTop群（以下、T群； $n=23$ ）、その他をNon-Top群（以下、N群； $n=115$ ）として分析を行った。使用した指標は、FIP（投手力）、OPS（打撃力）、DER（守備力）、Spd（走塁力）である。統計処理は、正規性を確認後、各指標についてT群とN群の比較、ならびに各群における勝率と各指標との相関関係を検討した。その結果、T群はN群に比べ、すべての指標で有意に優れていることが示された（ $p<0.001$ ）。勝率と各指標の関係では、N群で全ての指標が有意な相関が認められ、OPSが最も強い相関を示した

（ $\rho=0.769$, $p<0.001$ ）。一方、T群においてもOPSが最も強い相関を示した（ $\rho=0.735$, $p<0.001$ ）が、FIP（ $\rho=-0.019$, $p=0.930$ ）およびDER（ $\rho=0.397$, $p=0.061$ ）との間には有意な相関が認められなかった。以上の結果から、大学野球の勝率は、特にOPSと関連している可能性が示唆された。また、T群のような競技力の高いチームでFIPおよびDERと勝率との相関がみられなかったことは、N群に比べ、これらの指標がいずれも高水準で安定しており、チーム間での差が小さかった可能性が考えられる。したがって、大学野球においてはOPSの向上が勝率改善に向けた重要な要素であると考えられる。また、N群のような下位チームにおいては、FIPおよびDERを向上させ、失点抑制に向けた取り組みの必要性が示唆され、指導現場では競技力に応じた実践が求められる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 1201教室(教育研究棟 1街区 2階 1201)

[2a304-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:越田 専太郎(SBC東京医療大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-15] 世界男子ハンドボール競技のセットディフェンスにおけるスクリーンプレーに対する有効なディフェンスプレー (コ)*宮代 花菜¹ (1. 筑波大学大学院)

ハンドボール競技におけるスクリーンプレーは、ディフェンダーの進路を身体で遮断するピヴォットプレーヤー（スクリーナー）と、それを利用するプレーヤー（ユーザー）によって行われる代表的なグループ戦術である。このスクリーンプレーは、ディフェンスの連携を崩し、ユーザーが空間的に優位な状況を得ることや数数的有利の状況を作ること、さらにはスクリーナー自らがフリーとなり得点機会を創出することを目的としている。先行研究において、スクリーンプレーはセットアタックにおいて得点機会を創出する効果的なプレーである可能性が示唆されていることから、セットディフェンスにおいて失点を防ぐためには、スクリーンプレーに対する効果的なディフェンスプレーを行うことが重要である。

本研究の目的は、世界トップレベルの男子ハンドボール競技を対象に、セットディフェンスにおけるスクリーンプレーに対する有効なディフェンスプレーの特徴を明らかにし、そこで得られたスクリーンプレーに対する個人およびグループ戦術力向上のための有効な知見を、コーチングの実践現場に提供することである。

方法は、記述的ゲームパフォーマンス分析を用いる。分析対象シーンは、セットアタックにおいてスクリーナーがディフェンダーの進路を遮断し、ユーザーがそのスクリーンを利用して均衡を打破しようとする試みに対し、ディフェンダーが阻止を試みたプレーである。そのプレーのプロセスを、ユーザーのプレー局面とスクリーナーのプレー局面にモデル化した。それぞれの局面におけるユーザーディフェンダーとスクリーンディフェンダー2名のディフェンスプレーを詳細に分析するための項目を設定した。

現在、データ収集中であり、発表時には最新の結果とそれに基づいた考察を報告する予定である。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-10]

女子100mハードルレース分析 (測)

12秒台から18秒台を対象にして

*木村 加乃¹、後藤 悠太²、欠畑 岳³、磯 繁雄³ (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 名城大学法学部、3. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-11]

全国高校総体陸上競技800mにおける通過順位および位置取りと最終順位の関係 (コ)

*佐藤 公一郎¹、丹治 史弥²、杉田 正明³ (1. 東海大学体育学研究科、2. 東海大学体育学部、3. 日本体育大学体育学部)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-12]

空手組手競技大学生競技者を対象にした作戦意識とパフォーマンスの関係 (測,コ)

*大徳 紘也¹、西山 哲成¹、大石 健二¹ (1. 日本体育大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-A-10] 女子100mハードルレース分析 (測)

12秒台から18秒台を対象にして

*木村 加乃¹、後藤 悠太²、欠畑 岳³、磯 繁雄³ (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 名城大学法学部、3. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

I 緒言 女子100mハードルは、100mを速く走るスプリント能力やハードルを越えるためのハードリング技術が求められる競技であり、レース中の速度変化や歩数などが競技成績に影響をおよぼす。関連研究は多数存在するが、競技レベルごとの比較やレースパターンに着目した定量的分析は、今後さらに蓄積が求められる。本研究では、様々な競技レベル（12~18秒台）における女子100mハードル選手のレースパターンを分析・比較し、競技レベルの差を生む要因を明らかにする。II 方法 2000年~2024年までに開催された陸上競技大会での女子100mハードルのレースを対象に公的利用可能なインターネットブロードキャストから取得したレース動画を使用した。対象レースは計137レースとし、12秒台17名、13~18秒台20名であった。ハードルクリアランス後の接地から、次ハードルクリアランス後の接地までをワンサイクルと定義し、ワンサイクルにおけるランニングのみの区間とハードリングのみ区間の二区間を抽出した。取得したレース動画を基に歩数・所要時間のみを抽出した。1秒ごとに区切り（計7グループ）各ハードル区間ごとの所要時間の差を検証するために、一元配置分散分析により検証した。多重比較にはBonferroni法を用いた。III 結果と考察 12~18秒台の対象者におけるレースの経時的変化は、12・13秒台でH4-5、14秒台ではH2-3、15~18秒台ではH1-2の区間において最短タイムが出現した。最短タイム出現区間におけるランニングとハードリングの所要時間の相対割合は6:4であり、7つのグループ間でこの割合に有意な差は認められなかった。各サイクルでのランニングでの所要時間と歩数の一貫性が、競技レベルに与える影響が大きいことが示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-A-11] 全国高校総体陸上競技800mにおける通過順位および位置取りと最終順位の関係 (コ)

*佐藤 公一郎¹、丹治 史弥²、杉田 正明³ (1. 東海大学体育学研究科、2. 東海大学体育学部、3. 日本体育大学体育学部)

【背景】陸上競技800m種目のある地点における通過順位と最終順位には正の相関関係があり、集団の前方で走行することの優位性が示されている。一方で、後方での走行は空気抵抗が減少し、疲労を抑えられる利点もある。レース中に内側か外側のレーンを走行することも、総走行距離や走者のペース調整の自由度に影響する。したがって、通過地点における単なる通過順位よりも集団における位置取りが最終順位に影響を及ぼすと推定される。【目的】陸上競技800mレース中の通過順位および位置取りと最終順位の間関係を明らかにすることを目的とする。【方法】2024年全国高校総体男子800mにおける予選、準決勝および決勝レースを撮影し、全てのレースを分析した。200m、400m および 600m 地点において、競技者の通過順位を読み取った。また、先頭走者からの距離と走行レーンから位置取りを算出した。【結果・考察】予選の通過順位および位置取りは200m($r=0.54$ および 0.47)、400m($r=0.48$ および 0.56)、600m($r=0.59$ および 0.48)の各地点において、いずれも最終順位と有意な正の相関関係($p<0.05$)が示された。これらの結果より、レース序盤から集団の前方に位置することが、最終順位を上位させる可能性が示唆された。先頭走者からの距離が短い走者ほど最終順位が上位になる傾向があり、600m 地点において先頭走者から6.2m以内に位置している場合、準決勝へ進出する可能性が高いことも示された。一方、準決勝および決勝は通過順位および位置取りのいずれも、600m地点のみ有意な正の相関関係が示された($r=0.58$ および 0.52 ; $p<0.05$)。以上より、準決勝および決勝は予選と比べて走者の実力が拮抗しており、上位の最終順位を確実に獲得するため、600m地点までに前方および内側へ位置する傾向があると考えられる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a401-03] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表④

座長:藤林 献明(中京大学)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-A-12] 空手組手競技大学生競技者を対象にした作戦意識とパフォーマンスの関係（測,コ）*大徳 紘也¹、西山 哲成¹、大石 健二¹ (1. 日本体育大学)

スポーツのコーチング実践において、戦略・作戦・戦術という言葉が広く使用されている。スポーツにおける戦術や作戦の意味について、「1チームが各試合において勝利の達成を志向し、攻撃、防御の戦術行動を、意図的、計画的に展開させる仕方、進め方」と示されている（稲垣ら、1985）。勝利を獲得するためには攻撃、防御技術の精度を高めるだけではなく、技術の組み合わせを考えた事前の作戦計画が重要と考えられる。本研究では空手組手競技における事前の作戦意識と試合で実行されたパフォーマンス内容の一致と不一致の様態を調査し、作戦立案に関するコーチング実践に有効な知見獲得を目的とした。分析対象は大学空手道部に所属する組手競技者15名とした。公式大会前日に組手競技の作戦に関する意識調査をオンラインアンケートにより実施した。質問内容は試合局面別に意識する戦術項目とし、試合序盤、中盤、終盤の3局面について47項目を設定した。回答は5件法を用いて行い、意識の度合いについて回答を求めた。試合内容の分析は大会公式ライブ配信映像を用いて行い、作戦意識の調査において意識度の高い項目であった得失点数、先取点獲得数、仕掛技数、試合残り時間帯に関連する7項目を分析した。本研究結果、試合序盤の先取点獲得について、意識度5の回答が60.0%以上意識される結果であったが、勝敗に関係なく先取点獲得は11.0%未満と低い結果であった。試合中盤並びに終盤の失点防止について、意識度5の回答がそれぞれ66.7%以上意識する結果が確認され、勝利時における失点が敗戦時よりも25.5~29.8%低い結果であった。作戦意識とパフォーマンス分析の結果を相互確認することにより、作戦に対するパフォーマンススキルの達成度を客観的に評価できることが考えられ、選手の特性に合わせた作戦又はパフォーマンスへのコーチング実践のための情報となることが考えられた。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 🏢 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a404-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-16]

レクリエーションレベルのゴルファーのスコア向上に必要な打球およびスイング特性（バ）

*山下 佳倫¹、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-17]

栗山英樹監督のコーチングにみるアスリートセンタードと4つのコーチングアプローチの統合的活用（哲,コ）

*佐藤 直央¹、佐良土 茂樹² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-A-18]

女性競技者とコーチの関係性に関する実態調査（社,心,コ）

部活動現場における課題を中心に

*天羽 礼¹ (1. 筑波大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a404-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

13:30 ~ 13:50

[競技スポーツ-A-16] レクリエーションレベルのゴルファーのスコア向上に必要な打球およびスイング特性 (バ)*山下 佳倫¹、矢内 利政² (1. 早稲田大学スポーツ科学研究科、2. 早稲田大学スポーツ科学学術院)

ゴルフでは、少ない打撃でカップに近づけるための長い飛距離と飛翔方向への高い正確性およびそれらの再現性が必要とされる。そこで本研究は、打球の飛距離と飛翔方向への正確性およびそれらの再現性とスコアとの関係を明らかにした。18~69歳の男性73名と女性27名を対象とし、ドライバーと7番アイアンでのショットを10試技ずつ行わせた。レーダー式打球計測器(Trackman4, Trackman社製)で、打球とインパクト直前のヘッドの運動学的変数を測定し、各対象者の平均値と標準偏差を算出した。各変数の平均値について、線形性の関係が想定されるものの中で性別を考慮する必要のないものは相関分析、考慮する必要があるものは性別をダミー変数とした線形の回帰分析、最適値があると考えられるものは二次関数モデルの重回帰分析を行った。各変数の標準偏差は再現性を示す変数として、シーズン平均スコアとの相関分析を行った。分析の結果、スコアの良い対象者ほど両クラブの飛距離、ボール初速、ヘッド速度が大きく、アイアンのスピン量が多いことが示された ($p < .005$)。再現性では、スコアの良い対象者ほど両クラブの打出角、スピン量、ダイナミックロフト、フェースアングル、ドライバーの目標線からの左右のずれ、アイアンのアタックアングルの標準偏差が小さいことが示された ($p < .005$)。力学的因果関係に基づいて考察すると、スコアの良い対象者ほどヘッド速度の高いスイングによりボール初速ならびにスピン量が大きく、飛距離の長い打球を放つことができたと推察できる。また、インパクト時のフェース面の上下左右方向への傾きが試技間で安定しており、打球が到達目標から大幅に変動しない対象者ほどスコアが良かったと考えられる。以上からレクリエーションレベルでは、インパクト時のヘッド速度を高め、フェース面が安定するスイングを身につけることが重要と考えられる。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 🏢 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a404-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-A-17] 栗山英樹監督のコーチングにみるアスリートセンタードと4つのコーチングアプローチの統合的活用 (哲,コ)*佐藤 直央¹、佐良土 茂樹² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

選手の自律性・人間的成長を促すアスリートセンタードコーチング (ACC) は、現代コーチング学で重視される (Kidman, L. 2005)。ACCは選手の主体性を尊重し、「指示・提案・質問・委譲」の4つのアプローチが有効とされる (Kim et al., 2021; Mesquita & Rosado, 2023)。特に「質問・委譲」は内発的動機付けとパフォーマンス向上に寄与する (Mageau & Vallerand, 2003)。本研究は、日本プロ野球で顕著な実績を持つ栗山英樹監督のコーチングを、ACC理念と4つのアプローチから分析することを目的に進めた。栗山氏は、日本ハムでリーグ優勝・日本一、侍ジャパンでWBC世界一を達成した。彼のコーチング哲学は、コーチング理論と実践の橋渡しとなる貴重な事例であり、Côté & Gilbert (2009) のコーチングの有効性にも資する。本研究は、成功事例を理論的枠組みで解明し、普遍的・実践的知見獲得を目指す。本研究は文献研究法を採用する。主要分析対象は、栗山氏の『監督の財産』（栗山, 2024）と『栗山ノート』（栗山, 2019）である。これらの著作に対し質的記述分析を適用し、栗山氏の言動・思考プロセスから、4つのコーチングアプローチ活用事例、ACC理念に合致するコーチング哲学を抽出する。特に、選手の内発的動機付けや主体性を引き出す「質問」や「委譲」アプローチに焦点を当て、その実践的意義を深く掘り下げる。本研究で得られる知見は、栗山氏の成功が現代コーチング学の理論的枠組みと深く関連することを実証し、理論と実践の乖離を埋める一助となる。彼のコーチングが選手の主体性を育み、チームパフォーマンスを最大化した過程を示すことで、スポーツ指導者に対し、多様なコーチングアプローチとコーチング哲学の重要性に関する具体的な示唆を提供する。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題A】競技スポーツをどのように豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 🏠 1202教室(教育研究棟 1街区 2階 1202)

[2a404-06] 競技スポーツ研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:筒井 香(株式会社BorderLeSS)

14:10 ~ 14:30

**[競技スポーツ-A-18] 女性競技者とコーチの関係性に関する実態調査（社,心,コ）
部活動現場における課題を中心に***天羽 礼¹ (1. 筑波大学)

女性競技者には、男性競技者とは異なる身体的・心理的・社会的な問題がある。日本のスポーツ界における指導者の男女比は、競技によって異なるものの、全体として男性が多数を占めていることから、女性が競技を行う上での女性特有の問題を十分意識せずに指導が行われており、女性競技者が相談しづらい環境であると言える。第3期スポーツ基本計画では、「女性の視点を踏まえた政策の推進」や「女性の視点を持つコーチの養成」などについて言及されている。しかし、施策目標や具体的施策において、コーチにどのような資質能力を養成すべきであるのかについては十分に検討されているわけではない。

そこで本研究では、運動部活動に所属する女性競技者を対象に、女性競技者が抱えるコーチ問題（女性競技者とコーチ間における問題（悩み））の実態と女性競技者がコーチに求める資質能力を明らかにすることを目的とする。

調査の結果、コーチの性別間による比較では、女性競技者のコーチに対する信頼度は、女性コーチよりも男性コーチのほうが低いことが確認され、女性競技者が抱く男性コーチと女性コーチに対する信頼度には有意な差が確認された。また、女性競技者は、コーチに対して身体的ケアや心理的ケアに関するサポートを必要としていることが明らかになった。これらの実態を踏まえた上で、今後の指導者養成の実践的な示唆とする。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a501-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-B-07]

福岡県タレント発掘事業からトップアスリートに至った選手におけるアスリート選抜時の要件と過去の競技経験の特徴 (コ)

*山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-B-08]

中央競技団体におけるアスリート育成パスウェイモデルの活用実態に関する研究 (経,コ)

*山下 修平^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、山口 真未^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-B-09]

スポーツタレント発掘育成事業からトップアスリートに到達した者の特徴 (アスリート育成パスウェイ)

体格・体力面に着目して

*萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a501-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[競技スポーツ-B-07] 福岡県タレント発掘事業からトップアスリートに至った選手におけるアスリート選抜時の要件と過去の競技経験の特徴 (コ)

*山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

【背景】福岡県タレント発掘事業は、国内最高峰の国民スポーツ大会への都道府県代表選手（国スポアスリート）や日本代表選手（エリートアスリート）を輩出しているものの、このようなトップアスリートがタレント発掘事業時にどのような要件で選抜されたのか、またどのような競技を経験してきたのか、検討された研究はない。そこで、アスリート選抜時の選考要件と過去の競技経験が、トップアスリートに至った競技やその到達レベル（国スポアスリート vs エリートアスリート）にどのような影響を及ぼしていたか明らかにすることを目的とした。【方法】事業参加者382名（男子182名、女子200名）の内、2024年度時点でエリートアスリートに到達した30名（男子6名、女子24名）を対象に、①発掘時の選考要件と最終的に専門化した競技種目との関連性、②小中学生期の競技経験種目と最終的に専門化した競技種目までの競技転向の傾向を検討した。【結果】国スポアスリートとエリートアスリートの選考要件は、「捕捉」（しっぽ取りゲームのテスター評価）が最多であった。一方で事業参加者全体では、「精査」（選考委員内での議論を踏まえた選抜方法）で選抜された選手が最多であった。エリートアスリートの多くは2種目以上の他競技経験を有し、男子は小中期、女子は中后期に専門化後の競技を開始する傾向であった。【考察】「捕捉」は、複数の運動能力が反映された「身体の動き」を競技関係者や指導者が総合的に評価した指標であり、選抜時の有効な指標の1つになる可能性が示唆された。「精査」は、単純に定量化される運動能力だけでは選抜されない受験者を取りこぼさない戦略であるものの、トップアスリートに至った事例は少なかった。多様な運動経験の重要性や性別による競技開始時期の違いも確認されたが、詳細については更なる研究が必要である。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a501-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:20 ~ 9:40

[競技スポーツ-B-08] 中央競技団体におけるアスリート育成パスウェイモデルの活用実態に関する研究（経,コ）

*山下 修平^{1,2}、萩原 正大^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、山口 真未^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター)

国際競技力向上に関する施策において、中央競技団体（以下、NF）は、アスリート育成パスウェイの構築が求められている。競技ごとのアスリート育成パスウェイ（競技別パスウェイモデル）の整備は、NFにおける競技の普及とアスリートの発掘・育成・強化の取組を大局的に捉え、アスリート育成パスウェイに関わる関係者の経験・情報を体系的に可視化・言語化する上で有効であることが明らかとなっている。また、競技別パスウェイモデルの構築とその構築過程は、アスリート育成パスウェイの全体指針が可視化されアスリートとその関係者に共有できることが示唆されている。ハイパフォーマンススポーツセンター（以下、HPSC）では、競技別パスウェイモデルの構築を支援するためのワークショップ（以下、ワークショップ）が開催され、これまでに47団体の競技別パスウェイモデルが構築されている。競技別パスウェイモデルの構築が多くのNFで進む中、NFには、その共有と活用の在り方が問われる。過去には、スポーツ振興基本計画に基づき、NFが策定した競技者育成プログラムを全国各地へ展開しようとした事例において、その共有と活用が困難であったことが指摘されている。したがって、競技別パスウェイモデルを競技関係者間で共有し、活用する際にも、同様の課題が存在する可能性があり、その対応策を検討しておく必要があると考えられる。そこで本研究では、NFが策定した競技別パスウェイモデルをどのように競技関係者間で共有及び活用されるか、その計画と実態を明らかにすることで、より効果的・効率的な共有及び活用の支援策を検討する。本発表では、令和6年度にHPSCによるワークショップで策定された競技別パスウェイモデルの共有及び活用に関する調査結果を報告する。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a501-03] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表③

座長:広瀬 統一(早稲田大学)

9:40 ~ 10:00

[競技スポーツ-B-09] スポーツタレント発掘育成事業からトップアスリートに到達した者の特徴（アスリート育成パスウェイ）

体格・体力面に着目して

*萩原 正大^{1,2}、山口 真未^{1,2}、小野寺 峻一^{1,2}、原村 未来³、山下 修平^{1,2}、友利 杏奈^{1,2}、白井 克佳^{1,2} (1. 日本スポーツ振興センターハイパフォーマンススポーツセンター、2. 国立スポーツ科学センター、3. 明治学院大学)

【背景】我が国の地方公共団体や中央競技団体等によるタレント発掘・育成（talent identification and development: TID）は、アスリート育成パスウェイ（スポーツを始めてトップアスリートに至るまでの道のり）構築の一部を担っており、国際競技力向上における中長期的な戦略の一つとして位置づけられている。特に地方公共団体が主催するTID事業（地域TID）は、身体能力の選考を経て、優れた体力を有する小・中学生を対象としている。しかし、地域TIDから最終的に国際大会に日本代表として派遣された事業修了生（トップアスリート）の体格及び体力に関する知見は限られている。【目的】本研究では、地域TIDが有する体力測定データを用いて、スポーツタレント及びそこからトップアスリートに至った者とそうでない者の小中学生期における体格及び体力の特性について検討した。【方法】本研究の趣旨に賛同する地域TIDを対象に、スポーツタレントの体格と体力に関するデータを収集した。スポーツタレントの競技成績から、トップアスリートに至った者を特定し、男女別及び学年別に各種データを比較することで、スポーツタレントの体格及び体力特性について検討した。【結果と考察】スポーツタレントの体力は、同年代の一般学生よりも優れる傾向が見られたものの、トップアスリートに至った者とそうでない者との間では、その差の程度は小さい傾向にあった。つまり、本研究で対象とした地域TID（優れた体力を有する集団）においては、スポーツタレントからトップアスリートに至るための要因として、小・中学生期における体格及び体力以外の要因が関連している可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

⌚ 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 🏠 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a504-05] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表④

座長:田井 健太郎(群馬大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-B-10]

世界トップレベルの兄弟姉妹アスリートの競技生活における相互関係のあり様 (コ)

*高木 菜那¹、清野 隼²、尾縣 貢³ (1. Nanavy株式会社、2. 筑波大学体育系、3. 福井工業大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-B-11]

女性アスリートの育成段階によるコンディショニング行動の分析 (生)

女性アスリート育成パスウェイ構築のために

*中村 有紀¹、中村 真理子¹、門馬 怜子¹、松田 知華²、相澤 勝治³、鈴木 なつ未⁴ (1. 日本スポーツ振興センター／ハイパフォーマンススポーツセンター／国立スポーツ科学センター、2. 名古屋大学、3. 専修大学、4. 拓殖大学)

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a504-05] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表④

座長:田井 健太郎(群馬大学)

13:50 ~ 14:10

[競技スポーツ-B-10] 世界トップレベルの兄弟姉妹アスリートの競技生活における相互関係のあり様 (コ)*高木 菜那¹、清野 隼²、尾縣 貢³ (1. Nanavy株式会社、2. 筑波大学体育系、3. 福井工業大学)

年齢が近い同性の兄弟姉妹は、特にライバル関係が強いことが先行研究で明らかにされている。一方で、世界で活躍している兄弟姉妹アスリートや、オリンピックに双方が出場、またはメダルを獲得している兄弟姉妹アスリートは多数いるものの、その相互関係のあり様についてわが国で言及されている研究はない。そこで本研究は、世界トップクラスの兄弟姉妹アスリートの競技キャリアにおける関係性と相互作用を明らかにすることを目的とした。研究対象者は、性別が同じである兄弟姉妹のアスリート4組から選ばれた8名であり、少なくとも1人または両者が同じ競技でオリンピックメダルを獲得していることを条件として、機縁法にて選定した。選定された兄弟姉妹アスリートは、2歳差の兄弟姉妹2組と3歳差の兄弟姉妹2組で校構成された。また、兄弟姉妹同士の関係性がより密になることが想定される個人スポーツに焦点を当てて実施した。調査方法は、事前に設計されたインタビューガイドに基づいて半構造化インタビューを採用した。得られた質的データは、KJ法を用いて分析した。分析結果から、年齢差、スポーツ固有のルール、同じ競技で競うことによるパフォーマンスの差、家族関係などが、兄弟姉妹アスリートの相互作用に影響を与えあっていることが明らかになった。結論として、本研究は世界トップクラスの兄弟姉妹アスリート間の複雑な相互関係の存在を明らかにした。これらの複雑さにもかかわらず、兄弟姉妹はこれらの課題に共に立ち向かい、心理的な成長を遂げ、関係性における心理的安全性を育んだことが明らかになった。また、世界トップレベルのアスリートの兄弟は、弟妹を兄弟姉妹ではなく、一人のアスリートと認識することによってこの心理的安全性も保たれることが示唆された。本研究によって、世界レベルで共に競技を行う兄弟姉妹アスリートの成功に寄与する重要な概念を得ることができた。

テーマ別研究発表 | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツによってどのように社会を豊かにするか

📅 2025年8月28日(木) 13:50 ~ 14:30 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[2a504-05] 競技スポーツ研究部会【課題B】口頭発表④

座長:田井 健太郎(群馬大学)

14:10 ~ 14:30

[競技スポーツ-B-11] 女性アスリートの育成段階によるコンディショニング行動の分析 (生)

女性アスリート育成パスウェイ構築のために

*中村 有紀¹、中村 真理子¹、門馬 怜子¹、松田 知華²、相澤 勝治³、鈴木 なつ未⁴ (1. 日本スポーツ振興センター／ハイパフォーマンススポーツセンター／国立スポーツ科学センター、2. 名古屋大学、3. 専修大学、4. 拓殖大学)

持続可能な国際競技力の向上にはアスリート育成パスウェイの構築が重要であることが示されている。女性アスリートのコンディショニングにおいても、育成過程から引退までのライフステージによる女性特有の多様な課題を考慮し、長期的な視点に基づいて計画、実施する必要がある。我々はこれまで、女性アスリート育成パスウェイにおける最適なコンディショニングを可視化・共有化するための取り組みの一つとして、インタビュー調査を実施し、女性アスリートが考慮すべきコンディショニングの課題について検討を行ってきた。その結果として「女性アスリートの健康課題は一樣ではなく、個人の身体的要因とアスリートの育成段階、環境要因等が複雑に関係している」こと、「Talent期の指導者の影響力は大きく、コンディショニングのベースを形成する」ことなどを報告した。これを踏まえ、今回はさらに女性アスリートのコンディショニングに関する基本的な習慣や行動の形成について育成段階や環境要因を考慮した詳細な分析を行った。

対象は、日本版FTEM【F (Foundation)、T (Talent)、E (Elite)、M (Mastery)】におけるEliteレベル（シニア代表選出）以上を経験した元女性アスリート23名とし、対面またはオンラインで1対1の半構造化インタビューを行った。逐語録を元にコードを抽出して分析を行った結果、Talent期の指導者がアスリートに対して指導したコンディショニングに関する行動や、Talent期に習慣づけられた態度や手法は育成段階が進んでもセルフコンディショニングとして引き継がれていくケースが多く認められた。しかしながら、Talent期のアスリート自身がコンディショニングの根拠として理解していた情報は限定的であり、適切な情報を得るタイミングが遅いとその後行動変容しにくい可能性が示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a601-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表③

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-07]

演題取り下げ

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-08]

中学校保健体育科教師Aの不安から自信への軌跡（教）

第62回全国学校体育研究大会を舞台とした約1年半のアクションリサーチ

*木原 慎介¹、佐藤 若²、佐藤 裕行³ (1. 東京国際大学、2. 山形県立南陽高等学校、3. 山形県教育局)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-09]

大阪府における体力水準の高いA市教育委員会の取り組み（教）

子どもの体力向上に向けた施策の実態

*山本 聖也¹、藤浪 大輔²、小林 博隆¹ (1. 大阪体育大学、2. 大阪体育大学大学院)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a601-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表③

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-08] 中学校保健体育科教師Aの不安から自信への軌跡 (教)

第62回全国学校体育研究大会を舞台とした約1年半のアクションリサーチ

*木原 慎介¹、佐藤 若²、佐藤 裕行³ (1. 東京国際大学、2. 山形県立南陽高等学校、3. 山形県教育局)

学校教育をめぐる多様な社会課題の中で、教師の力量形成は継続的に求められている。そして体育教師を対象とした先行研究も限定的ではあるが存在している。本報告では、教職歴7年の中学校保健体育科教師A（以下、A）が全国学校体育研究大会（スポーツ庁及び公益財団法人日本学校体育研究連合会の主催事業）を契機として、保健授業の公開に向け葛藤しつつ不安を克服していく一連の過程をアクションリサーチによって描き出す。当初、Aにとっての大きな問題は保健授業に自信がないことだった。この問題の重要性を当該の指導助言者である筆者（大学研究者）、県教育委員会指導主事B、同大会研究部長Cからも共有し、授業の計画から日々の実践に至るまで当事者意識を持ちながら協働的に対話・観察・省察を重ねた。その過程でAは徐々に授業観を広げていった。特に転機となったのは、単元中盤での大きな失敗経験が彼の教材観に変容を促したことだった。メンバー間で話し合いを繰り返す中で、地域教材や生徒の主観的意見を活かした授業展開など新たなアイデアが生まれ、Aの授業は生徒との相互的なやり取りを重視するという従来とは異なる形へと変化した。また、授業中に「自分が見えている」という感覚や、生徒の「知識がつながる授業の楽しさ」も初めて味わった。結果としてAは保健授業への確かな自信を得るに至った。同時に、この成果を体育授業や他の保健体育科教師にも広げていくという新たな課題を見出した。一方、他のメンバーもそれぞれに新たな学びや課題を得た。例えば、現場との関わり方や広げ方、このプロセス自体が大会の遺産であり継続していくべきこと、教材観が指導スタイルに与える影響などである。本事例は、教師・授業者、指導主事、研究部長、大学研究者・指導助言者といった類似の立場にある人々が自らに置かれた文脈と重ね合わせて理解し、それぞれの現場での実践に適用する手助けになりうると考える。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00～10:00 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a601-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表③

座長:高橋 京子(フェリス学院大学)

9:40～10:00

[学校保健体育-A-09] 大阪府における体力水準の高いA市教育委員会の取り組み (教)

子どもの体力向上に向けた施策の実態

*山本 聖也¹、藤浪 大輔²、小林 博隆¹ (1. 大阪体育大学、2. 大阪体育大学大学院)

緒言・目的

子どもの体力向上のために、学校現場と教育委員会が連携し体力向上施策を推進することが求められている。これまで、子どもの体力向上のための取り組みについて都道府県教育委員会に焦点を当てた研究(山田ら、2020；黒岩ら、2024)はあるものの、市町村教育委員会の取り組みに焦点を当てた研究は見当たらない。そこで本研究では、大阪府において高い体力水準を示すA市教育委員会の担当者へのインタビュー調査を通じて、具体的な施策内容と成功要因を特定し、今後の大阪府全体の体力向上施策の改善に資する示唆を得ることを目的とした。

方法

対象は大阪府A市教育委員会子どもの体力向上に関わる担当者2名であり、半構造化インタビュー調査を対面で行った。分析では調査で得られた結果について、体育科教育学を専門とする大学教員1名と大学院生1名で議論し解釈を行った。さらに、インタビュー調査の内容および結果の解釈について齟齬がないか、担当者とメンバーチェックを行い、内容に齟齬のないことを確認した。

結果・考察

A市では、2011年から二小一中の中学校区ごとに「体力推進計画書」を作成しており、計画書を中心とした長期的な施策を展開していた。また、教育委員会は計画の振り返りや今後の取り組みについての研修だけでなく、管理職に対しても体力向上研修を行なっていることが明らかになった。さらに、A市は体育専科の配置を行っていないが、中学校の保健体育科教員が中心となって、小中学校間の往来や出前授業を実施するなど、体育専科の配置がなくとも小学校体育の専門性を高める工夫がされていた。これらの知見は、都道府県教育委員会に焦点を当てた分析では捉えきれない市町村独自の工夫であり、今後の大阪府における体力向上施策を検討する上で重要な示唆を与えると考えられる。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 🏢 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-07]

小学校体育科における受容感を育む関わりが児童の運動有能感、運動意欲に与える効果（教）
マット運動とハンドボールの授業との比較から

*金子 泰子¹、橋爪 和夫²、阿尾 昌樹³ (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立堀岡小学校)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-08]

体力二極化問題の改善に向けた小学校体育の授業の工夫（発）
ボール運動・壁ありサッカーを事例にして

*津田 龍佑¹ (1. 金沢医科大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-09]

上肢のプライオメトリクスを取り入れた投動作指導が高校生の投能力および認識面に与える影響（教）

*池川 博史¹ (1. 兵庫県立伊丹北高等学校)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-07] 小学校体育科における受容感を育む関わりが児童の運動有能感、運動意欲に与える効果 (教)

マット運動とハンドボールの授業との比較から

*金子 泰子¹、橋爪 和夫²、阿尾 昌樹³ (1. 富山国際大学、2. アール医療専門職大学、3. 射水市立堀岡小学校)

【目的】本研究では、小学校体育科において、受容感を育む言葉かけや関わりを器械運動とボール運動(ゴール型)の2単元で実施し、2単元間における児童の支援実施前後の運動有能感及び運動意欲の変容を比較し、単元によって受容感を育む関わりの効果に差があるのかを検討した。

【方法】2024年11月~2025年2月に、富山県内のD小学校に在籍する6年生96名を調査した。岡澤らによる運動有能感調査の合計点が集団の中でも特に低い値を示す児童12名を抽出した。小学校教員志望の大学生が抽出児童12人の学習支援者として学校長の許可を得て体育科の授業に参加した。大学生は抽出児童12名を中心に、クラス全員の児童の取り組みや成長をよく観察し、励ましや取り組みを認める言葉かけを行った。授業終了後に抽出児童12名との学習支援者、担任教諭、周辺の児童との会話内容と、それに対する児童の反応や言動を記録した。学習支援者が介入した授業はマット運動授業5回、ハンドボールの授業5回であった。両単元前後に、全児童を対象に運動有能感調査、運動意欲に関するアンケート調査を実施した。

【結果】抽出児童12名は、マット運動の単元終了後において「身体的有能さの認知」の高まりが見られた。ハンドボールの授業においては、「身体的有能さの認知」「運動意欲」の高まりが見られた。両単元共ににおいて、統制感が授業後に低下した。

【考察】運動有能感が低い傾向にある児童は、励ましや称賛の声かけの機会を増やすことで、「身体的有能さの認知」、「運動意欲」を高めることにつながると推察された。一方で、「統制感」が授業後に低下する児童が複数名みられた。受容感を育む関わりと、統制感の高まりとの関係について追究する必要がある。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 🏢 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-08] 体力二極化問題の改善に向けた小学校体育の授業の工夫 (発)

ボール運動・壁ありサッカーを事例にして

*津田 龍佑¹ (1. 金沢医科大学)

これまで運動する子どもとそうでない子どもの二極化問題が指摘されている（日本学術会議，2008）。ボール運動・サッカーは子どもに人気のある種目であるが、ボールが硬く当たると痛い、ボール操作が難しく連続性がない、などの問題点があるため、子ども目線に立った授業内容を考案することが重要である。これに関連して、壁ありサッカーの負荷特性を検討した結果、運動の得意な子どもだけでなくそうでない子どもも、ゲーム中の活動量が増えることが確認されている（津田ほか，2023）。そこで本研究では、ボール運動「壁ありサッカー」に着目し、その効果を石川県下のO小学校の児童32名（男子17名、女子15名）を対象に検討した。体育授業は2024年7月および9月の合計5時間であった。本研究では最初に「鬼ごっこ」、次に「ストップボール」、最後に「ゲーム」を行わせた。単元前後に、体力測定項目の1つである反復横とびを測定した。また、前後に質問紙調査「運動・スポーツが好きですか」、「体育の授業が楽しいですか」を実施した。本研究の主な結果は次のとおりである。対象者全体でみると、反復横とびの成績は介入前後で有意差は認められなかった（介入前： 6 ± 11.4 回，介入後： 46.5 ± 6.5 回）。男女別にみると、反復横とびの成績は女子では介入前後で有意差は認められなかったが（介入前： 4 ± 10.8 回，介入後： 46.9 ± 5.9 回）、県平均を下回っていた男子では単元後に有意傾向が認められた（介入前： 43.1 ± 11.9 回，介入後： 46.2 ± 7.2 回）。質問紙調査「運動・スポーツが好きですか」、「体育の授業が楽しいですか」については、「好き」と回答した児童の割合は介入前後で変化は認められなかった。以上から、ボール運動「壁ありサッカー」の授業の成果として、県平均を下回っていた男子の反復横とびの成績が改善する可能性が認められた。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2205教室(教育研究棟 2街区 2階 2205)

[2a604-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表③

座長:長野 康平(比治山大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-09] 上肢のプライオメトリクスを取り入れた投動作指導が高校生の投能力および認識面に与える影響（教）

*池川 博史¹ (1. 兵庫県立伊丹北高等学校)

投動作は後天的に獲得される技能であり、適切な学習機会と効果的な指導が求められる。しかし、スポーツ庁による令和5年度体力・運動能力調査では、青少年のボール投げの記録が過去10年間で下降傾向にあり、学習機会や指導内容の質に課題があることが示唆される。特に高校期は、体育授業が生涯スポーツの基礎を形成する重要な時期であり、効率的な投動作の習得が求められる。その中で、注目されているのが、上肢の伸張-短縮サイクル（SSC）である。SSCは筋の弾性エネルギーや伸張反射を利用して爆発的な力を発揮する特性を持ち、投動作との親和性が高い。本研究では、SSC運動を強調したトレーニングである上肢のプライオメトリクスを用い、投動作指導を行った。毎回の授業冒頭に約7分間実施し、感覚定着と動作理解を促した。単なる動作実施ではなく、生徒がSSCの原理や目的を理解し、それを意識しながら取り組むことを重視した。対象はI高等学校の2年次男子22名とし、指導前後で遠投距離の測定および高本ほか（2003）に基づく投動作の観察的評価を実施した。加えて、指導後には記述式質問紙を配布し、生徒の認識面に与える影響をテキストマイニングにより分析した。その結果、遠投距離及び「体幹後傾」「フォロースルー」「体重移動」「体幹回転」などの動作項目、および「最終的なパターン」「合計点」において有意な技能向上が見られた。自由記述からは、SSCを意識することでフォーム改善や投げやすさを実感し、成果への達成感や満足感が高まっていたことが明らかとなった。また、ペア学習や他者からの助言が学びの深化を促す要因として肯定的に捉えられていた。一方で、競技経験や用具の違いにより混乱を覚えた生徒も存在した。これらの結果から、SSCという運動要素自体の効果に加え、それを理解し意識的に活用することが、投能力の向上に関係していると考えられる。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a701-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-10]

学校体育の起点の再考：身心一体科学 考え方と方法（哲,生）

理科と体育の教育の狭間で抜け落ちる「生きている自分」

*跡見 順子¹、藤田 恵理²、清水 美穂¹ (1. 帝京大学先端総合研究機構、2. 帝京大学医療技術学部)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-11]

多様な学習者が共に学びあうための教材開発（哲）

ルールや条件の設定をとおして

*森田 啓¹、高橋 浩二²、中島 早苗⁵、戸枝 美咲⁶、佐藤 和⁴、小谷 恭子⁸、河緒 一彦⁷、畑 孝幸³ (1. 大阪体育大学、2. 長崎大学、3. 東海学園大学、4. 千葉工業大学、5. 共立女子短期大学、6. 日本女子大学、7. 関西学院大学、8. 帝塚山学院大学)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-12]

SUSTAINABILITY IN SPORTS SCIENCE: RESEARCH GROWTH AND GLOBAL INFLUENCE（政）

A BIBLIOMETRIC STUDY

*PONUGUPATI PREMANAND¹ (1. VICE- PRESIDENT , NAPRESS)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a701-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-10] 学校体育の起点の再考：身心一体科学 考え方と方法（哲、生）

理科と体育の教育の狭間で抜け落ちる「生きている自分」

*跡見 順子¹、藤田 恵理²、清水 美穂¹ (1. 帝京大学先端総合研究機構、2. 帝京大学医療技術学部)

体育は、身体を通して自分の存在を知り、人間であることを理解し、一生考え試行錯誤しながら人間を生きる姿勢(態度)を育てる教育である。教育には、その時代の先端知を導入すべきである。跡見順子は、半世紀前に出会った「人間の生物学」を体育学の基盤に据えるべきだと考え研究し、昨年学術書「身心一体科学 考え方と方法」(東京大学出版会)を出版した。生命科学は、目覚ましく発展中であるが、「動く人間」や「教育可能性ある人間」には連携されていない。それは体育や身体運動科学を実践する研究者が行わないと誰も問題にしないだろう。生きている自分自身を、基本から思考の対象として位置づけるためには、「細胞生命科学」と脳科学の本質を取り入れ、教育課程を見直すべきである。文理を早く分けすぎた教育体制を是正すべきである。1. 体育とは「身体」を介しての教育：教育は、時代の最先端の科学を土台にすべき。2. 身心の教育可能性：「刺激に応じて変化する能力」は、生命の単位「細胞」にある。地球で創発した生命体である人間の能力は、他の動物と基本的には同じ原理で、ほぼ生得的に「活動依存性」に獲得する。しかし上述の本で紹介したが、人間のみが意識的に出来るように学習しないと身につかない身体技法(体幹・重心制御)があり、心身の一体化の基本スキルであり体育教育に導入すべき。3. 自分を対象化(俯瞰)する視点が必須である：人間は、自分のシステムを知るように育たない。古代ギリシャの「汝をしれ」が必須で、その学習を体育教育の軸にし、「いのちの原理」をコアにすべきである。4. 「いのちの原理」を創発させた条件としての重力と細胞の生存原理であるメカニカル応答5. 人間の特性(ことば・科学等の抽象的理解)との関係：刺激を受容し、直接応答する末梢器官(の細胞)とことば(記号)等により統合的に理解する脳神経系の細胞原理を理解する教育が必須である。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a701-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-11] 多様な学習者が共に学びあうための教材開発（哲）

ルールや条件の設定をとおして

*森田 啓¹、高橋 浩二²、中島 早苗⁵、戸枝 美咲⁶、佐藤 和⁴、小谷 恭子⁸、河鱈 一彦⁷、畑 孝幸³ (1. 大阪体育大学、2. 長崎大学、3. 東海学園大学、4. 千葉工業大学、5. 共立女子短期大学、6. 日本女子大学、7. 関西学院大学、8. 帝塚山学院大学)

体育・保健体育において、子どもたちの技術、体力、モチベーションに大きな個人差があることが指摘される。しかし、子どもを取り巻く環境の変化を考慮すれば、この個人差を前提に実施する必要があるだろう。幼少年期に近所の公園、空き地で友達と遊ぶ機会・場所はかつてと比較すれば激減している。運動教室やスポーツクラブなどで身体を動かさざるを得ない。そうすると家庭の経済力によって身体活動経験・能力は影響を受ける。身体的発達には個人差が大きいのに加え、新自由主義によってその差は拡大している。身体に関して非常に大きい格差がある。その子どもたちが一斉に取り組むのが体育である。この非常に大きくなっている「身体的な違い」を前提に体育・スポーツを考える必要がある。

重要なことは、これらの個人差をマイナスと捉えるのではなく、この特徴を活かし、「教え合い、学び合い」を基本とし、受講生全員が当初の技術、体力、モチベーションから向上することをめざすことであろう。この「教え合い、学び合い」が生じる環境、条件の整備が重要と考える。たとえば、サッカーにおいては、運動部活動等の経験者とそれ以外の学生を均等にグループ分けし、最初は「2タッチ&グラウンダー」という条件でゲームを開始する。続けて触れるのが2回という制限は、経験者のドリブルを不可能にし、グラウンダーは長いパスを制限する。必然的にショートパスをつなぐスタイルになる。短い正確なパス、トラップ、スペースへの動きが必要になり、経験者はアドバイスし、それ以外の者はわからないこと、できないことを質問することでチームのレベルアップにつながる。個人やチームのレベルアップに応じて、条件を変更することで、より高度なパフォーマンスを発揮したい。

さらに、既存のスポーツを実践するだけでなく、新しいゲームを創出したり、ルール・条件を変更したりするなど、さまざまな工夫を凝らした実践を試みたい。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a701-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表④

座長:吉永 武史(早稲田大学)

9:40 ~ 10:00

**[学校保健体育-A-12] SUSTAINABILITY IN SPORTS SCIENCE: RESEARCH GROWTH AND GLOBAL INFLUENCE (政)
A BIBLIOMETRIC STUDY**

*PONUGUPATI PREMANAND¹ (1. VICE- PRESIDENT , NAPRESS)

Abstract This study presents a comprehensive bibliometric analysis of sustainability research in sports science between 2015 and 2025, using data sourced from the Scopus database. A total of 67 documents, identified through the keywords “sustainable sports” and “sustainability sports science,” were analysed using Biblioshiny in R Studio to assess publication trends, key sources, country contributions, and collaboration networks. Results indicate a steady increase in scientific output, particularly since 2020, with an annual growth rate of 7.18%. The journal *Sustainability (Switzerland)* emerged as the leading publication outlet, while Spain, Australia, and the USA were the top contributing countries. International collaborations were prominent, highlighting the global and interdisciplinary nature of the field. The findings emphasize the growing importance of integrating sustainability principles into sports science to address environmental, social, and economic challenges. The study concludes by underscoring the vital role sports science plays in supporting sustainable development goals through research, practice, and policy, and offers recommendations for fostering further interdisciplinary collaboration and knowledge sharing. **Keywords:** Sustainability in Sports Science, Bibliometric Analysis.

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-10]

大学生を対象にした〈開脚とび〉の指導に関する事例研究（コ,教）
運動の先取りを促す用具の工夫に着目して

*仲宗根 森敦^{1,2} (1. 東京学芸大学、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-11]

器械運動の評価方法に関する基礎研究（発,測,コ,教）
側転の評価に関する一考察

*田中 光¹ (1. 流通経済大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-12]

学年および跳び箱の高さが開脚跳びの動作達成度と与える影響（発,測,教）
小学校中学年児童の縦断データを用いた検討

*佐野 孝¹、上田 恵子²、國土 将平¹ (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 畿央大学教育学部)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-10] 大学生を対象にした〈開脚とび〉の指導に関する事例研究
(コ,教)

運動の先取りを促す用具の工夫に着目して

*仲宗根 森敦^{1,2} (1. 東京学芸大学、2. 筑波大学大学院人間総合科学学術院)

本研究では、跳び箱運動における〈開脚とび〉の習得を促した指導事例の報告をする。対象はサッカーを専門としてきた男子学生である。跳び箱運動の経験が乏しく、指導当初は〈開脚とび〉を試みても着手で動作を止めてしまう様子が観察された。運動経過からは、着手技術の不足と運動投企の未形成が課題であると考えられた。そこで、本指導では跳び箱を斜めに設置し、着地地点が見えるように工夫するなど段階的な練習を導入した。結果として、着手局面から着地に至る運動の見通しが得られ、最終的に縦置き跳び箱を跳び越えることが可能となった。本事例からは、終末局面を先に体験させる指導の有効性、用具の使用法における創意工夫の必要性が示唆された。また、片足踏切や片手荷重といった未熟な動作も、運動発達の一段階として肯定的に捉え直すことができる。初心者指導においては、特に安全に着地できるようにすること、それを見据えた着手と着地の確保、発達特性を踏まえた段階的指導が重要であることを示すことができた。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 🏢 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-11] 器械運動の評価方法に関する基礎研究（発,測,コ,教）

側転の評価に関する一考察

*田中 光¹ (1. 流通経済大学)

本研究の目的は、器械運動の評価方法を模索することであり、側転の新たな評価の方向性を探ってみた。仙台市の3つの小学校の1年生～3年生合計200名を対象に側転の練習とループリック形式で作成した「側転ループリック評価アンケート調査」を実施した。仙台市の体育科の評価においては、概ね「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」のそれぞれに関して、「よくできた」、「できた」、「頑張ろう」の3段階で評価している。ただし、通知表（通信表・通信票など）の作成は義務ではなく、あくまでも児童の学習状況を保護者に伝えるものであり、作成の義務があるのは「指導要録」である。指導要録は、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点別評価があり、学校で作成している通知表も上記3点を評価し、保護者へ伝えている。「知識・技能」は、健康や安全についての正しい知識や運動の基本的な動きや技能を身に付けているかなどを評価、「思考・判断・表現」は、運動や健康について自分の課題を見つけ解決方法を考えて友達に伝えているかなどを評価、「主体的に学習に取り組む態度」は、進んで運動を楽しんだり、ルールを守り仲間と協力して運動しているかなどを評価している。体育の評価は、技能評価はさておき、明確な基準が定まっていないことや「見える化」が進んでいないことが問題点の一つと考えられる。

今回実施した「側転ループリック評価」に改善を重ねれば、特に「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の評価観点において、授業に取り組む姿勢や態度を「見える化」「定量化」することで判断基準や判断材料が明確となるのではないかと考える。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいか
かに貢献できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2206教室(教育研究棟 2街区 2階 2206)

[2a704-06] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④

座長:木島 章文(山梨大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-12] 学年および跳び箱の高さが開脚跳びの動作達成度に与える影響（発,測,教）

小学校中学年児童の縦断データを用いた検討

*佐野 孝¹、上田 恵子²、國土 将平¹ (1. 中京大学スポーツ科学部、2. 畿央大学教育学部)

【目的】小学校中学年児童の縦断データに基づき、開脚跳びの動作達成度に対する学年の影響と各学年における跳び箱の高さの影響を検討することを目的とした。

【方法】A市立A小学校の児童117名（男子56名、女子61名）を対象に、3年生時と4年生時の1月に開脚跳びのビデオ撮影（4・5段で各2回）を行った。技の観察的評価基準（30項目）による評価を行い、各段の試技2回のうち評価合計点が高い試技を分析に用いた。得点分布に著しい偏りがある項目を除外した上で、動作得点への学年の影響を調べるため、従属変数に各項目の動作得点、独立変数に性別、学年を固定効果、対象者を変量効果に指定した混合効果順序ロジスティック回帰分析を実施し、学年の主効果が有意な項目を特定した。また、動作得点への跳び箱の高さの影響を調べるため、3年生時と4年生時において、従属変数に各項目の動作得点、独立変数に性別、跳び箱の高さを固定効果、対象者を変量効果に指定した混合効果順序ロジスティック回帰分析を実施し、跳び箱の高さの主効果が有意な項目を特定した。有意水準は5%とした。

【結果】得点分布より21項目を分析対象に選定した。動作得点に対して学年の主効果が有意であった項目は、踏み切り時の「腕の揃え」、着手時の「手の突き放し」、「肩の起こし」、「両脚の伸展保持」、離手後の「目線」と「両脚の揃え」、着地時の「腰・膝の屈曲」、「静止姿勢」であった。跳び箱の高さの主効果が有意であった項目は、3年生時で踏み切り時の「わきのしめ」、踏み切り後の「腕の投げ出し」、4年生時で踏み切り時の「自由脚の屈曲調整」、「足部の接地先取り」、「リバウンドジャンプ」、踏み切り後の「腰の上昇」であった。

【結論】学年が上がった場合、主に着手から着地に至る動作で達成度の向上がみられ、4年生時は、特に踏み切り時の弾むようなジャンプにおいて跳び箱の高さの影響がみられやすい。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-13]

女子大学生の運動実態と体育意識から考える授業改善（教）

*朴 京眞¹、洪 性賛² (1. 聖心女子大学、2. ソウル女子大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-14]

国立高等専門学校における保健授業の実態把握（保）

Webシラバスに基づく分析から

*南 雅樹¹、柴山 慧²、坂田 洋満³、高津 浩彰⁴、石飛 朱萌⁵ (1. 石川工業高等専門学校、2. 福山平成大学、3. 木更津工業高等専門学校、4. 豊田工業高等専門学校、5. 徳山工業高等専門学校)

9:40 ~ 10:00

[学校保健体育-A-15]

体験型防災キャンプが体育系大学生の防災意識に与える教育的効果（生,介）

自衛隊駐屯地での実践を通して

*伊藤 三千雄¹、浦 佑大¹、坂本 康輔¹、清田 美紀¹、柴山 慧²、早田 剛¹、三浦 孝仁¹ (1. IPU環太平洋大学、2. 福山平成大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00 ~ 10:00 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-13] 女子大学生の運動実態と体育意識から考える授業改善（教）*朴 京眞¹、洪 性賛² (1. 聖心女子大学、2. ソウル女子大学)

女子大学生は「運動経験」「体育への抵抗感」「健康志向」「仲間との活動志向」などにおいて男子学生とは異なる傾向があり、女子大学生のニーズに即した大学体育授業の再検討は喫緊の課題である。その際、実態調査に基づく実証的な授業改善（Evidence-Based Education）は、モチベーションや学修成果の向上に資すると考えられる。そこで、本研究では、女子大学生515名を対象に、大学入学時点におけるスポーツ実施状況と大学体育に対する意識の実態を把握し、授業の改善点を探ることを目的とした。調査は、2025年4月にGoogle Formsを用いて実施した。調査項目はスポーツ庁の世論調査を参考にし、意識把握には説明的文章完成法を用いた。その結果、健康であると感じている学生は88.2%に上る一方で、体力に不安を抱く学生が6割以上を占め、87%以上が運動不足を自覚していた。運動頻度は、約6割が週1日以上運動している一方で、4割はそれ未満の頻度にとどまり、運動習慣において二極化が見られた。運動動機は「楽しみ」「健康」「ダイエット」が上位を占めた。観戦・支援活動については経験が少なく、「観る・ささえる」スポーツ文化との接点が弱いことも示された。また、運動やスポーツを大切に好きとする肯定層が半数近くを占めた一方で、価値は認めつつも苦手意識を持つ学生が約3割存在した。最後に、大学体育が「健康・体力」にとどまらず、「自己成長」「人間関係の構築」「情緒的価値」といった多面的な意味で認識されていた。以上から、女子大学生を対象とした大学体育授業においては、運動習慣の再構築を目指すとともに、プレッシャーのない雰囲気づくりと小さな成功体験ができる活動を取り入れることが求められる。また、文化としての運動やスポーツの意味を再認識し、スポーツの多様な活動を経験できるように授業設計を行う必要があることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00～10:00 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:20～9:40

**[学校保健体育-A-14] 国立高等専門学校における保健授業の実態把握（保）
Webシラバスに基づく分析から**

*南 雅樹¹、柴山 慧²、坂田 洋満³、高津 浩彰⁴、石飛 朱萌⁵ (1. 石川工業高等専門学校、2. 福山平成大学、3. 木更津工業高等専門学校、4. 豊田工業高等専門学校、5. 徳山工業高等専門学校)

〔背景と目的〕高等専門学校（以下、高専）とは、主に16歳から20歳の学生が在籍する高等教育機関であるが、一般的な教科教育という観点から、保健体育の授業も実施されている。高専における保健体育の授業が、どのように展開されているのかは、国立高等専門学校機構が定めた身につけるべき知識や能力の具体的な到達目標であるモデルコアカリキュラム（以下、MCC）に保健体育が位置づけられていないため、その全容を知ることは難しい。これまで、高専の体育授業については、柴山ほか（2022）が全国的な調査からその全容の解明に努めているが、保健授業については同様の研究は見当たらない。そこで、本研究では国立高専の保健授業について、各校が公開しているWebシラバスを基に、その全容を明らかにすることを目的とする。

〔方法〕2025年度Webシラバスから高等学校年代に相当する1～3年次に開講されている保健体育の科目を全て分析対象とした。

〔結果と考察〕①実施科目や時間配当：「保健」という科目を設けて実施している高専は約29%、多くの高専は「保健体育」という科目の中で時間数を限って実施している。また時間配当も1単位程度であり、「保健」の内容を全く実施していない高専も見られた。②カリキュラムや授業内容：健康、生活習慣病、性、喫煙・薬物乱用などのキーワードに関する内容が最も多かった。これらは、高等学校の学習指導要領の領域では「現代社会と健康」に含まれる内容であるが、その他の領域「生涯を通じる健康」、「安全な社会生活」、「健康を支える環境づくり」の内容を盛り込んだシラバスが少ない傾向にあった。MCCに保健体育が位置づけられていないため、「保健」に関する時間配当の少なさや授業内容の偏重といった問題点が明らかになった。一方で、身体不自由者疑似体験等の特徴的な授業も実施されており、高専の特色を生かした保健のあり方も示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00～10:00 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a801-03] 学校保健体育研究部会 【課題A】 口頭発表⑤

座長:久保 元芳(宇都宮大学)

9:40～10:00

[学校保健体育-A-15] 体験型防災キャンプが体育系大学生の防災意識に与える教育的効果 (生,介)

自衛隊駐屯地での実践を通して

*伊藤 三千雄¹、浦 佑大¹、坂本 康輔¹、清田 美紀¹、柴山 慧²、早田 剛¹、三浦 孝仁¹ (1. IPU環太平洋大学、2. 福山平成大学)

【研究の背景】日本は地震、台風、豪雨、大雪など、多様な自然災害のリスクに常にさらされている。このような状況に対処するためには、科学的かつ合理的な防災・減災対策を習得することが不可欠である。特に体育・スポーツを学ぶ学生は、その身体性や集団的特徴から、自らや身近な人々だけでなく、社会的により弱い立場の者を助ける心性を備え、それを実践可能とする最低限の身体能力・技能を有することが求められる。さらに近年、防災・減災力を高める学習方法として、アウトドアアクティビティが注目されている。その中でも、防災キャンプは、被災時の生活に役立つ体験的な学びを得る手段として考えられた教育手法であり、文部科学省もその推進を図っている。

【目的】本研究は、体育系大学生を対象とした体験型防災キャンプが防災意識に及ぼす教育的効果を検討することを目的とした。

【方法】対象はK大学体育学科に所属する学生16名であり、自衛隊駐屯地において実施された2日間の防災キャンプに参加した。プログラム内容は、応急救護、天幕設営、行進訓練等の実践的活動で構成された。防災意識の変容を測定するために、防災意識尺度を用いて事前・事後の意識調査を実施し、さらに自由記述を含むアンケート調査を行った。

【結果】防災意識尺度の分析により、「被災状況の想像力」および「他者指向性」において有意な向上が認められた ($p<0.05$)。また、アンケート結果では、参加者の95%以上が本プログラムに対して「満足」と回答し、特に応急救護訓練に関しては全員が「有益であった」と評価した。

【考察】これらの結果より、実践的活動を中心とした体験型防災学習が大学生の防災意識の向上に有効であることが示唆された。今後は、防災意識の向上を具体的な行動力へとつなげるための教育プログラムの構築と、地域や関係機関との連携による継続的な防災教育の展開が課題である。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

⌚ 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-13]

「心臓の位置」の正答者は大学生が小学6年生よりもかなり少ない（保）

素朴概念の存在が引き起こす心肺蘇生法の指導のためエビデンス

*小浜 明¹、砂田 芽衣²、物部 博文³ (1. 仙台大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 横浜国立大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-14]

胸骨に着目した姿勢の調整が立位姿勢および視点に与える影響（コ）

高校生を対象に

*福岡 小百合¹、寺山 由美²、広野 泰子²、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院/追手門学院中・高等学校、2. 筑波大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-15]

タグラグビーに特有の「易しさ」の再考（教）

*渡部 颯斗¹、鈴木 秀人² (1. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2. 東京学芸大学大学院教育学研究科)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-16]

タグラグビーのルールをやさしく学習できるゲーム型教材の提案（教,政）

小学校中学年の児童を対象とした授業分析からの検証

*鈴木 利也^{1,2}、佐川 哲也³ (1. 小松市ラグビーフットボール協会、2. 石川県ラグビーフットボール協会、3. 金沢大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-13] 「心臓の位置」の正答者は大学生が小学6年生よりもかなり少ない(保)

素朴概念の存在が引き起こす心肺蘇生法の指導のためエビデンス

*小浜 明¹、砂田 芽衣²、物部 博文³ (1. 仙台大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 横浜国立大学)

「胸骨圧迫」とは「からだの外から心臓を圧迫することによって、血液の流れを人工的に作り出す」(東書中学教科書)とある。一方『中学保健体育の研究』(学研指導書)には「心臓は胸の左側にあるように思われているが、基本的には心臓の中心は胸の中央にある。ただし体全体に血液を送らなければならない左心室の方が右心室より大きく心筋も3倍も厚いので、体の正中線に対して左側にその3分の2が偏っている」とある。さらにAEDの役割は「正常な動きをしていない状態(心室細動)にある心臓に電気ショックを与え、正常な動きを取り戻す(除細動)」(学研中学教科書)とある。AEDはAutomated External Defibrillator (De (除く) + fibrillate (細かく不規則な運動をする) + or (器))の頭文字で、日本では自動体外式除細動器と呼ばれる。さて発表者らは、2023年大会において、国立大学の教員養成系学部の小学校教員免許取得予定の1年生で、研究利用の同意が得られた198名を対象に、「胸骨圧迫の位置」「心臓の位置」「AEDの役割」の認識調査を実施した。通過率はそれぞれ順に66%、31%、22%であった。この結果をどのように解釈するか。今回は比較のため、2025年4月、体育系私立大学で、保健体育科教員免許取得予定の3年生で、研究利用の同意が得られた186名を対象に同様の調査を実施した。通過率は65%、29%、32%であった。「胸骨圧迫の位置」は両大学とも2/3が正答であった。「AEDの役割」は体育系私立大学3年生の正答者が有意に多い($p<.05$)。「心臓の位置」「AEDの役割」は、いずれの大学も正答者が低位だった。特に「心臓の位置」は、発表者が2017年3月に小学6年生を対象に実施(倫理審査会：通知27-3)した通過率52%より、両大学とも誤答者が有意に多かった($p<.01$)。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 🏢 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-14] 胸骨に着目した姿勢の調整が立位姿勢および視点に与える影響 (コ)

高校生を対象に

*福岡 小百合¹、寺山 由美²、広野 泰子²、國部 雅大² (1. 筑波大学大学院/追手門学院中・高等学校、2. 筑波大学)

内閣府の調査(2022)によると高校生のインターネット使用率は99.6%、1日の平均利用率は6時間14分であり、近年の高校生は頻繁にIC機器を使用する。1978年より実施されている子どもの「からだの変化」の調査において、2022年はネットゲーム依存症、うつ傾向が挙げられ(野井ら, 2022)、中高生の猫背姿勢の増加も報告されている(加藤ら, 2014)。猫背の姿勢はネガティブな精神を生むとも指摘されており(菅村, 2015)、自らの姿勢に意識を向け、調整する力を育むことは心身の健康を維持するためにも必要だと考えられる。これまでの姿勢研究では、「背骨」に着目して姿勢を調整することの効果が検証されているが、それ以外の部位に着目した研究はない。実際に触れながら視覚的にも確認できる「胸骨」は高校生にも自覚させやすい部位である。本研究は、胸骨に着目した姿勢の調整が立位姿勢および視点に与える影響を明らかにすることを目的とした。高校生105名を対象とし日常の立位時と胸骨に意識を向けて調整を行った立位時の体幹部の姿勢と視点を対応のあるt検定を用いて比較した。有意水準は1%未満とした。姿勢を評価するために、立位時の静止写真を撮影し、第7頸椎、第10胸椎、上後腸骨棘に貼付した反射マーカ―と地面設置した4点の校正点の位置をデジタイズした。校正点を基にした相似変換によって、矢状面における身体各点の位置を算出した。第10胸椎と上後腸骨棘を結ぶ線に対して、第7頸椎と第10胸椎を結ぶ線の前傾は、調整前よりも調整後で有意に低下した。また、視点の位置は、頭部装着型の視線計測装置を用いて視界の映像を記録し、視線データから視点の位置を算出・比較した。その結果、調整前よりも調整後で視点の位置が有意に高くなった。以上の結果から、胸骨に着目した姿勢の調整によって、猫背姿勢が改善され、視点の位置が高くなることが確認された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-15] タグラグビーに特有の「易しさ」の再考（教）

*渡部 颯斗¹、鈴木 秀人² (1. 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2. 東京学芸大学大学院教育学研究科)

一般的にタグラグビーは、インベージョンゲームの中でとりわけ易しいゲームであると言われている。というのも、ドリブルやシュートを要するサッカーやバスケットボールなどの他とは異なり、タグラグビーではボールを持ち抱えたまま自由に走ることができ、そしてインゴール内に走り込んでボールを地面に置くだけで得点することができるからである。では、こうした技術の「易しさ」を根拠にタグラグビーは易しいゲームであると真に言ってしまうのもよいのであろうか。

これまで技術の観点からタグラグビーの「易しさ」が論じられる際、児童の意識調査を実施する実証的な検討が複数なされてきた。それらに目を向けてみると、上述したようなタグラグビーの技術を易しいとする児童が学習を重ねる度に増えていく反面、それを易しいとはしない児童も現実にはいたことがわかる。よって、この現実を看過したまま技術の「易しさ」ばかりを根拠にタグラグビーは他よりも易しいゲームであると簡単に言うことはできない、と考えられよう。ならば、技術とは別の観点からタグラグビーの「易しさ」を改めて考えてみなければならない。

他方でタグラグビーに特有の「易しさ」は、ゲームにおいて何が起きているのかという闘ぎ合いの観点からも考察されてきた。だがその方面の議論は、原型であるラグビーフットボールとの相違からその派生であるタグラグビーの「易しさ」を論じることに未だとどまっている。

かかる問題意識に立ち、本研究では、闘ぎ合いの観点からタグラグビーと他のインベージョンゲームとの違いを問い直し、タグラグビーはインベージョンゲームの中でとりわけ易しいゲームであると言えるのか否かを考察する。本研究の試みによって新たに見えてくる、タグラグビーに特有の「易しさ」あるいは「難しさ」について報告する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:50 📍 2202教室(教育研究棟 2街区 2階 2202)

[2a804-07] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑤

座長:三上 純(関西大学)

14:30 ~ 14:50

[学校保健体育-B-16] タグラグビーのルールをやさしく学習できるゲーム型教材の提案（教,政）

小学校中学年の児童を対象とした授業分析からの検証

*鈴木 利也^{1,2}、佐川 哲也³ (1. 小松市ラグビーフットボール協会、2. 石川県ラグビーフットボール協会、3. 金沢大学)

【研究の目的】小学校中学年の児童を対象としたタグラグビーの体育授業において、学習が難しいとされているスローフォワードやオフサイドルールをやさしく学習するためのゲーム型教材を提案すること。

【研究の方法】タグラグビーゲームにおけるプレイヤーの役割を、攻撃／守備、ボールの保持／不保持、守備時のポジションによって分類し、個々の役割における技術を明らかにした。その技術を学習するためにすでに知られている一般的な教材を割り当てたところ、学習が難しいとされているスローフォワードとオフサイドを学習する教材が少ないことが明らかとなった。そこで、スローフォワードとオフサイドを学習する教材を新たに考案し、それを採用した授業を小学校中学年に実施し、その効果を検証した。

【研究の結果】単元を3つの段階に分けて、第1段階はすでに知られている一般的な教材を配置してタグラグビーの基本的な動きを一斉学習で学び、スローフォワードやオフサイドルールを学習する第2段階は新たに考案した「じゃんけん2対1」、「じゃんけん3対3」のゲーム型教材を使って、少人数グループで学び合いを中心としたグループ学習とした。第3段階で5対5のタグラグビーゲームを行い、ゲーム分析を行ったところ、学習が難しいとされているスローフォワードやオフサイドの出現率は先行研究と比較しても同等程度もしくは低い結果となった。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 9:40 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a901-02] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:綿引 清勝(東海大学)

9:00 ~ 9:20

[学校保健体育-A-16]

中学校における、主体的・対話的なダンスの授業作り（教）
よりよいダンス授業実践を目指す教師とのアクションリサーチを通して

*宮本 乙女¹ (1. 日本女子体育大学)

9:20 ~ 9:40

[学校保健体育-A-17]

期間記録法から見た模擬授業の課題点（教）

*足立 美和¹ (1. 共立女子大学)

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

📅 2025年8月28日(木) 9:00～9:40 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a901-02] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:綿引 清勝(東海大学)

9:00～9:20

[学校保健体育-A-16] 中学校における、主体的・対話的なダンスの授業作り（教）
よりよいダンス授業実践を目指す教師とのアクションリサーチを通して

*宮本 乙女¹ (1. 日本女子体育大学)

中学校保健体育においてすべての領域が男女ともに必修になって（2008年学習指導要領告示）16年の歳月が経ったが、未だに中学校ダンスの学習指導について、現場の教師たちが課題を抱えている。創作ダンスと現代的なリズムのダンスについては、生徒自身が動きを創出する創作型の学習を推奨されているが、学校で作成した既成作品かまたは、YouTubeなどで再生できる既成の動画を踊れるようになることが目標とされていたり、教師が教えることなく放任する授業となっていたりする例も指摘されている。主体的・対話的で深い学びが実現できる課題解決型のダンス指導が提案されてはいるが、普及は進んでいない状況である。

そこで、本研究では、ダンス学習指導に課題を抱えている2人の教師に、課題解決型のダンス授業を提案する。それぞれの指導歴やダンス授業に対する考えに基づいて、必要な情報を提供し、対象教師と研究者により単元計画を作成する。中学1年生3クラスには、創作ダンスの基本的な単元6時間、中学2年生2クラスには、現代的なリズムのダンスの単元5時間を実践する。実際の中学校授業現場を対象として具体的なフィードバック活動を重ねることで、教師の指導力向上やダンス授業に関する困難さの解消を目指す。

授業観察と学習カードにより生徒の様子を捉えながら、アクションリサーチの手法を使用し、教師自身の省察を研究者がバックアップする。単元終了後には、フィードバック記録や映像記録なども活用しながら、半構造化インタビューを行う。ダンス学習そのものや自分自身のダンスの指導への考えが変容するのか、それはどのような学習場面や、授業フィードバックや生徒の様子などからもたらされた可能性があるのかについて、SCATを用いて分析する。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題A】学校保健体育をいかに良質なものにするか

2025年8月28日(木) 9:00～9:40 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a901-02] 学校保健体育研究部会【課題A】口頭発表⑥

座長:綿引 清勝(東海大学)

9:20～9:40

[学校保健体育-A-17] 期間記録法から見た模擬授業の課題点（教）*足立 美和¹ (1. 共立女子大学)

問題の所在；半期14回で行っている初等教科教育法（体育）では、いわゆる教科教育に当たる小学校体育の学習内容については理論的に知識として学ぶまでであり、実技実践を行わないままに教科教育法において模擬実践を行っているのが現状である。限られた授業時間内でより良い教授法を学ぶために、現状の模擬授業の課題点をできるだけ具体的に明らかにし、指導案作成や模擬授業実践における有益なポイントを見つけ出すことが必要と思われる。

研究目的；初等教科教育法（体育）で実施された模擬授業を期間記録法によって学習場面の分析を行い、学習者の陥りやすい授業展開の特徴を明らかにし、今後の学習の資料とすることを目的とした。

研究方法；2023年及び2024年実施の初等教科教育法（体育）運動領域模擬授業17回を対象にコーディング法（期間記録法）による学習場面の割合の分析を行い、その割合から陥りやすい授業展開について分析する。

結果及び考察；（1）2023年度（5回）の傾向 ①全領域の傾向；マネジメント12.3%、学習指導35.3%、認知（記録等）学習1 11.3%、認知（運動）学習2 41.1% 学習指導場面は20%以内に収め、諸活動である「認知（運動）学習」場面を50～60%程度確保することが理想であるが、2023年度においてはその条件が満たせず、説明や解説に時間を割いてしまい十分な運動学習時間が確保できていないことが明らかになった。（2）2024年度（12回）の傾向 現在分析中であり結果については当日ご報告の予定である。

まとめ；2023年度で明らかになった傾向を踏まえ、模擬授業の指導案作成や模擬授業実践時には、認知（運動）学習の時間を十分に確保するように助言を行ったが、認知（運動）学習の時間を十分に確保できたとは言い切れない。当日は2024年度の結果を加え、新たな教科教育法の学習のポイントについて考察を述べる。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

📅 2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 📍 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a903-05] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長:山田 考禎(福井大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-17]

保健体育授業における「原則、男女共習」を考える（測）

共習授業と別習授業を体験した大学生の意見および感想

*松田 繁樹¹、山田 淳子²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 龍谷大学、2. 滋賀大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-18]

中学校体育授業のバレーボールにおける男女共習と別習の違いが生徒の学びに与える影響（発，教）

*山田 淳子¹、松田 繁樹²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 滋賀大学、2. 龍谷大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

14:10 ~ 14:30

[学校保健体育-B-19]

演題取り下げ

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a903-05] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長:山田 考禎(福井大学)

13:30 ~ 13:50

[学校保健体育-B-17] 保健体育授業における「原則、男女共習」を考える (測)
共習授業と別習授業を体験した大学生の意見および感想

*松田 繁樹¹、山田 淳子²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 龍谷大学、2. 滋賀大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

本研究では、大学生を対象とし、ソフトボールおよびサッカーの授業において、男女共習と男女別習の授業を実施し、学生の授業後の意見および感想について共習と別習で比較することを目的とした。対象者はS県内の大学の教育学部に在籍する1年生であった。ソフトボール授業では53名、サッカー授業では55名が分析対象であった。ソフトボールおよびサッカーの授業を共習と別習で行い、その後にアンケート調査を行った。アンケート調査内容は、「授業の満足度」、「授業の楽しさ」、「授業における仲間と交流」、「授業における全力での運動」、「技術向上にはどちらがよいか」、「安全に行うにはどちらがよいか」、「希望するのはどちらか」、「小学校の授業ではどちらがよいか」、「中学校の授業ではどちらがよいか」、「高等学校の授業ではどちらがよいか」の10項目であった。5件法（男女別習、どちらかというとな男女別習、どちらともいえない（同程度）、どちらかというとな男女共習、男女共習）で回答してもらった。対象者数が少なかったため、回答カテゴリーを3つに統合し、分析を行った。適合度の検定および多重比較検定を行った。ソフトボールの授業では、「授業の満足度」、「希望するのはどちらか」以外の8項目に有意差が認められた。男女別に分析した結果、有意差の現れる項目が男女で異なっていた。サッカーの授業では、「授業の楽しさ」および「授業における仲間との交流」以外の8項目に有意差が認められた。男女別に分析した結果、有意差の現れる項目が男女で異なっていた。結論として、男女共習および男女別習に対する大学生の意見および感想は種目および性の違いにより異なることが示唆された。

テーマ別研究発表 | 学校保健体育研究部会：【課題B】体育・スポーツ・健康科学は、学校保健体育の進展にいかに関与できるか

2025年8月28日(木) 13:30 ~ 14:30 2203教室(教育研究棟 2街区 2階 2203)

[2a903-05] 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表⑥

座長:山田 考禎(福井大学)

13:50 ~ 14:10

[学校保健体育-B-18] 中学校体育授業のバレーボールにおける男女共習と別習の違いが生徒の学びに与える影響（発,教）

*山田 淳子¹、松田 繁樹²、出村 友寛³、三谷 林太郎⁴ (1. 滋賀大学、2. 龍谷大学、3. 仁愛大学、4. 滋賀大学大学院)

本研究では、中学生を対象に男女共習（授業全体を通して男女混合）と男女別習（授業のはじめとまとめのみ男女混合で行いその他は男女別）の体育授業を実施し、共習と別習の違いが生徒の学びに関する意識、技能、および授業中の活動量に与える影響を明らかにすることを目的とした。対象者はS県の国立中学校に在籍する2年生70名（共習群35名、別習群35名）であった。対象授業はバレーボールの全9時間であった。調査内容は、体育授業に関するアンケート、学びの成果を問う事後アンケート、形成的授業評価、授業中の運動強度（Mets）、バレーボールの基礎技能（直上アンダー、直上オーバー）であった。体育授業に関するアンケート、形成的授業評価、運動強度、および基礎技能については一要因にのみ対応のある二要因分散分析を行った。事後アンケートは対応のないt検定を行った。結果、体育授業に関するアンケートでは「バレーボールの授業が好きか」において交互作用が認められ、女子の別習群において事後が事前より有意に高値を示した。事後アンケートでは「楽しむことができたか」「授業を行って互いに協力し、励まし合うことができたか」において女子は別習群が共習群より有意に高値を示した。形成的授業評価では「楽しかったですか」「もっとやってみたいと思いますか」において女子は別習群が共習群より有意に高値を示した。運動強度では、女子において8時間目および9時間目に別習群が共習群より有意に高値を示した。基礎技能では女子において直上アンダーの「膝の曲げ伸ばし」および「身体全体の動き」で交互作用が認められ、別習群において事後が事前より有意に高値を示し、事後において別習群が共習群より有意に高値を示した。中学生のバレーボール授業において男女別習の授業は部分的ではあるものの、特に女子における学習意欲の向上、運動強度の増加および技能の向上につながることを示唆された。

各種会議・ミーティング | 専門領域別：体育社会学

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 3206教室(教育研究棟 3街区 2階 3206)

[2a13-1220] 体育社会学／理事会

12:20 ~ 13:20

[2a13-1220-1add]

各種会議・ミーティング

各種会議・ミーティング | 専門領域別：アダプテッド・スポーツ科学

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 2312教室(教育研究棟 2街区 3階 2312)

[2a21-1220] アダプテッド・スポーツ科学／評議員会

12:20 ~ 13:20

[2a21-1220-1add]

各種会議・ミーティング

各種会議・ミーティング | 専門領域別：体育科教育学

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 2306教室(教育研究棟 2街区 3階 2306)

[2a22-1220] 体育科教育学／理事会

12:20 ~ 13:20

[2a22-1220-1add]

各種会議・ミーティング

各種会議・ミーティング

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 2501(中会議室)(教育研究棟 2街区 5階 2501)

[2a25-1220] 地域協力学会連絡会議

12:20 ~ 13:20

[2a25-1220-1add]

各種会議・ミーティング

展示

⌚ 2025年8月28日(木) 9:00 ~ 17:00 📍 メインアリーナ(入口側)(スポーツ棟 2階)

[2c1-0900] 企業・書籍展示

9:00 ~ 17:00

[2c1-0900-1add]

展示

ランチョンセミナー

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[RS-03] ランチョンセミナー③／アーカイブティップス株式会社

協力:アーカイブティップス株式会社

座長:村井 楓子(アーカイブティップス株式会社)

※当日8:15から受付窓口『7番』にて食事券を配布します。(先着順定員制)

[ランチョン3]

北海道日本ハムファイターズのスポーツサイエンスを活用した選手育成の取り組み
動作解析の導入背景と活用事例

*山口 雄大¹(1.株式会社北海道日本ハムファイターズ ベースボールオペレーション部)

ランチョンセミナー

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 2201教室(教育研究棟 2街区 2階 2201)

[RS-03] ランチョンセミナー③／アーカイブティップス株式会社

協力:アーカイブティップス株式会社

座長:村井 楓子(アーカイブティップス株式会社)

※当日8:15から受付窓口『7番』にて食事券を配布します。(先着順定員制)

[ランチョン3] 北海道日本ハムファイターズのスポーツサイエンスを活用した選手育成の取り組み

動作解析の導入背景と活用事例

*山口 雄大¹ (1.株式会社北海道日本ハムファイターズ ベースボールオペレーション部)

プロ野球は、レギュラーシーズン約140試合（1軍：143試合、ファーム：120 - 140試合）を戦い、その勝率で順位を決めるスポーツである。この試合数は他のプロスポーツと比較しても非常に多く、プロ野球選手はこの過酷なスケジュールの中で、コンディショニングの維持、身体づくりや野球技術の習得が求められる。当球団ではこうした環境下で計画的かつ効果的な選手育成を行うために、スポーツサイエンスを活用した育成システムの構築を進めており、その一環として、2024年から動作解析システムを導入し、スポーツバイオメカニクスの観点から選手の技術評価を始めた。

野球のパフォーマンスを規定する変数はいくつか存在するが、投手では球速が一般的に用いられており、当球団においても同様である。一方、打者では打球速度を高めることが重要であるが、これに最も深く関わるスイング速度のみでは選手のパフォーマンスを正しく評価することは難しく、打者に対する動作解析を用いた介入方法には検討の余地がある。

本発表では、当球団における動作解析を活用した選手育成の取り組みについて具体例を交えながら紹介し、より良い介入方法について模索・検討していきたい。

ランチョンセミナー

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[RS-04] ランチョンセミナー④／公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

協力:公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

座長:伊坂 忠夫(立命館大学副学長スポーツ健康科学部教授)

※当日8:15から受付窓口『7番』にて食事券を配布します。(先着順定員制)

[ランチョン4]

スポーツの歴史と文化と価値

*阿部 衛¹、三谷 舜² (1. 東京大学大学院総合文化研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

ランチョンセミナー

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 1302教室(教育研究棟 1街区 3階 1302)

[RS-04] ランチョンセミナー④／公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

協力:公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団

座長:伊坂 忠夫(立命館大学副学長スポーツ健康科学部教授)

※当日8:15から受付窓口『7番』にて食事券を配布します。(先着順定員制)

[ランチョン4] スポーツの歴史と文化と価値

*阿部 衛¹、三谷 舜² (1. 東京大学大学院総合文化研究科、2. 中京大学スポーツ科学部)

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団は、スポーツを通じ、夢の実現や、より高い目標に向かってチャレンジするアスリートや研究者を応援しています。本セミナーでは、YMFSスポーツチャレンジ研究助成卒業生による、研究発表を行います。

◆阿部 衛 東京大学大学院総合文化研究科 (YMFS研究助成 第17・18期)

「古代ローマ帝政前期における運動競技」

「ローマ帝政前期、ローマ帝国が地中海世界で覇権を確立する中、オリンピア祭に象徴される古代ギリシアの運動競技祭は急増し、地中海全域に広がって国際的な性格を強めた。本報告では、これまでの政治的・文化的な視点に偏った分析を見直し、競技そのものの社会的意義に注目する。特に競技を担った「競技者」の活動や社会との関わりを明らかにすることで、当時の運動競技のあり方や身体文化の特徴を新たに考察しようとするものである。」

◆三谷 舜 中京大学スポーツ科学部 (YMFS研究助成 第14期)

「スポーツ用具と社会の関連に着目した研究の着想と展開：『軟式ボールの社会学』より」

「近代スポーツの日本的解釈」として、軟式ボールによる野球、ソフトボール、テニスを位置付けた『軟式ボールの社会学』（三谷舜2025）は、スポーツ用具と社会の関係に着目した研究である。本書は、「軟式ボール」に注目することで、スポーツを構成する「用具」が、おもしろさなどの内在的価値をいかに創造し、それを人々がどのように受容・発展させてきたのか、その力学を明らかにしようとするものである。本ランチョンセミナーでは、軟式ボールによる競技を「近代スポーツの日本的解釈」として位置付けるまでの検討過程と、その社会学的な射程に加え、着想の契機や研究デザインの構築過程について報告する。

ランチョンセミナー

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[RS-05] ランチョンセミナー⑤／一般社団法人大学スポーツ協会

協力:一般社団法人大学スポーツ協会、株式会社KEIアドバンス

座長:一般社団法人大学スポーツ協会

※当日8:15から受付窓口『7番』にて食事券を配布します。(先着順定員制)

[ランチョン5]

ジェネリックスキル調査から考える運動部学生の育成支援

探究型教材を活用した学生の課題解決力の強化

*山本 啓一¹ (1.北陸大学教授)

ランチョンセミナー

📅 2025年8月28日(木) 12:20 ~ 13:20 📍 2301教室(教育研究棟 2街区 3階 2301)

[RS-05] ランチョンセミナー⑤／一般社団法人大学スポーツ協会

協力:一般社団法人大学スポーツ協会、株式会社KEIアドバンス

座長:一般社団法人大学スポーツ協会

※当日8:15から受付窓口『7番』にて食事券を配布します。(先着順定員制)

**[ランチョン5] ジェネリックスキル調査から考える運動部学生の育成支援
探究型教材を活用した学生の課題解決力の強化**

*山本 啓一¹ (1.北陸大学教授)

2023年～2024年にかけてUNIVASがアカデミックパートナーのKEIアドバンスと共同で実施した「運動部学生におけるジェネリックスキルに関する調査研究」の結果を基に、運動部学生の社会人基礎力の特徴を捉え、運動部学生をどのように育成していくかについて、UNIVASとKEIアドバンスが提供する学習支援教材「運動部学生のためのスポーツ探究ことば入門」を活用した支援プログラムを、本教材の制作協力者の一人である北陸大学の山本啓一教授をお迎えしてお話しいたします。

調査結果から、運動部学生は一般学生と比較して対人基礎力や対自己基礎力などのコンピテンシーが高い一方で、知識を活用して課題を解決するリテラシーが低い傾向があること、また、コンピテンシーの中でも対課題基礎力に一般学生との有意差が認められないなどの傾向が示されました。こうした特性を踏まえ、運動部学生の課題解決力をどのように育成し、競技と学修を両立させる環境を整備するかについて考察するとともに、現場での指導・育成の工夫を紹介し、参加者の皆さまと共に実践につなげるヒントを共有する場とします。